
ペルソナ2
INNOCENT SIN.
罪
高瀬美恵
電撃文庫

ペルソナ2 罪

INNOCENT SIN.

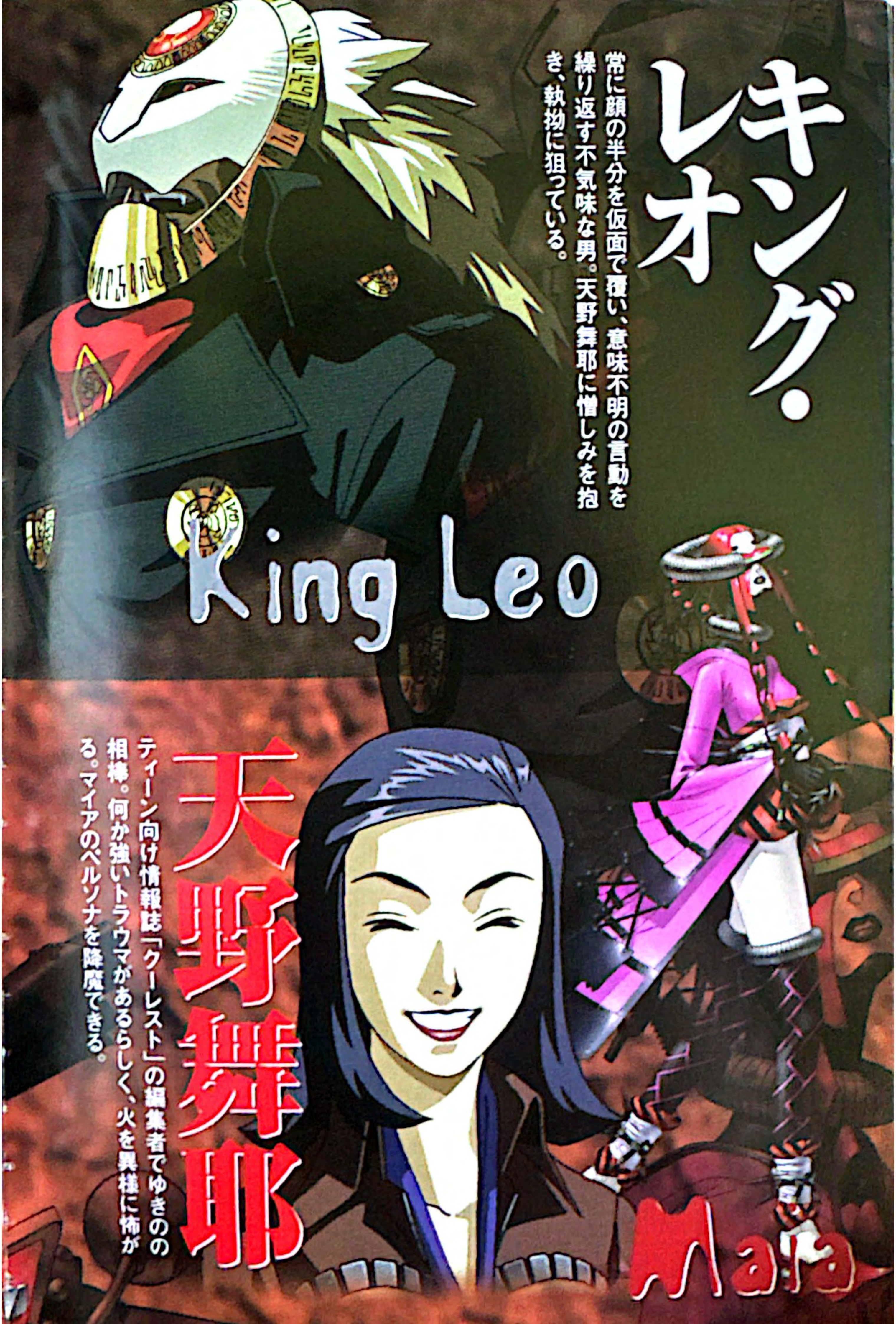
高瀬美恵


吉栄杏奈
将来有望な短距離走者だったが、交通事故で負傷し選手生命を絶たれた。ジョーカーに会ったことから仮面党に入り、レイディ・スコルピオンの称号を得る。
Lady Scorpion


Vesta
OStrich
黛ゆきの
フリーカメラマン。男勝りで気っ風のいい姉御。困っている人を放っておけない性格で、杏奈にもちょっかいをかけてくる。ヴェスタのペルソナを降魔できる。


ジョーカー
自分の携帯電話から自分の携帯電話に電話すると現れ、夢をかなえてくれるという、都市伝説中の人物。その実体は、仮面党の党首。
Joker
周防達哉
七姉妹学園3年生。かつて杏奈のクラスメイトだった。孤独を好むクールな性格で、クラスの中では浮いている。ヴォルカヌスのペルソナを降魔できる。
Volcanus


プリンス・トーラス
杏奈曰く〝虚栄心の強い軽薄な男〟。その実体は、かつてはさえない一発屋で今は売れっ子プロデューサーの佐々木銀次。
Prince Taurus
リサ・シルバーマン
七姉妹学園の2年生で、いつも周防につきまとっている。トーラスがプロデュースしたMUSESのメンバーにされた。エロスのペルソナを降魔できる。
Eros



キング・レオ

常に顔の半分を仮面で覆い、意味不明の言動を繰り返す不気味な男。天野舞耶に憎しみを抱き、執拗に狙っている。

King Leo

天野舞耶

ティーン向け情報誌「クーレスト」の編集者でゆきのの相棒。何か強いトラウマがあるらしく、火を異様に怖がる。マイアのペルソナを降魔できる。

Maya



クイーン・アクエリアス

Queen Aquarius

暗い野心を秘めた美女。その実体は、女優の黒須純子。美と若さを維持するためジョーカーと契約した。



三科栄吉

Rhadamanthys

春日山高校2年生で、ミッシェルと名乗りバンドのヴォーカルと番長を兼任している。自意識過剰でナルシーな性格。ラダマンティスのペルソナを降魔できる。

ペルソナ 2

P E R S O N A

罪

——吉栄。おまえ、中距離に転向する気はないか。

中学のときのコーチ、顔はろくに覚えていないのに、そのセリフと声だけははっきり記憶に残っている。

何度も繰り返し聞かされたからだろう。うちの中学には短距離の選手は結構揃っていたので、コーチとしてはどうしても中長距離のスターが欲しかったらしい。

わたしは断り続けた。性格的に向いてませんから。練習がキツすぎて。持久力ないし。あとはなんだっただろう。適当に並べた言い訳の数々。いちいち覚えてない。

ほんとは、理屈なんてどうでもよかった。ただ、わたしにはどうしても短距離しか走れなかったのだ。

やがて、コーチは転向を言い出さなくなった。わたしが自己ベストを次々と塗り替えていったから。高校に進むころには、わたしは「陸上界期待の新星」という看板を背負うほどになっていた。

スタートの一瞬が好きだった。クラウチングスタートの姿勢をとった瞬間、周囲の景色が古い写真のように色褪せて遠ざかる。視界に入るのは、目の前にのびた一本の道だけ。全身を研ぎ澄ましてスタートの合図に集中し、音と同時に飛び出す。あとはもう、何も聞こえない。何も見えない。一緒に走っているはずのライバルさえ、意識に上らない。勝負はたったの数秒で決まる。胸でテープを切った瞬間、音と色彩が戻ってくる。

あの刹那の歓喜を知ってしまってからは、長い距離を走ることなんて考えられなくなった。筋肉を瞬間的に酷使したあとの痺れるような疲れは、何にも増して心地よかった。あれほどの緊張感を、中長距離で持続することなんてできっこない。わたしには確かに持久力がなかった。肉体よりも、精神的に。

競技を終えた後、決まって駆け寄ってくる後輩がいた。一学年下の、片山典子。

ノリコはわたしの周りをぴょんぴょん飛び跳ねて、女の子らしい刺繍をしたタオルをさし出す。

「この調子ですよ、この調子っ。目標はオリンピックですよおお！」

はしゃぎ回るノリコの子供っぽさに、わたしは苦笑した。

オリンピック？　笑わせないでよ。

鼻先であしらうふりをしながら、しかし内心ではちょっとばかりその気だった。わたしは高校女子のレコードホルダーで、陸上関係者の間では「十年に一人の逸材」と注目されていた。世界の舞台で走ることは、決して遠い夢物語ではなかった。

いつか――

世界中の人たちが、テレビに映る私の姿に釘づけになるだろう。数万人の大歓声の中、わたしは先頭で、堂々とテープを切る。そんな日がくる。いつか。きっと。

本気で、そう信じかけていた。

バカだった。

明日のことなんて誰にもわからないのに。未来を手に入れたつもりで浮かれていたあのころ。

今でも時々、夢を見る。勝利を確信し、誇らしげに胸を反らせて、真っ白いテープを切る夢。けれど、レースを終えても音も色彩も戻ってこない。不思議に思って周囲を見回すと、そこには誰もいない。歓声を送る人々も、走り終えたライバルたちも。わたしはたった一人で、モノクロームの競技場に立っている。

ふと見下ろすと、右足がぐしゃぐしゃに砕けている。無彩色の世界の中で、わたしの足から流れ出す血だけが鮮やかに赤い。みるみるうちに血だまりが広がって、わたしは自分の血の海に溺れそうになる。悲鳴を上げて、そこで目が覚める。

なぜ今更、こんな夢を？　もう、走ることになんの未練ももってないのに。

自分の気持ちがわからない。わからないから、考えない。

倦怠に身をひたして、時が過ぎてゆくのをじっと傍観する。そんな時間が一番好きだ。

日毎夜毎、わたしは微睡みながら、世界の終わりを待っている。

1

「……奈さんだったらどうします？　ねえ？　杏奈さん。杏奈先輩」
目の前のテーブルをバンバン叩かれて、吉栄杏奈はやっと夢想から覚めた。
目を上げると、やや癖のある髪を茶色く染めた、すっとぼけた少年の顔がある。本人は茶髪とかピアスとかで格好をつけているつもりらしいが、もともとが童顔だから、あまり締まらない。
自分に話しかけていたのかと初めて気がつき、杏奈は投げやりに「何」と尋ねた。
童顔の少年――島崎光雄は、ちょっと傷ついたような顔になって、唇を尖らせた。
「ひでぇなあ。何、だって。さっきから一生懸命話してたのに、杏奈さん、オレのことなんて全然無視だもんなあ。泣けるぅ」
大げさに、指で涙をぬぐうような真似をする。
光雄はお調子者だ。他の連中は、無口で無愛想な杏奈を敬遠してめったに話しかけてこないのだが、この少年はそういう屈託と無縁だった。

珠間瑠市夢崎区、クラブ・ゾディアック。この近隣の高校生たちのたまり場だ。大して広くもない店内は、今日も混み合っている。叩きつけるような重低音が床や壁を震わせ、立ちこめた紫煙が視界を曖昧にしていた。

「なんの話」

杏奈は気のない声で尋ねた。光雄は泣き真似をやめて、テーブルの上に身を乗り出してきた。

「ちゃんと聞いてくださいよ。ジョーカー様ッス。ジョーカー様の話」

「ジョーカー？　トランプの？」

「違う違う。杏奈さん、ホントになんにも知らないんですねぇ」

光雄は目の前で指を立ててチッチッチと振り、

「最近流行ってる噂ッスよ。ウ・ワ・サ」

スタッカートの発音でそう言った。

杏奈は、もともと大してもっていなかった興味をさらに失い、ジャケットのポケットから煙草を取り出して一本くわえた。

光雄は噂好きだ。杏奈には理解できない。なぜ、他人のことにそんなに関心をもてるんだろう？

光雄ばかりではない、このクラブにたむろしている連中はみんな——いや、クラブになんて出入りしそうにない、一見真面目そうな子たちだって、同じこと。

みんな噂に飢えている。誰も知らない噂を一番早く仕入れて、友達に話すことを楽しみにしている。

ありきたりな怪談、面白くない笑い話、明らかに嘘だとわかるナンセンスなネタ、芸能人のスキャンダル。なんでもいいのだ。退屈をまぎらせ、「ねえ、知ってる……?」という秘密めかした連帯感を感じさせてくれるものならば。

「それが、ちょっと面白いっていうか、気持ち悪いっていうか、怖い話なんスよ。自分の携帯に自分で電話すると、普通、話し中になると思うじゃないッスか。ところが、そうならずにジョーカー様に繋がることがあるんです。そんで、ジョーカー様どこにいらっしゃるんですかって聞くと、おまえの後ろだって声がして、自分のすぐ後ろにジョーカー様が現われるんですって……うぎゃあああああ!」

たまたま背後を通りかかった常連客の誰かが、ふざけて光雄の背中を撫で上げていったので、光雄は素っ頓狂な悲鳴を上げた。

杏奈は顔にかかる前髪をかき上げ、煙草の煙を細く吐き出して尋ねた。

「ジョーカーって何」

「詳しいことはわかんないッス。うちの新聞部でも、情報を集めてる最中なんです」

珠間瑠市には二つの高校がある。杏奈の通っていた七姉妹学園と、平坂区にある春日山高校である。

七姉妹は通称「セブンス」と呼ばれ、勉強にかけてもスポーツにかけても、優秀な生徒が集まると言われている。一方、春日山高校はセブンスに比べるとパッとせず、「カス校」というありがたくないあだ名をつけられているのだった。

光雄は七姉妹学園新聞部に所属している。杏奈に近づいてきたのも、もとはといえば、「七姉妹学園の悲劇のスター」の談話を取ろうという腹づもりだったらしい。何度も追い払われて、ようやく取材は諦めたようだが、それでも何かと杏奈にかまってくる。本人はしれっとした顔で、「オレ、杏奈先輩のファンですから」と言い切っている。

「噂によると、仮面をかぶったおっかない男らしいんですけどね。そんで、呼び出した人の願いをなんでもかなえてくれるんです。でも、呼び出しておいて何も願いを言えなかった人は、夢見る心を奪われて、影人間になっちゃうんですよ」

「影人間？」

「よくわかんないけど、そういう噂ッス。オレも試してみたんですけど、うまくいかなかったんです。ジョーカー様にも好みがあるのか、あるいは電話が殺到していて忙しかったのか……どっちかッスね」

光雄は笑った。

「そんでね、オレが聞きたかったのは、杏奈さんだったらどんな願い事をするのかなあってこと。どうします？　もし、なんでも願いがかなえられるなら？」

杏奈は返事をしなかった。ばかばかしい。そうつぶやいて、煙草をくわえ直した。
遠巻きに話を聞いていた女の子たちが近寄ってきた。光雄の語る噂話に興味があるらしい。友達がジョーカー様を呼び出したとか、自分もやってみたいけど勇気が出ないとか、興奮した口調で話し始めた。
小鳥のさえずりのような高い声が耳障りだった。杏奈は立ち上がった。
「あれ。お帰りッスか、杏奈さん。待って、待ってくださいよぅ」
あわてたような光雄の声にも振り返らず、杏奈は出口に向かった。
背後で女の子たちがわざとらしい笑い声を上げている。杏奈が出て行ってくれたので、ほっとしている様子だった。
建物を出ると、青白い月が夜空にかかっていた。杏奈は歩み出そうとして一瞬よろけ、壁に手をついた。道路のちょっとした段差に足を取られたのだ。
奥歯をぐっと食いしばる。不機嫌なため息が漏れる。傍目にはほとんどわからないほどだが、杏奈は軽く足を引きずっている。
事故の後遺症は、一生消えないと言われた。日常生活に支障はない。ただ、時々こうして無様な失態をさらすだけ。
杏奈は人目を避けて、暗い裏通りに入っていった。
悪臭が鼻を刺す。飲食店の生ごみが捨てられ、太った猫が残飯に半身を突っ込んで食料を漁

っている。猫は杏奈を見ると、自分の縄張りを荒らすなとばかりに忌々しげな鳴き声を上げ、逃げていった。

こんな道、普段は絶対に通らない。

今夜はなぜか、ここで少し時間をつぶしたい気分だった。表通りの明るさが届かない、誰からも忘れられたようなこの場所で。

壁にもたれかかって煙草を取り出す。火をつけて、肺の奥まで煙を吸い込むと、ようやく気分が落ち着いた。

まだ長い煙草を捨て、[illegible]にじる。バッグを肩にかけ直したとき、ふと、さっきの話を思い出した。

噂ッスよ。ウ・ワ・[illegible]

はずむようなスタッ[illegible]たらない。みんな、共通の話題が欲しくて、自分たちで噂をつくり上げて楽しんでるた[illegible]ショーカー様？　つまんない子供だまし。そんなもの、いるわけがない。

杏奈はバッグの中に手をつっこんだ。滅多に使うことのない携帯電話を、乱暴につかみ出す。素早く、自分の番号をプッシュした。携帯を耳に押し当てながら、杏奈は自分の行動のばかばかしさにため息をついた。

何をやってるんだろう。考えてることと行動とが全然噛み合ってない。それほど飲んでない

のに、酔ってるんだろうか。バカみたい。新聞部の子の言うことなんて、これっぽっちも信じてないのに。どうかしてる……。

何も聞こえなかった。

くだらない。そうつぶやいて、通話終了のボタンを押そうとしたときだった。

ルルル……。

唐突に、呼び出し音が聞こえてきた。杏奈はぎょっとして携帯を握り直した。

何。この音。

幻聴かと思った。しかし、確かに携帯は呼び出し音を鳴らし続けている。

まさか。そんなはずはない。自分の番号に自分で電話したら、ツーツーと話し中の音がするに決まってる。こんな音が聞こえるはずがない。

カチッとかすかな音がして、呼び出し音が途切れた。杏奈は呆然として、液晶画面を見つめた。

再び携帯を耳に押し当て、ゆっくり息を吸い込む。

何も聞こえなかった。だが、誰かが「向こう側」で耳を澄ませている気配がはっきり感じとれた。

故障じゃない。この電話は、確かに誰かに繋がっている。

でも、誰に？

杏奈は押し殺した声で問いかけた。
「——ジョーカーなの？」
電話の向こうで、低く笑う声がした。冷たく澄んだ声だった。
杏奈は携帯を取り落としそうになったが、あわてて握り直した。
「どこにいるの？　ジョーカー」
「汝が後ろに」
声は、携帯ではなく、真後ろから聞こえた。
杏奈は携帯を耳から離して振り返った。狭い裏道を塞ぐようにして、細身の影が立っていた。蠟のような白い肌が、薄闇にぼうっと浮かび上がっている。大きく笑った口。片目の周りに描かれた、繊細な紫色の隈取り。頭部には、左右に張り出した奇妙な飾りがついている。仮面とわかっていても、その異形の姿は杏奈をたじろがせた。
「我はジョーカー。おまえの望みはなんだ？」
言葉が出てこなかった。まさか——まさか、こんな馬鹿げた噂が実現するなんて。夢でも見ているのだろうか。杏奈は無言で、異形の男を見つめた。
仮面の口が笑っている。両端のつり上がった唇が、無気味に赤い。
ジョーカーはゆっくり一歩踏み出し、軽く両手を広げた。
「どうした？　掟は知っているだろう？　我を呼び出して望みを口にせぬ者は、裁きを受ける

ことになる。夢見る力を奪われ、他者からその存在を忘れられ、生ける屍――すなわち影人間となる」

同じだ。光雄から聞いた話とまったく同じ。

杏奈は笑い出したくなった。からかわれてるんじゃないかという気がした。だが、顔がひきつるだけで、笑顔にはなれない。

――夢ではないのだ。

ジョーカーは、杏奈が開いた禁断の扉を通って現実世界に現われてしまったのだ。

「望みは？」

ジョーカーは同じ問いを繰り返した。杏奈は小さく首を横に振った。

ジョーカーの声が、面白がっているような響きを帯びる。

「言えないのか？　ならば掟に従って、おまえの力をもらい受けよう。夢見る力を我に与えよ……」

「……ない」

杏奈は答えた。

「夢見る力なんて、そんなものもってない」

声を出すと、ようやく少し気分が落ち着いた。

「どういう意味だ」



「わたしには夢なんてない。事故に遭って以来、そんなものは綺麗さっぱりなくしてしまったから」
「事故？」
ジョーカーは小さく聞き返した。
余計な一言だっただろうか。杏奈は沈黙した。
細い指を仮面の顎に当ててしばらく黙考した後、ジョーカーは言った。
「そうか。おまえか、七姉妹学園の吉栄杏奈。交通事故で選手生命を断たれたという……」
「なぜ、そんなことを？」
杏奈は驚いて尋ねたが、ジョーカーはそれには答えずに言った。
「ならば、おまえの望みは決まった。その足を治して、再び走れるようにしてやろう」
杏奈はまじまじとジョーカーを見た。
もう一度、走れるように？　あの凝縮された至福の時を、再び自分のものに？
ジョーカーは、杏奈がただちに感激の涙を流し、服従を誓うとでも思っているのだろうか。
じっと杏奈の反応を観察している。
しかし、杏奈は平静だった。ジョーカーの提案は、なんの興奮ももたらさなかった。
もう一度走れる。陸上部のエースに戻れる。そう考えても、少しも心がはずまない。むしろ、安眠を邪魔されたような不快感を感じた。

余計なお世話。せっかくこの無気力（むきりょく）に慣れ親しんだところだってのに、面倒（めんどう）くさい――。

「いらない。そんなもの」

吐き捨（す）てるような口調になった。ジョーカーは驚いたようだった。

「望まないというのか？　おまえは再び注目を集め、栄光を手に入れることができるのに……」

「くだらない」

即座（そくざ）に言い捨てた。

バッグを肩にかけ直して、ジョーカーを見つめたまま一歩後じさる。

「事故の直後なら、ありがたく飛びついたかもしれない。だけど、もう無理」

「走りたくないのか？」

「ない」

嘘ではなかった。強がりでもない。

酔っぱらいの運転する車にはねられ、右足を粉々（こなごな）に砕（くだ）かれたあの日。杏奈の中で何かが壊（こわ）れた。折れたのは足じゃない、心だった。杏奈は、絶望の心地よさを知ってしまったのだ。

ジョーカーは、足を完治（かんち）させることはできるかもしれないが、心まで治すことはできない。

刹那（せつな）の歓喜（かんき）をむさぼり、喜びに震える貪欲（どんよく）な心。それがなければ、走れない。

ジョーカーはしばらく黙（だま）っていた。次に彼が口を開いたとき、その声からは嘲笑（ちょうしょう）的な響きが消えていた。

「何もないのか？　望むことは、何も？」
「ない」
「復讐は？　おまえを車ではねて選手生命を断った男を、破滅させてやることもできるぞ？」
「興味ない」
杏奈はそっけなく答えた。
加害者を恨んだことがなかったとは言わない。それどころか、事故の直後は、殺してやりたいほどの憎悪を覚えていた。だが、今ではそんな気持ちも薄らいだ。
彼を許したからではない。あの事故自体が、杏奈の心の中で「どうでもいいこと」になっていたからだ。
杏奈は疲労を感じた。ジョーカーとこうして向き合っていると、それだけでひどくエネルギーを消耗するような気がする。しかしそれは不快ではなく、むしろ心地よいけだるさだった。
「――わたしはね」
杏奈はジョーカーの仮面を見つめた。自然に、苦い笑いが口元に浮かんだ。
「何もしたくない。走るのも嫌だし、復讐も面倒くさいだけ。世界が終わる日まで、何もせずにただぼーっとしていたい。ぼーっとして、何もかもが終わるのを見ていたい。ただ、それだけ」
ジョーカーは杏奈の顔を見ていた。無表情なはずの仮面が、なぜか悲しげに見えた。

やがて、ジョーカーは囁くように告げた。

「私と一緒に来ないか？　私には実現させたい計画がある。加わる気はないか？」

「……え？」

「私に力を貸してくれないか？」

「……何？」

唐突な提案だった。杏奈は訝しんだ。

「どういうこと？　あんたは、夢見る力とやらを求めているんじゃないの？　わたしはそんなものもってない。本当に。あんたに協力できることなんて、何も……」

ジョーカーは無言で手を差し伸べた。意外にほっそりした、綺麗な手だった。杏奈は戸惑いながらジョーカーの手を取った。

自分でも、なぜそんなことをしたのかわからない。無視して立ち去ることもできたはずだ。だが、杏奈は自然にジョーカーの手に自分の手を重ねていた。ジョーカーの指は細くて、冷たかった。

「おまえは今日から我が仮面党の一員となる。イン・ラケチの成就のために、力を貸してくれ」

ジョーカーは囁いた。

仮面党。イン・ラケチ。耳慣れない言葉だ。杏奈は眉を寄せた。

突然、鋭い光に目を射られた。ごく近い場所で、何かが爆発したかのようだった。

杏奈は反射的に目をつぶり、ジョーカーにゆだねていた手を振りほどこうとした。だが、ジョーカーの手は意外に力強く、振り払うことができなかった。

衝撃は光だけだった。何も聞こえない。爆発音も、騒ぐ人々の声も。

目を開けてみて、杏奈は息を呑んだ。周囲の光景が一変していた。

ついさっきまで、確かに暗い裏道に立っていたはずだ。生ごみの臭いのする、野良猫が徘徊する、狭い路地に。

今、杏奈が立っているのは、見知らぬ広間のような場所だった。足元は、複雑な曼茶羅を描くモザイクの硬い床。同じくモザイクの円柱が不規則に立ち並んで、遠近感を曖昧にしている。周囲に壁は見えない。天井も見えない。とてつもなく広い部屋の真ん中に杏奈は立っていた。

一人きりだった。いつのまにか、つないでいたはずの手はほどかれて、ジョーカーの姿は消えていた。

周囲を見回しても、方向感が得られるどころか、逆に、圧倒的なその広さに感覚がおかしくなるだけだった。おそるおそる歩き出そうとしたとき、突然、杏奈の目の前に青い影が出現した。

杏奈は悲鳴を呑み込んだ。それは、ゆらゆらと炎のように揺らめきながら、少しずつ実体化した。

髑髏だ。透き通った青い髑髏が、宙に浮かんで杏奈を凝視している。

——冥府に輝くは五なる髑髏。

声が響いた。それは、空気を震わせることなく、杏奈の脳に直接叩き込まれたかのように伝わってきた。
杏奈は頭を押さえた。無気味な髑髏から目をそらすことができない。
髑髏は歯をむき出して笑っているように見えた。
――天上に輝くは聖なる十字架。
頭蓋が割れそうに痛み、杏奈はこらえきれずに悲鳴を上げた。
――蠍の星座を負いし者よ、我に従え。
世界がぐるぐる回り始めた。
いや、杏奈の意識がおかしくなってしまっただけかもしれない。視点が定まらない。足元が揺れる。渦の中に放り込まれてしまったかのように翻弄される――。
突然、身体の奥底にすさまじい力が生じた。
血流が一瞬にして沸騰したかのような衝撃。何か、とてつもない力をもったものが、心臓の殻を食い破って躍り出たかのような。
異変は一瞬でおさまった。苦痛はなかった。全身に鳥肌が立っていたが、自分に何が起きたのかまったくわからなかった。
気がつくと、青い髑髏は消えていた。杏奈のかたわらに、ジョーカーが立っていた。
「何……なんなの……？　今のは？」

「おまえはペルソナの力を手に入れた。それは、おまえに影のように付き従う、もう一人の自我。おまえに新たな力を与えてくれるだろう」

杏奈はおそるおそる自分の首筋に手を当てた。熱があるような気がする。だが意識は今までよりも一層鮮明だった。

「ペルソナって……いったい……」

口にしかけた疑問は、途中で途切れた。

瞬き一つする間に、不思議な大広間は消えていた。杏奈は暗い路地にたった一人で立っていた。ジョーカーの姿はどこにもなかった。

――夢？

杏奈は足元に落ちている携帯電話を拾い上げた。自分の番号への発信記録が残っている。

夢じゃない。

冷たい指の感触を、まだはっきり覚えていた。

風など通らぬはずのごみごみした裏道に、一瞬、涼やかな微風が通り過ぎた。風は、杏奈の知らない花の香りを含んでいたようだが、すぐに悪臭にまぎれてわからなくなった。

＊

翌日、杏奈はゾディアックでいつものようにはしゃぎ回っている光雄をつかまえた。

光雄は、杏奈のほうから声をかけてきたので舞い上がった。「杏奈さん!」とまとわりついてくる。杏奈は冷たく押しのけた。
「話があるんだけど」
「杏奈さんがオレに話ッスか!?　うあああ、感動ッス!　みんな聞け、杏奈さんがオレに話だってぇぇ!!」
「静かに」
ぶん殴りたいのをこらえて、光雄の鼻先に指をつきつけた。
「人に聞かれたくないの。こっちへ」
隅の席へ連れて行く。光雄はスキップしながらついてきた。
狭いシートに腰かけて、杏奈は単刀直入に切り出した。
「昨日言ってたジョーカーの話。詳しく聞かせてほしいんだけど」
「え?　どうしてッスか?　杏奈さん、興味なさそうだったのに」
「いいから。教えて」
「まさか、試してみる気になったんスか?」
もう試したのだとは言えない。杏奈は無言で光雄を睨んだ。
「あ、いえ、冗談ッス。何を聞きたいんスか?」
「噂の出所は?　いつごろから広まってるの?」

「そんなに昔じゃないと思います。オレが聞いたのは十日ぐらい前。情報源はホントは内緒(ないしょ)なんスけど……あ、言います言います。同じ新聞部の部員ッス。オレと同じ、一年のチカリンってやつが教えてくれました」

「――ジョーカーは実在すると思う？」

杏奈は光雄の目を見て尋ねた。光雄は笑って答えた。

「もちろんッス。するに決まってます」

「なぜ？　ばかばかしい噂だと思わない？」

「だって……」

何か、ジョーカーの正体(しょうたい)に関する手がかりが得られるかもしれない。

しかし、杏奈の期待に反して、光雄はヘラヘラ笑いながら全然別のことを言った。

「杏奈さん、七姉妹学園の呪(のろ)いって知ってます？」

「……え？」

「杏奈さんはもう学校来てないから知らないかもしれないけど。セブンスは呪われてて、校章をつけてると、顔が崩(くず)れちゃうって言われてるんです。だからオレ、最近、校章はずしてるんです。ほら」

光雄は自分の制服のポケットを示した。そこにあるはずの、七つの星をデザインした校章は、確かに見当たらなかった。

杏奈はいらいらしてきた。光雄のバカ。話が全然通じていない。

「そんな噂はどうでもいい。わたしが聞いてるのはジョーカーの……」

「変な噂ですよね。普通、デタラメだと思いますよね。でも、そうじゃないんスよ。最近、この店に来るセブンスの生徒、減ってると思いませんか？　前は常連だったユカさんとかコージ先輩とか、最近来ないじゃないッスか。二人とも、ホントに顔が崩れちゃったからなんですよ。いつも包帯巻いててね。美男美女だったのに、気の毒に……」

駄目だ。時間の無駄だ。

光雄からの情報収集を諦めて、席を立とうとした。光雄は探るような目で杏奈を見て、素早く尋ねた。

「どうしてだと思います？　なんて、校章をつけてると顔が崩壊するなんて噂が広まったんでしょうね？」

「……」

「オレね、最初にこの噂を聞いたとき、思ったんです。ばかばかしい噂だなあ、いくらなんでも信憑性ねえよなあ、こんなの記事にできねえよって。きっとセブンスの生徒で、病気にかかって顔に湿疹とかできちゃった子がいるんだろうな。その子の話に尾鰭がついて、こんな噂になっちゃったんだろうな……そう思ったんです」

杏奈は光雄の顔を見直した。

べらべらと脈絡のないことを話しているのかと思ったが、そうではなさそうだ。光雄の目は真剣だった。彼は何かを伝えようとしている。

「そう考えるのが普通ッスよね。でも、違ったんです。実例があって、そこから噂が広まったんじゃないんです。誰かが流した噂があって、それがホントになっちゃったんです」

杏奈は眉をひそめた。

やはり、光雄の話に真面目に耳を傾けるのは時間の無駄だろうか。言ってることが支離滅裂だ。

しかし——彼が真剣であることは確かだった。しかも、何かに怯えている。いつもより早口なのは、恐怖をまぎらわせるためらしかった。

「他にも、いろんな噂が流れてるんです。カス校の校章が魔除けになるとか。おかげで、前はカス校の連中なんて全然モテなかったのに、今じゃセブンスと人気逆転しちゃってね。店ん中、見てください。カス校の連中が幅をきかせてるでしょう……」

杏奈はゾディアックのフロアを見渡した。

制服の少年が何人かうろついている。青い学生服は、確かにカス校こと春日山高校のものだ。きゃあきゃあ笑い転げながら群がっている女の子たちは、少し前まではセブンスの男子をちやほやしていた連中だった。

「最近、なんだかおかしいんです。いろんな噂が、ホントになってるんです。前だったら、そ

んなのウソに決まってるじゃんって笑い飛ばしたような噂が、どんどんホントになってるんです。珠閒瑠市に何かが起きてるらしい——噂が現実化するような力がはたらいてるらしいって言う人もいます」

「まさか……」

杏奈は顔を強ばらせた。

だが、強く否定することはできなかった。現に杏奈はジョーカーに会った。都市伝説にすぎないはずの怪人に。

途方もない妄想だ。そんな馬鹿げたことが、起きるはずがない。

「ただの仮説ですけどね。ジョーカー様の噂にしても、誰かが故意に流してるような気がします。目的はわかんないッスけど。杏奈さんも、気をつけてください。自分に不利な噂とか、流されないように」

光雄は立ち上がった。杏奈は唇を噛んだ。

噂が現実になる街。都市伝説が本当になる街。

そんなことが、ありえるのだろうか？

＊

街には、いろいろな噂が流れていた。

セブンスの校章をつけていると顔が崩壊する。カス校の校章は魔除けになる。平坂区のラーメン屋は、裏でひそかに武器の売買をしている。セブンスのトイレには「花子さん」が出る。セブンス中庭にある校長の銅像は夜になると動く……。

ばかばかしい噂ばかりだ。以前だったら、即座に笑い飛ばされ、数日ともたずに忘れられていったに違いない。

しかし、今は違った。街の人たちは真面目に噂を囁き合い、情報を交換し、その内容に喜んだり怯えたりしている。若者ばかりではなく、いい歳の大人たちも大真面目に噂を語り、都市伝説を論じていた。

光雄の言った通りだった。現実が噂を呼ぶのではない。噂が現実をつくっている。この街には、ただならぬ力がはたらいている。

杏奈は、ジョーカーのことを考え続けていた。

やはり、あれは夢ではなかった。今や珠閒瑠市では、都市伝説はただの伝説にとどまらない。謎の怪人が現身の存在となって、街の闇を徘徊している。

だが、杏奈に変化はなかった。

あのとき感じた異様な力——ペルソナ——は、もうまったく感じられない。一瞬目を覚ました狂暴な獣が、また寝入ってしまったような感じだった。

なぜだろう。ジョーカー。実在しているなら、なぜ姿を現わさないのだろう。あのとき杏奈

に力を貸せと言ったのは、なんだったのだろう？

割り切れない気分のまま、数日がすぎた。

杏奈は再び、無気力で何もすることのない日常に戻っていた。自分の部屋でベッドに寝転がって雑誌をめくっていたとき——突然、携帯電話が鳴り出した。

久々に聞く呼び出し音だ。杏奈には、携帯の番号を教えている友人などほとんどいない。びくっとして雑誌を置き、ベッドの上に身体を起こした。バッグの中に入れたままの携帯が、単調な電子音を鳴らし続けている。

杏奈はベッドから下りて、床に転がっているバッグを手に取った。

携帯をつかみ出し、ディスプレイに示されている発信者ナンバーを確認する。もしかすると、そこに表示されているのは自分の番号かもしれない。だったら、どうすればいい。この電話に出たら、どうなる……。

しかし、発信元は知らない番号だった。杏奈は少し安心して、通話ボタンを押した。

（吉栄杏奈さんだね？）

聞き覚えのない男の声が言った。

「……あんたは？」

（名乗るほどの者ではない。トーラス、と言っておこうか）

変な電話だ。悪戯だろうか。

切ろうとした杏奈に、トーラスと名乗る男は素早く言った。

(切らないでくれよ。仮面党からの呼び出しだ)

「……え?」

(明日の午後九時、クラブ・ゾディアックに来い。奥に、特別のメンバーしか入れない扉がある。君が来たらわかるようにしておく。その扉から入って三階に上がれ。VIPルームで待ってる)

「……ちょっと待ってよ。いったい、なんの……」

(遅れるなよ)

一方的に喋って、電話は切れた。

悪戯? いや、電話の声は確かに「仮面党」と言った。あの夜、ジョーカーが口にした名だ。半信半疑だったが、杏奈は翌日の夜、指定された時刻にゾディアックに向かった。

トーラスが言った通り、VIPルームへの扉は店の奥の目立たぬ場所にあった。黒い服を着た男が扉のそばに立っていたが、杏奈の顔を見ると、何も言わずに開けてくれた。何度もこの店に通っている杏奈ですら、こんな扉があるなんてこれまで気付かなかった。

杏奈が通ると、扉は静かに閉まった。

廊下は赤い照明に照らされている。扉一枚隔てているだけなのに、フロアの喧騒がまるで届かない。杏奈は、静まり返った廊下を歩いていった。

ややこしく曲がりくねった廊下を通って、階段を上る。三階の一番奥、重厚な扉を開いた瞬間、杏奈は立ちすくんだ。
この建物の中に、こんな部屋があるとは想像もしていなかった。真紅の絨毯に革張りのソファ、大理石のテーブル。どこかの会社の重役室のようだ。クラブ・ゾディアックの若者向けの内装とは大違いだった。
部屋には三人の人物がいた。ばらばらに置かれたソファに、それぞれ勝手に座っている。
杏奈はゆっくり視線をすべらせた。
右端は、黒いシャツに派手なネクタイの男。中央が、顔の半分を覆う奇妙な仮面をつけた男。
左端は美しい女だ。
「ようこそ、レイディ。待っていたよ」
言ったのは、右端に座った男だった。
この声には聞き覚えがある。電話をかけてきたトーラスだ。声も顔も軽薄そう、というのが杏奈の印象だった。
中央の仮面の男はまるで無関心だった。杏奈のほうを見もしない。女は、二十代半ばぐらいだろうか。妖艶な雰囲気を漂わせた美人である。豊かな黒髪が、ゆるやかに波打って背に流れている。杏奈に一瞬ひややかな視線を投げつけ、またすぐに目をそらせてしまった。
ジョーカーがいない。一瞬、だまされたのかと思った。杏奈の表情を読んだのか、トーラス

が言った。
「我々はジョーカー様に仕える仮面党幹部だ。ジョーカー様はここにはいらっしゃらない」
「……どういうこと」
「あの方は滅多に我々の前には姿を現わさない。よほどのことがない限り、仮面党の任務は我々で執り行なう。これまでは三人だったが――レイディ、君が四人目となる」
杏奈はあいているソファに腰を下ろした。
「そのレイディっていうの、やめてくれない？　わたし、そんな柄じゃないんだけど」
「ここでは本名は使わない。全員、暗号名で呼ばれる。便宜上、君をレイディと呼ばせてもらいたいんだが。不服か？」
「別に」
「紹介しよう。キング・レオ、クイーン・アクエリアス。俺はプリンス・トーラス」
キングと呼ばれた男は、あいかわらず杏奈に目を向けようともしなかった。顔の右半分を隠したのっぺりした仮面のせいか、一番取っ付きづらい印象だった。
クイーン・アクエリアスは杏奈に軽くうなずきかけたが、その態度は尊大だった。こんな小娘、と馬鹿にしているのがありありと伝わってきた。
トーラスは上機嫌らしく、杏奈に笑顔を向けてきた。まあまあハンサムといえる顔立ちだが、きっちりした服装をしているにもかかわらず、どことなくだらしのない、崩れた雰囲気が



漂っていた。ヒモとか、水商売とか、それっぽい匂いがする。

「これでようやく四つの星座が揃ったというわけだ。歓迎する、蠍座のレイディ」

蠍座。杏奈は、青い髑髏の幻を見たことを思い出した。

あのとき、確かに声を聞いた。蠍の星座を背負う者——と。杏奈は蠍座の生まれだ。

「星座が何か関係あるわけ？」

「スコルピオンは天の十字を成す重要な星座の一つ。君は来るべくしてここへ来た」

杏奈は眉を寄せた。

「……何を言ってるんだかわからないんだけど。わたしになんの用があって呼び出したの？」

「君を仮面党幹部の一人として迎えるためさ」

「仮面党って何？」

「街に流れている噂を知らないのか？　ジョーカー様を頂点とする秘密結社、それが仮面党だ」

——噂。

やはり、鍵はここにある。

「……ジョーカーが噂を操作してるの？」

トーラスはちらっと他の二人をうかがった。どちらからも、反応はなかった。

杏奈は重ねて尋ねた。

「噂を実現させてるのは仮面党なの？」

「どういう意味だ？」
「この街では、噂が現実になる。あんたたちがそう仕組んでるの？」
クイーン・アクエリアスが軽い笑い声をたてた。キングのほうは相変わらず無表情だ。トーラスは二人の反応をちらっとうかがってから、勿体ぶった口調で答えた。
「現在、珠間瑠市で噂が現実化しているのは確かだ。仮面党は、噂の流布に伴って力を強めている。だが、ジョーカー様は噂とは関係なく存在しているし、仮面党も同じこと。利用はしているが、噂システムをつくり上げたのはジョーカー様ではない」
とすると、ジョーカーよりもさらに強力な力をもった何者かが、珠間瑠市を監視し、弄んでいるということだろうか。いったい、誰が、なんのために？
「ともあれ、君は仮面党幹部としてジョーカー様から選ばれた。心して任務に当たってもらいたい」
「わたし、加わるなんて言った覚えはないんだけど」
「ならば、なぜここへ来たの？」
尋ねたのはトーラスではなく、クイーン・アクエリアスだった。嘲笑的な表情をしている。
「あなたはジョーカーに理想をかなえてもらい、その代償として忠誠を捧げることを誓った。今更、取り消すことはできないわよ」
「……理想なんて……」

何もかなえてもらった覚えはない。
杏奈は、自分には夢などないとはっきり言った。ジョーカーも承知しているはずだ。
「何を望んだの？」
アクエリアスは目を細めた。
美しいが、冷たい顔をしている。どこかで見たような気がすると杏奈は思った。不思議だ。こんな知り合いはいないはずだが。
「言ってごらんなさいよ。どんな理想をかなえてもらったの？」
「クイーン……」
トーラスは止めようとしたようだが、強い口調ではなかった。なんとなく、彼らの力関係がうかがえる。
杏奈が黙っていると、クイーン・アクエリアスは馬鹿にしたように笑って、ソファの背にもたれかかった。
「内緒にしておきたいの？　無駄なことよ。隠しておいても、いずれ暴かれるわ。内に秘めた理想も、欲望も、すべてさらけ出される……他人を踏みつけにしてのし上がりたい、友人を裏切ってでも成功したい、魂を売ってでもトップになりたい……普段は笑顔の下に隠している感情が、全部さらけ出される。自分でも認めたくないほど欲にまみれた、むき出しの素顔が現われる。ジョーカーに従うというのは、そういうことよ」

からかうようでもあったし、どこか自嘲的な響きもあった。

突然、杏奈はこの女性の名に思い当たった。見覚えがあるはずだ。女優の黒須純子だった。

杏奈は芸能界にあまり興味をもっていないから、すぐには思い浮かばなかった。だが、間違いない。黒須純子。どちらかといえば、演技力よりも放埓な私生活で話題を振りまいている女優だ。

名のある女優が仮面党に加わっているとは――しかも幹部として加わっているとは意外だった。いつだったか、光雄たちがゾディアックでのいつもの雑談の中で言っていたことを思い出した。

――黒須純子っているじゃないッスか。あれ絶対整形だって噂ッスよ。だってあの人、結構いいトシのはずなんスよ。うちのオヤジが昔ファンだったって。当時の写真集をいまだに大事に取ってあって、見せてもらったことがあるんです。全然、変わってないッスよ。下手すると、今のほうが若いくらい。結構大きい子供がいるっていう噂もあるし、最低でも三十代の後半ぐらいのはずなのに、肌とかツルツルだし……あそこまでいくと、綺麗っていうよりほとんど妖怪って感じで……。

杏奈は興味がないので適当に聞き流していた。今、こうして間近で見てみると、光雄の言っていたことがよくわかる。

黒須純子は美しかった。目元に皺の一つすらないし、肌はみずみずしくハリがある。二十代

にしか見えない美貌である。よほど優れた整形手術を受けたとしても、これだけの若々しさは保てないだろう。

――しがみついたんだ。この人は。

老いることが恐ろしくて。人を踏みつけにしてでも、魂を売ってでも、永遠の若さを手に入れようとしたのだ。

杏奈は反射的にアクエリアスの顔から目をそらせた。苦いものが胃の腑からこみあげてくる。失いつつある夢に固執する姿は醜い。黒須純子の外見の美しさは、内面の救いようのない醜さの裏返しだ。正視に耐えない。

アクエリアスばかりじゃない、トーラスだって、レオだって。ここにいる連中は、欲望をかなえるためにジョーカーを利用し、その見返りとして彼に忠誠を捧げたのだ。

ジョーカーの言葉を思い出す。走りたいとは思わないか？　思わない。この連中のような醜さをさらすぐらいなら、透明なままでいたほうがずっといい。何も望まずにいれば、夢が穢れることもない。

杏奈の嫌悪感を、敏感に感じ取ったらしい。クイーン・アクエリアス、黒須純子はわざとらしく神経質な笑い声を上げた。

「夢も欲もないなんて、お綺麗なことを言わないでちょうだい。蠍座っていうのはね、秘めた情熱の象徴よ。表ではクールな顔を装っていても、裏では誰より激しい欲望に身を焦がして

いる。それがスコルピオンの宿命(しゅくめい)」
　杏奈はそっぽを向いた。いいトシして星占いか。ばかばかしい。
「第一、あなたが本当に夢も理想ももたないような人間なら、ジョーカーがあなたに興味を示すはずがないわよ。仮面党を信じる人々はね、願いをかなえてもらう代わりにイデアル・エナジーを献上(けんじょう)するの。イン・ラケチの成就のためにね」
「イン・ラケチ……？」
　確か、ジョーカーもそんな言葉を口にしていた。
「何も知らないのね」
　アクエリアスは肩をすくめた。トーラスが説明した。
「『私は、もう一人のあなた』」
「……え？」
「イン・ラケチは、マヤ語で『私は、もう一人のあなた』を意味する言葉だ。そういう名前の幻の書物があるのさ。出版はされてないがね。イデアル・エナジーを集めて人類を新たな段階に進化させる……それが我々仮面党の目的だ」
「宗教団体みたい」
　杏奈のつぶやきに、トーラスは苦笑するような表情を見せた。
「君にもいずれわかる。宗教を超えた大いなる救済(きゅうさい)のことがね。とりあえず、君にはこれを与

えよう」

トーラスが差し出した掌の上に、手品のように青い物体が現われた。

杏奈は息を呑んだ。それは、青く透き通った髑髏だった。幻の中で見たのと同じ――落ちくぼんだ眼窩で杏奈を睨みつけ、歯をむき出して笑っている。

ぞっとした。トーラスは立ち上がり、杏奈の目の前に髑髏を突きつけた。

「水の水晶髑髏だ。蠍座は水のエレメントに属する星座。君はこの髑髏を、人々のイデアル・エナジーで満たせ。それがジョーカー様のお望みだ」

押しつけられるようにして、杏奈は髑髏を受け取った。

見かけの印象よりも軽い。ひんやりと手に吸いつくような感触があった。頭蓋骨の合わせ目まで巧妙に刻まれている。精巧な細工だった。

「君の最初の仕事は、三日後に行なわれる入党式だ」

「入党式……」

「新たに仮面党に入党した者に対する儀式。このゾディアックで行なうことになっている」

「ゾディアックは仮面党の巣なの？」

「君は少し言葉の遣い方を覚える必要があるな。巣とは何だ。ここは、我々の拠点の一つだ」

知らなかった。下のフロアで踊ったり笑ったりしている子たちは、誰も知らないだろう。同じ建物の中で、何が行なわれているか。

「何をすればいいの」
「そのときが来ればわかる。水晶髑髏が教えてくれるはずだ」
杏奈は髑髏に視線を落とした。こうしていると、ただのよくできた作り物にしか見えない。あのとき、あの不思議な空間で杏奈を圧倒した力は、微塵も感じられなかった。
杏奈はふと思いついて、言ってみた。
「一つ、提案」
「なんだ」
「この街では噂が現実化する。それがわかってるなら、利用すればいいじゃない。『イデアル・エナジーは十分集まった』とか『仮面党の企みは成就した』とか……なぜそうしないの？」
「なるほど。なかなか賢い提案だ、レイディ・スコルピオン」
トーラスは目を細めた。馬鹿にされているようで、杏奈は不快になった。
「だが、不可能なんだ。この街では噂が現実化すると言うが、それは正確じゃない。正しくは、『現実化する噂もある』だ」
「……しない噂もあるってこと？」
「その通り。噂システムに気付いて、願望を実現させようとした人間は何人もいる。一例をあげれば、某月某日、天から札束が降るという噂を流した男がいた」
「わかりやすい願望」

「まあ、ばかばかしい話だがね。噂は意外に広まった。恩恵にあずかろうとした連中が広めたからだ。実際、その日、学校や会社を休んで一日中空を見上げていた人間は結構いた。だが噂は実現せず、信じた連中が馬鹿をみただけだった」

「どうしてそうなるの？　実現する噂と、しない噂の違いは？」

「さあね。俺にはわからん。噂を実現させている誰かの意志に、適うかどうかということではないかな」

「誰か……って。誰。ジョーカーじゃないんでしょう？」

「珠間瑠市は現在、人智を超えた力に支配されている。それが神なのか悪魔なのかは、我々人間には知るすべがない」

トーラスは冗談めかした大仰な口調で言った。

手の上の水晶髑髏が、かすかに重みを増した——そんな気がした。

珠間瑠市はいつのまにか、杏奈の知らぬ異形の街へと変貌を遂げてしまったらしい。この街ではある種の噂が現実化し、仮面の怪人が闇を跳梁する……。

恐ろしさは感じなかった。ただ、ひどく寒々しい気持ちになっただけだった。

「ジョーカー様は君に期待しておいでだ。しくじるなよ」

トーラスは杏奈を見て、意味ありげな微笑を浮かべた。

2

事故が起きた日は、冷たい小雨がぱらついていた。
学校からの帰り道。杏奈は家路を急いでいた。部活で遅くなり、天気が悪かったせいもあって、あたりはすでに暗かった。青に変わった信号を確認してから、国道を横断しようとした。
そこへ、突っ込んできたのだ。猛スピードのセダンが。
怪物の目のようなヘッドライトの光を覚えている。悲鳴を上げたような気もする。握っていた傘と鞄が弾き飛ばされた。杏奈の身体は一回宙にはねあげられ、地面に叩きつけられて、もう一度はねられたらしい。覚えてなんかいない。最初の衝撃を食らった瞬間に、意識を失っていた。
目撃者が呼んだ救急車で病院に運ばれた。命に別状はなかったし、頭も打っていなかったが、右足を複雑骨折していた。
加害者はそのまま逃走を試みたらしいが、目撃者がナンバーを覚えていたので、あっさり捕まった。中年のサラリーマンだった。泥酔しており、取り調べにも満足に応じられない状態だ

ったという。人をはねたことでさすがに錯乱していたが、杏奈の容体を聞くと、まだ酔いの抜けきらない口調でホッとしたように言ったそうだ。死んでないの？　なんだ、死んでないの？　じゃ、逃げることなかったな。

杏奈を診察した医者は、機械的な口調で言った。この程度の怪我で済んだのは不幸中の幸いでしたね。大丈夫、治りますよ。辛抱強く、リハビリをがんばりましょうね。少し足を引きずるようになるかもしれませんが、不自由を感じるほどではないはずです。

質問を口にするのが怖かった。杏奈はギプスの足をじっと見つめながら、ようやく勇気を振り絞った。声が震えないようにするのが一苦労だった。

——わたし、陸上やってるんです。また走れるようになりますか？

医者はなかなか答えなかった。沈黙はおそらく数秒のことだったのだろうけれど、杏奈には耐え難いほど長く感じられた。

——お気の毒ですが。

わざとなのか、さばさばと割り切った口調で医者は言った。

——選手を続けることは無理ですね。しかし、この程度で済んだのは、本当に幸いだったと思わなければ。命を落としてもおかしくないような大事故だったんですから。

杏奈は一か月後に退院し、リハビリのために通院することになった。しかし、松葉杖の必要

がなくなると、通院をやめてしまった。どうせ走れないなら、何をしたって無駄なこと。そう思った。

しばらくは学校にも行かなかった。部屋に閉じこもって、ヘッドフォンで音楽を聞きながらぼんやり過ごした。だが、母親に泣かれたので、仕方なく登校することになった。事故から三か月が経過していた。

教室に一歩足を踏み入れた途端、杏奈は級友たちの驚愕の視線で迎えられた。みんなのまなざしが痛くて、肌がピリピリした。

戸惑ったような表情の女の子たちが、おそるおそるという感じで近寄ってきた。

――おはよう、吉栄さん。

――わあ、もういいの？

――久しぶり。元気そうだね。

下手くそな学芸会みたいなセリフ回し。

杏奈は何も言わずに教室を見回した。自分の席だったはずのところには、他の生徒の鞄が置いてあった。

――席替えしたから。

――吉栄さんの席はあそこだよ。

クラスメートの一人が気まずそうな顔で指差したのは、一番後ろに一つだけポツンとはみ出

した席だった。

杏奈は無言でそちらに向かい、腰を下ろした。みんな、それ以上声をかける勇気を失ったように、杏奈を遠巻きにしていた。

来るんじゃなかった。腫れ物にさわるようなクラスメートたちの態度に苛立ちながら、杏奈は思った。

やっぱり来るんじゃなかった。学校なんか。

みんなこっちを見てる。心配したような顔をしながら、内心で笑ってる。本当は興味津々なんだ。交通事故で選手生命を断たれた、悲劇のヒロインの登場に。

涙ぐめばいい？　唇を噛んでうなだれていれば、みんな、もらい泣きしてくれる？　冗談じゃない。

杏奈はもともと無口で人付き合いが悪く、友達の少ないほうだった。クラスの中では少し浮いていた。短距離の選手として全国的な注目を集めていたせいもあり、やっかむヤツも少なくなかった。もちろん誰も表だって口にしたりはしなかったが、杏奈の事故を面白がっている連中がいることは事実だった。

ひそひそ声が耳に入る。ひょっとすると、クラスメートたちはわざと杏奈に聞かせるよう喋っていたのかもしれない。

「かわいそう」

──交通事故で選手生命終わりなんて、悲劇。テレビドラマかマンガみたいだよねー。
──でも、意外と平気そうじゃない？　もっと落ちこんでるかと思った。
──あたしだったらボロボロ泣いてるよー。吉栄さん、なんで平気なんだろ。やっぱりあの人って、よくわかんない。
昼休みには、陸上部の後輩だった片山典子が、杏奈が登校したというニュースを知って駆けつけてきた。
ノリコは、杏奈の顔を見るなり「お姉さま！」と叫んで泣きじゃくった。ノリコのほうがよほど悲劇のヒロインみたいだった。
何もかもが茶番。うっとうしくて、杏奈はノリコを冷たく追い払った。
結局、まともに登校したのは数日だけだった。杏奈は学校をサボるようになった。鞄を持って家を出ても、どうしても登校する気になれず、街をブラブラした。間もなく、ゲーセンで知り合った子に誘われて、クラブ・ゾディアックに出入りするようになった。
それまで陸上一筋で遊び仲間をもたなかった杏奈は、こういう店に入るのは初めてだったが、すぐに場になじんだ。最初は杏奈を「ノリの悪い、場違いなヤツ」と見ていた常連たちも、間もなく考えをあらためたようだった。杏奈は、常連でもうっかり話しかけることのできない（たまに、光雄のような能天気な例外はいるが）独特の存在として、一目おかれるようになった。
ニキビ面の少年たちが真剣に囁き合っているのを、偶然耳にしたことがある。

――あのアンナってヤツさ、マジやべーよ。

――目つき、あぶねーもんな。

――薬やってんじゃねーの。

――絶対、手ェ出さないほうがいいぜ。

杏奈はゾディアックに溶け込んだ。薄暗く、思考力を奪(うば)う大音量の音楽が鳴り響(ひび)く場所。なれなれしくはしゃぐやつも多いが、実は誰も他人(たにん)に心を開いたりしない空間。何も考えずに音楽に身をゆだね、片隅(かたすみ)で煙草(たばこ)を吸いながらぼんやり時間をつぶすことのできる場所。

突然地震が起きて、この店ごとぺしゃんこになって、みんな死んでしまえばいい――杏奈はよく、そんな夢想(むそう)にふけった。

自殺は考えない。面倒(めんどう)くさいから。

ただ、ふわっと、死んでしまえないだろうか。苦しくなく、死の意識すらなく、眠るように、ふわあっと。

そうやって澱(よど)んだ毎日を過ごしていたある日、光雄の語る噂話(うわさばなし)を聞き、ジョーカーに出会ったのだった。

*

杏奈はいつものようにゾディアックにいた。

壁際の席に一人で座って、視線を漂わせる。今夜はさほど混んでいない。照明を落としたフロアに、魚のように数人の客が行き来していた。

見慣れた光景だが、これまでとは違う風に見えた。この店の裏の顔を知ってしまったから。

まさか、ゾディアックの上にあんな部屋があるなんて思わなかった。仮面党がここを拠点の一つにしているなんて。あの部屋で仮面党幹部たちに会ったにもかかわらず、まだ実感が湧かない。

杏奈はゆっくり、店内を見回した。

客の中には、今夜の儀式に参加するヤツも何人か交じっているはずだ。あそこでけたたましく笑っている女はどうだろう？　それとも、あっちの席で女の肩に手を回してにやけている男は？

どうでもいいことだ。杏奈には関係ない。誰が仮面党に入ろうと。誰が、どんな欲望を隠していようと。

飲みかけのグラスに手を伸ばしたときだった。

「お姉さまああ！」

聞き覚えのある声が響いた。杏奈はうんざりして顔をそちらへ向けた。片山典子が走り寄ってくるところだった。

こういう店には慣れていないのだろう。顔を緊張に強ばらせている。童顔で洒落っ気のない

ノリコは、場違いも甚だしかった。おまけに、セブンス陸上部のトレーニングウェアのままだ。客の何人かが、クスクス笑いながらこちらを見ていた。

ノリコは杏奈の前で大きく息をつくと、ほとんど泣き声で言った。

「や、やっと見つけましたぁ……み、みんなに聞いて回って……お姉さまがよくこのお店に来てるって聞いて……あたし、ずっとお捜ししてたんです。ちっとも学校にいらっしゃらないし、いったいどうしてらっしゃるんだろうって……」

甘ったれた声。イライラする。

杏奈は無視して煙草を取り出した。ノリコはまるで化け物にでも会ったように「きゃあぁ」と叫んで震え出した。

「や、やめてくださいお姉さま。煙草なんて、ふ、不良みたいなこと。お酒もやめてください。身体を壊して、二度と走れなくなってしまいます……」

杏奈は煙草の煙を吸い込んで、ノリコの顔へ向けて吐き出した。

ノリコの顔が歪んだ。大きな目が瞬き、みるみる涙が盛り上がる。

「……お姉さまのバカァア！」

子供っぽく叫ぶと、ノリコはだーっと駆け出して行った。

杏奈はため息をついて煙草を消し、グラスの酒を一気にあおった。おいしくない。あの変な子のせいで。

「杏奈さん、かっこいいッス。あの人、二年の片山さんてすよね。なんだかちょっと、かわいそうかも……」

様子を見ていたらしい光雄が声をかけてきた。杏奈が睨むと、「すんません」とビクビク答えて逃げていった。

うっとうしい。どうしてお節介な連中ばかりなんだろう。どうしてみんな、他人のことを放っておかないのだろう。

ノリコが出て行くのとほとんど入れ違いに扉が開いて、また新たな客が入ってきた。五人のグループ。セブンスの制服が二人に、カス校のが一人、年上っぽい女が二人……。

杏奈はセブンスの制服を着た少年に目を留めた。知っている顔だった。

周防達哉だ。杏奈のクラスメート……いや、元クラスメート。

杏奈は少し驚いた。意外だった。ここで彼の顔を見るのは初めてだ。

達哉は、杏奈と似たような立場の生徒だった。クラスに溶け込まず、いつも浮いていた。学校ではほとんど友達をつくらず、変わり者で通っていた。仲間と連れ立ってこんな店で遊ぶタイプには思えなかったのだが。

達哉に纏わりついているのは、同じく七姉妹学園の制服を着た女の子だった。見かけはまるっきり白人だ。ブロンドの髪、青い目、白い肌、長い脚。目立つルックス。学校でも、ゾディアックでも何度か見かけたことがある。確か二年生だったはず。

カス校の制服を着ているのは、青く染めた髪をツンツン立たせた、ナルシストっぽい雰囲気の少年である。まるで店内の全員に喧嘩を売るような目で睥睨し、肩を揺すっている。自意識過剰っぽい。

あとの二人はよくわからない。二十代ぐらいの女性二人だ。一人は大胆なデザインのミニのツーピースに、ロングブーツ。もう一人はラフなパンツスタイルだった。どちらもOLには見えないが、女子大生でもなさそうだ。奇妙な取り合わせだった。

達哉に見つかったら、少し厄介なことになるだろう。だが、その心配は薄そうだった。同じクラスだったとはいえ、口をきいたことはほとんどない。達哉も杏奈も、他人にかかわるのを嫌う性格だった。たとえ杏奈に気がついたとしても、達哉は知らん顔で通り過ぎるに違いない。

杏奈はまた煙草を取り出した。儀式の開始まで、およそ三十分ほど。ひょっとして達哉たちも、仮面党に入党するためにやってきたのだろうか……？

煙草をくわえ、火をつけようとした瞬間、いきなり煙草が消えた。

あまりの早業に杏奈は目を瞬いた。いつの間にか、達哉たちと一緒にいた女が近づいてきて、杏奈の煙草を素早く取り上げたのだった。

杏奈は女を見た。女はきつい目で杏奈を見下ろしている。

整った顔立ちの女だった。黒いタートルネックにグレーのジャケット、黄色いストレートパンツ。眉がきりっとしていて、いかにも気が強そうだ。背も高いので、見下ろされると威圧感


Ken-S

がある。
「背伸びはやめときな。カッコ悪いよ」
凄みのある声で女は言った。
杏奈はしらけた気分でため息をついた。どこにでもいる。こういう風紀委員みたいなタイプ。姐御風を吹かせて、年下に睨みをきかせて、悦に入る。
「あんた誰」
「あたし？　あたしは黛ゆきの」
「なんでわたしにかまうわけ？　放っておいてくれない？」
杏奈はポケットから煙草の箱を取り出した。くわえようとした瞬間、今度は煙草の箱ごと消えた。かの風紀委員が、さらに怒った顔をして箱を握りつぶしていた。
「あんた吉栄杏奈だろ？」
言い当てられて、杏奈は眉を寄せた。
「あんたの写真、見たことがあるよ。インターハイに出たときの。なんであんた……」
最後まで聞かずに杏奈は立ち上がった。
今夜は変な客ばかり。ノリコにも、この女にも、うんざりする。どうしてみんな、他人を放っておかないいんだろ……。
黛ゆきのと名乗った女は、杏奈の背に声をかけた。

「あんた、怒らないんだね」
　杏奈は立ち止まって振り向いた。
　怒ってほしいんだろうか。変な女。
「面倒くさいことは嫌いだから」
　答えて、杏奈は出口へ向かった。
　連中の間をすり抜けようとしたとき、周防達哉と一瞬目が合った。達哉は何か言いたげな顔をして杏奈を見ていたが、結局声をかけてはこなかった。
　杏奈はゾディアックを出た。嫌悪感が、黒い煙のように胸に広がってゆく。
　黛ゆきの。杏奈が一番嫌いなタイプだ。自信たっぷりで、自分は絶対に間違っていないと信じこんでいる。格好はどうあれ、中身は頭の硬いＰＴＡと変わらない。煙草なんか吸っちゃいけません、こんな店に出入りしちゃいけません、どうして言うことがきけないの、あなたのためを思って言ってるのに。
　うっとうしくてたまらなかった。嫌いだ。ああいう、力強い目をした人間は。少しの迷いもない、能天気な自信にあふれ返った顔をした人間は。
　――消えてしまえばいい。

＊

結局、ゾディアックを飛び出した杏奈は、その夜はもう戻らなかった。来いと言われた入党儀式をすっぽかしたのだ。お咎めがあるのは覚悟の上だった。

翌日早速、トーラスから呼び出された。VIPルームには、仮面党幹部三人が顔を揃えていた。例によって、ジョーカーの姿はない。

「座りたまえ」

杏奈が入って行くと、トーラスが前回よりも刺々しい口調で言った。言われた通り、腰を下ろす。早速、糾弾が始まった。

「なぜ、昨夜の儀式をすっぽかしたんだ?」

「別に」

「別にで済むか。君が帰ってしまったせいで、とんだ邪魔が入った」

「邪魔って?」

「君も会っただろう。周防達哉と天野舞耶……」

昨日の気に食わない女の顔が思い浮かんだ。

しかし、あいつは天野なんて名前ではなかった。確か、黛と名乗ったはず。

「天野って誰」

「――魔女」

違う方向から声が返ってきたので、杏奈は顔をそちらに向けた。

キング・レオだった。ソファのひじ掛けに頬杖をついて杏奈を見ている。

彼の声を聞くのは初めてだ。かすれた、不機嫌そうな声だった。

先日と同じく、レオの顔の右半分は仮面で隠れていた。仮面にかぶさるように落ちかかった長い髪は、脱色しているのか、あるいは生まれつきなのか、極端に色が薄くパサついている。隠されていない左半分の顔から察すると、二十代後半ぐらいに見えるが、クイーン・アクエリアスの例もあるから、本当の年齢は不詳だ。青白く、頬骨の目立つ顔つきだった。

杏奈には、この男が一番よくわからない。トーラスは虚栄心の強い軽薄な男、アクエリアスは暗い野心家、と見極めがついていたが、レオがどういう人物なのかはまだ不明だった。落ちくぼんだ細い目が、ひどく冷酷で不吉な印象を与える。できれば近づきたくないタイプだ。

「魔女……？」

言葉の意味を測りかねていると、トーラスが答えた。

「天野舞耶は情報雑誌の記者だ。この街に流れている噂を取材している途中で、周防たちと知り合ったらしい」

杏奈は、ゾディアックで見たミニスカートを思い浮かべた。

雑誌記者か。なるほど、それなら納得がいく。普通のＯＬにしては個性的すぎる服装をして

いると思った。

「奴らは、我々仮面党の敵だ。ジョーカー様の最大の敵、と言ってもいい」

「どうして？」

「因縁があるのさ。古い因縁が。ジョーカー様は彼らを激しく憎んでいる。イン・ラケチの成就とともに、彼らに復讐を。それがジョーカー様のお望みだ」

「復讐？」

「ま、俺も詳しいことは知らん。とにかく奴らは我々の計画を邪魔しようと企んでいる。今後もうるさい横槍を入れてくるはずだ。名前と顔ぐらいは覚えておくんだな」

周防や天野のことはどうでもよかった。杏奈が敵意を感じた相手は、一人だけだった。

「黛ゆきのは？　あいつも記者？」

「黛？　……ああ。彼女はカメラマンだ。天野と同じ雑誌社で働いている」

カメラマン。杏奈は、その職業にいい印象をもっていなかった。

写真は嫌いだ。人が隠しておきたいものを容赦なく暴くから。写真を生業とする連中はもっと嫌いだ。不幸に遭った人々を追い回し、プライバシーを踏みにじり、無神経にフラッシュを浴びせかけるクズだから。

お節介で無神経なヤツ、という第一印象が、ますます強められた。黛ゆきのの意志の強そうな顔を思い出して、杏奈はむしゃくしゃした。

よほど不機嫌な表情をしていたらしい。アクエリアスがからかうように問いかけてきた。
「レイディ。あなた、黛って女に何か恨みでもあるの？」
「別に」
「別にって顔じゃないわね。今、一瞬、おっかない目をしていたわ」
「あんたには関係ない」
杏奈はそっぽを向いた。
アクエリアスは鼻白んだようだが、トーラスが話題を変えた。
「レイディ、ゾディアックでの失態は埋め合わせてもらわなければならない。次の目的は春日山高校だ」
「カス校？」
そういえば、黛ゆきのの仲間の中にも、カス校の制服を着ている男の子がいた。杏奈は、青く染めた髪をツンツン立てたナルシストっぽい少年の顔を思い出した。
「カス校で何が？」
「学園祭。生徒会の主催で、マスカレードを行なう。集まった生徒たちからイデアル・エナジーを奪え」
「俺が行こう」
口を挟んだのはキング・レオだった。

トーラスはぎょっとしたような顔をした。どうも彼はレオを怖がっているようだと杏奈は思った。

「いや、レオ、高校生の統轄はレイディに任せよう。君がわざわざ行く必要は……」

「俺に指図すんのか？」

レオの声は静かだった。静かというより、投げやりで、どうでもよさそうに聞こえた。しかしトーラスはあわてて首を振った。

「いや、そういうつもりじゃない。もちろん、同行してくれるなら心強い。レイディ一人では不安だからな」

杏奈はキング・レオの表情をうかがおうとしたが、見えるのは仮面の横顔だけで、どんな顔をしているのかわからなかった。

もともと、他人と行動を共にするのは好きではない。ましてや、この何を考えているのかわからない男と一緒だなんて。

文句を言いたかったが、この場の決定権は杏奈にはなかった。

「あらあら。大変ねーえ」

アクエリアスが、笑いを含んだ声で言った。

任務の内容を言っているのか、それともレオと組んだことを言っているのか、この時点ではまだ杏奈には見当がつかなかった。

＊

学園祭日和の秋晴れだった。

春日山高校の校門前には、晴れ晴れしく学園祭の看板が立てかけられ、色とりどりの紙テープで飾られている。いつもは無味乾燥な学校も、今日ばかりは音楽が鳴り響いて、楽しげな雰囲気に満ちていた。

「美術部でーす。見てってくださーい」

「バレー部、間もなく試合始めます」

「模擬店やってまーす」

張り切ったカス校生が大声で呼び込みをしたり、チラシを配ったりしている。他校の生徒も遊びに来ているし、父兄も多数来校している。

校門をくぐった杏奈は、「お願いしまーす」の声とともにチラシを受け取った。

マスカレード・パーティの案内だった。主催は生徒会、場所は体育館。参加者は必ず、生徒会で配っている仮面を受け取って着用すること、と規定されている。

仮面のイラストと、「多数のご参加をお待ちしています」の文字、そしてひときわ大きな字で「生徒会長　井上康夫」とあった。杏奈は無造作にチラシを丸めてポケットにつっこんだ。

レオは来ているのだろうか。杏奈はあたりを見回したが、それらしい人影は見つからなかっ

た。

代わりに、奇妙な若者が何人か目についた。

奇妙——といっても、とりたてて言動がおかしなわけではない。身なりは平凡だし、騒がしくしているのでもない。むしろ周囲に埋没して、まったく目立たずにいる。だが、杏奈の目には彼らの姿は異様に見えた。

カス校の制服を着ているのもいれば、他校の制服も、私服もいる。男の子もいるし、女の子も。一人で歩いている子もいるし、何人かでグループをつくっているのもいる。

服装も行動もまちまちなのに、彼らには共通する影があった。表情に、生気というものがまったくない。うつろな目をして、何も考えていないような顔で、幽霊のように通り過ぎてゆく。グループでいる連中にしても同じことだ。友人同士で何か喋っているように見えても、実は会話が成立していない。抑揚のない声でてんでばらばらに、どうでもいい言葉を発し続けているだけなのだ。

彼らの顔は、黒い影に覆われていた。杏奈は軽く眉をひそめた。

あれが、影人間。仮面党によってイデアル・エナジーを吸いつくされた連中か。

皮肉なことだ。夢をかなえるために、夢見る力を手放すなんて。

杏奈は一瞬、ジョーカーのやり方に嫌悪を覚えたが、すぐに考え直した。

どうでもいいこと。わたしには関係ない。

あの連中は、別にジョーカーに襲われて無理強いされたわけではない。自ら望んで、彼の奴隷となったのだ。同情には値しない。

「レイディ・スコルピオン？」

急に声をかけられた。

振り返ると、顔色の悪い、痩せた少年が立っていた。

カス校の制服を着ている。眼鏡をかけた、いかにも真面目そうな外見だった。

杏奈が無言で見ていると、彼は不安そうに問いかけた。

「あの……レイディ・スコルピオン様……ですよね？」

うなずくと、陰気な顔に卑屈な笑みが広がった。

「ああ、やっぱり。今日は仮面党の幹部の方が見えるって聞いてお待ちしてたんです。すみません、校門までお迎えに上がるつもりだったんですけど、いろいろ忙しくて……あ、僕、春日山高校の生徒会長です。二年の井上康夫といいます。お目にかかれて光栄です」

握手のつもりか、手を差し出してくる。杏奈はその手を見もしなかった。

生徒会長は気まずそうに手を引っ込め、ますます卑屈な口調で続けた。

「マスカレードは二時からなんです。まだ少し時間があります。あの……お話したいことがあるんです。いいですか」

井上は、杏奈を人々の死角になる校舎脇に連れていった。

二人きりになると、井上はますます声をひそめた。

「今日の学園祭なんですけど、あやうく邪魔が入りそうだったんです」

「邪魔？」

「周防達哉をご存じですね？」

その名を耳にした瞬間、杏奈の脳裏に浮かんだのは、なぜか達哉ではなく黛ゆきのの顔だった。

杏奈は脳裏の映像を打ち消し、うなずいた。

「彼が、仲間たちを引きつれて、我が春日山高校に潜入しようとしていたんです。学園祭をつぶすために。とんでもない話ですよ。もちろん、僕はそんなこと許せません。許せるわけないじゃないですか。僕はこの学校を愛してるんです。セブンスのエリート気取りのやつらに、我が校を穢させるわけにはいかないですよ……」

井上は、喉の奥を鳴らすようにして笑った。

「それで僕、機転をきかせて、連中を閉じ込めてやったんです。この学校、地下に防空壕があるんですよ。戦時中に使ってたそうです。普段はまったく使われてないんですけど、噂だけが伝わってるんです。怖いんですよ。昔、そこに逃げ込んで死んじゃった人たちの怨念が残ってて、一度入ったら出口がわからなくなっちゃうんですって……連中、今ごろその中なんです。ええ、僕が罠を仕掛けて誘いこんだんです。ふふ……マスカレードが終わるまでは、邪魔させ

ませんから」
井上は誉めてほしそうな目で杏奈を見たが、杏奈は相槌すら打たなかった。
生徒会長はがっかりした顔になったが、すぐに立ち直った。
「それで、一つお願いがあるんです。レイディ・スコルピオン様、イデアル・エナジーを集める水晶髑髏をお持ちですよね？」
「あの……それ、お貸し願えませんか？」
杏奈はうなずいた。
「え？」
「あ、あの、もちろん、駄目ならいいんですけど」
井上は、杏奈の機嫌を損ねるのを恐れているらしい。びくびくした口調で言った。
「ただ、僕に貸していただければ、きっとご満足いただけると思うんです。僕はね、この学園祭を絶対成功させたいんです。これまでさんざん馬鹿にされてきた我が校が、セブンスを見返すチャンスなんですから。僕はね、本当はこんな学校入りたくなかったんです。試験の日に体調崩したりしなけりゃこんな学校入ってないです。理不尽ですよね。だって、たった一日具合が悪くなっただけで、自分の実力とは釣り合わない三流校に入学しなきゃいけなくて、その後の人生まで否定されてしまうなんて。その一方で、たまたま偶然マグレ当たりでセブンスに入学できるヤツもいるんですよ。おかしいと思いませんか？　思いますよね？　僕は、そういう

不公平が許せないんです。コツコツ真面目に勉強してきた僕なんかが報われなくて、たまたま調子のいいヤツがいい目をみるなんてね。いいえ、僕だけじゃないです。他にもいると思うんです。そういう気の毒な生徒のためにも、この学園祭は成功させなきゃいけないんです。これさえ成功すれば、もう誰にもカス校なんて呼ばせません。春日山高校は、セブンスを凌いで、一流校になれるんです……」

支離滅裂な論理だが、喋っているうちに興奮してきたらしい。眼鏡の奥の小さな目が輝き始めた。

杏奈は背後を振り返り、次々に校門から流れてくる人の群れを見た。レオはまだ見当たらない。何をやってるんだろう。

「レイディ・スコルピオン様、僕は仮面党に、ジョーカー様に、心から忠実なんです。だから自分の危険もかえりみず、周防たちを防空壕に閉じ込めたりしたんです。水晶髑髏を貸していただければ、決して悪いようには……」

「わかった」

ぺらぺら喋りすぎる男はうっとうしい。杏奈はうんざりして、バッグに手をかけた。

レオが来ないなら、お目付役もいないわけだ。自分がどう振る舞おうと勝手だろう。この生徒会長、気は小さそうだが、やる気だけはありそうだ。任せておけば、杏奈は労せずしてイデアル・エナジーを手にすることができる。

杏奈は水晶髑髏を取り出し、生徒会長に押しつけた。井上の目があやしく光った。

「すごい……これが水晶髑髏……ありがとうございます、レイディ・スコルピオン様。ご期待を裏切らぬようがんばります」

井上は水晶髑髏を押し戴くように捧げ持って深々と一礼し、杏奈に背を向けた。

転げるようにして、体育館の方向へ走ってゆく。その後ろ姿を見送ってから、杏奈も踵を返した。

とりあえず、手間は省けた。あとは、生徒会長がどういう手腕を発揮するのか、一応確認して帰ればいい。

彼が語った防空壕のことが、ちらっと思い浮かんだ。杏奈は足元に視線を落とした。

この下に、巨大な空洞が穿たれているのだろうか。戦時中に使われたという防空壕が。

今ごろ、周防達哉たちはそこに閉じ込められているのだろうか。黛ゆきのは、あの気の強そうな顔を恐怖と苦渋に歪ませているのだろうか。見つからない出口を探して、暗闇の中を必死に歩き回って、硬い岩壁に爪を立てて……。

関係ない。杏奈は、頭に浮かんだ陰惨なヴィジョンを振り払った。

連中が何をしていようが、杏奈には関係ない。マスカレードでの任務が成功しさえすれば、杏奈の仕事は完了する。

にぎやかな校庭のほうへ戻ろうとして、杏奈はやっと気がついた。いつのまにか、校舎の壁

にもたれかかるようにして、キング・レオがこちらを見ていた。あいかわらず、顔の半分を仮面で覆い、長いコートに長身を包んでいる。街中なら人目を引かずにはおかないだろうが、今日は特別だ。生徒会が配っているマスカレード用の仮面をかぶった人々が行き交っているので、彼の仮面も目立たなかった。

杏奈はレオに近づいていき、数歩離れたところで立ち止まった。レオは口元に酷薄そうな微笑を浮かべて杏奈を見返している。

「マスカレードは二時からだって」

そう告げたが、レオはなんの反応もしない。

「水晶髑髏は生徒会長に預けた。やる気がありそうだったから。わたしより、うまく扱ってくれそうだし」

レオは無言でうなずいた。

杏奈は、彼に対して抱いていた警戒心を少しゆるめた。水晶髑髏を手放したことを咎められなかったので、ほっとしたせいもある。口うるさいトーラスなどに比べれば、御しやすい相手のように思えた。

レオが問いかけてきた。

「魔女を見たか？」

魔女。天野舞耶のことだ。杏奈は首を横に振った。

「地下にいるらしいけど」
「地下？」
「防空壕があるんだって。生徒会長が、連中をそこに閉じ込めた」
レオは、地面を透視しようとするかのように、じっと足元を見つめた。
「なぜ魔女と呼ぶの？」
何の気なしに尋ねてみた。レオはゆっくり唇を歪めた。笑ったようだ。
「あの女はなあ……」
いたって呑気そうな口調だった。
だから、杏奈はまだ気付いていなかった。レオが何をしようとしているのか。
彼は大儀そうに腕を持ち上げて、自分の顔を覆っている仮面に手をかけた。
音もなく仮面ははずされ、その下に隠されていた顔が現われた。
杏奈は息を呑んだ。レオの顔の右半分は、醜く焼けただれていた。
すさまじい火傷の痕だ。皮膚は赤黒い溶岩のように変色している。眼球は消失し、ぽっかりと黒い眼窩だけが残っていた。
「悪魔を呼ぶんだよ」
レオは、引き攣れた皮膚をそっと指で撫でて、おかしくてたまらないような口調でそう言った。

杏奈には何も言えなかった。ただ、呆然としてレオの醜い顔を見つめるだけだ。

「十年前の夏……アラヤ神社でなあ。魔女とガキが悪魔を呼び寄せて、俺を襲わせやがったのよ。女は社の中で叫んでた。ガキが飛び出してきやがった。ガキの身体から悪魔が湧き出して、飛び掛かってきやがった。火がなあ……蛇みたいな火が噴き出して、真っ赤な舌がのぞいてよぉ……熱かったぜ。忘れられねえよ。あの痛みはよぉ……！」

やばい。

そう気付いたときには遅かった。

レオの口調は狂熱を帯びて、聞き取りづらいほどの早口になっていた。声が甲高くはね上がった瞬間、彼の手が素早く伸びて、杏奈の喉をつかまえていた。

逃げる隙などなかった。一瞬のうちに、杏奈はレオの大きな手に喉を押さえつけられ、そのまま後頭部を壁に叩きつけられた。

目の前に火花が散った。レオは片手で軽々と杏奈の喉を押さえ、ただれた顔を杏奈のほうへぐっと近づけて、しゃがれた声で笑い出した。

「手ェ出すんじゃねえぞ。あいつらは俺が殺る。奴らが俺にしたのと同じように、顔の皮が炭になってボロボロはがれ落ちて骨がむき出しになるまで焼き尽くしてやる。聞こえねエか？電波だよ。ツイツイミトルが笑ってやがるんだよ。電波だ電波だ電波ァ。電波が命じてやがるんだよォォォ!!―

きつく喉を絞め上げられ、涙がにじんだ。息ができない。昆虫標本のように壁に縫い留められて、足が宙に浮きかけている。
殺される。
怖かった。怖いものなんて何もない、ずっとそう思っていたのに。杏奈は今、全身が粟立つほどの恐怖を感じていた。
死の予感のためではない。至近距離から杏奈をのぞきこんでいるキング・レオの隻眼が、純粋に生理的な、原始的な恐怖を呼び覚ますのだ。極端に黒目の小さい凶眼。正気の人間の目ではない。
杏奈は、クラブ・ゾディアックで偶然耳にした少年たちの囁きを思い出した。アンナってヤツさ、やべーよ。目つきがあぶねーもん。
あの可愛らしい少年たちに教えてやりたい。真に「あぶねー」というのは、こういう目のことを言うのだ。このサイコ野郎に比べれば、杏奈なんて非のうちどころのない常識人だ。
あやうく意識を失いかけた瞬間、レオは興味を失ったかのように手を離した。
杏奈の身体はずるずる崩れ落ちた。
がくんと膝が折れ、その場に倒れこむ。肺に、急激に空気が流れこんでくる。涙をにじませながら、激しく咳き込んだ。
むせ返りながら、杏奈はようやく悟った。プリンス・トーラスがあわてふためき、クイー

ン・アクエリアスが笑いを浮かべていた理由を。レオが杏奈のお目付役なのではなかった。逆だ。この男、一人で野放しにするにはあまりに危険すぎるから、杏奈に託されたのだ。

ようやく咳がおさまった。指で涙をぬぐいながら、杏奈は顔を上げた。

すでに、レオの姿は消えていた。

*

体育館の入り口に、カス校の制服を着た少年たちが並んでいた。

「中へ入る方は、仮面を着用してくださーい」

どうやら生徒会らしい。杏奈はかまわず、体育館へ入ろうとした。

「あ、そこの人。ちょっと待って、中に入るときは必ず仮面をかぶってもらわないと……」

杏奈はちらっとそちらを見た。

真面目そうなその生徒は、杏奈と目を合わせると、ハッとうろたえたようだった。生徒会長から何か聞いているのだろう。

「あ、いいえ、結構です。そのままお通りください」

そそくさと杏奈のそばを離れる。杏奈の目の前で鉄製の扉が開いた。

激しいビートが空気を震わせている。薄暗いフロアに、レーザービームが飛び交っていた。

学園祭の催しにしては、大がかりな機材を揃えているようだ。音楽に合わせて、仮面をかぶっ

た連中が身体を揺らしていた。

杏奈は人を避けながら体育館の奥へ進み、舞台袖の細い螺旋階段を上った。体育館の上に張り出したキャットウォークに続いている。人気のないその場所から、杏奈は眼下の光景を眺めた。

なかなかの盛況だった。制服姿の高校生たちが、身体をぶつけあいそうになりながら踊っている。全員が白い仮面を着用しているのが、上から見ると異様だった。それぞれの額に、青い石が輝いている。

杏奈はわんわんと反響している音楽に顔をしかめ、自分の腕を撫でた。

——なぜだろう。

こんなに大勢の人が犇めいていて、しかもみんな激しく手足を動かして踊っているのに。熱気というものがまるで伝わってこない。ここはなぜ、こんなに寒いんだろう。まるで、巨大な冷蔵庫の中で踊ってるみたいだ。

曲が変わった。つんのめりそうなブレークビート。音が割れて多重に反響しているので、一層変則的なリズムに聞こえる。

前方のステージに人が現われた。生徒会長だ。杏奈が貸し与えた水晶髑髏を両手に捧げ持っている。

井上は得意満面だった。遠目にも、彼の顔が誇らしげに上気しているのがわかった。

彼は何か叫びながら水晶髑髏を頭上に掲げた。注目を呼びかけたのだろうが、声は音楽にかき消されて届かなかった。

踊っていた連中の様子に変化が生じた。動き方がぎこちなくなった。一人や二人ではない、ここに集まっている全員が、まるで急に踊り方を忘れてしまったかのようにポキポキした動きで手足を動かし始めた。踊っているというより、上から糸で吊るされて、操られているかのようだ

杏奈はステージ上に視線を戻した。生徒会長は頭上に掲げた水晶髑髏を大きく振り、口を開けて笑っていた。

突然、目の端に光が走った。

杏奈は手すりに腕をのせ、頬杖をついて体育館を見回した。

仮面の群れは、狂ったように手を振り上げて踊り続けている。それぞれの額に埋めこまれた石から、生徒会長の持つ水晶髑髏へ向けて、青い光が迸っていた。

幾条もの光線が、水晶髑髏に向けて放たれる。水晶髑髏はそれらを吸収して、急激に輝きを増していた。

——あれが、イデアル・エナジーなんだろうか。人々の夢見る力。ジョーカーのコレクション。

見守るうちに、生徒会長の様子がおかしくなった。彼にとっても、ここまでの反応は予想外



だったらしい。
得意そうな表情が、みるみるうちに情けない泣き顔に変わる。彼は恐怖に顔をひきつらせ、バンザイするような姿勢で水晶髑髏を掲げ続けていた。
その間にも、仮面から発した光が次々に髑髏に収束してゆく。髑髏は、今にも爆発しそうなほど明るくなった。異様なまでに美しい輝きだった。
井上には水晶髑髏を制御する力がないのだ。杏奈は遅まきながら気付いた。このままでは、人々のエナジーを集めるより先に井上が焼き切れる。
そのときだった。音楽を裂くように、鋭い声が響いた。
「杏奈!?」
杏奈はフロアを見下ろした。忘れようにも忘れられない、大嫌いな顔が、驚いたように杏奈を見上げていた。
黛ゆきの。正義の味方のカメラマン。
達哉たちも一緒だった。防空壕から無事に脱出してきたらしい。しぶとい連中だ。
「あんた、こんなところで何やってんの。早く逃げたほうがいいよ」
ゆきのは心配そうな口調で言った。踊り続けている人々を指し示し、
「ごらん。連中、エナジーを吸い取られて影みたいになっちまってる。詳しく説明してる暇はないけど、とにかく早くここから出たほうがいい。危険だから」

「知ってるよ」

ゆきのの気遣い(きづか)がわずらわしかった。お節介。親切ぶった顔。

生徒会長の掲げる水晶髑髏は、ますます輝きを増していた。ゆきのの連れの少年――例の、染めた髪をツンツン立ててナルシストっぽいカス校生――が、叫びながらステージに駆け寄っていく。

「康夫! 何やってんだ、その髑髏、離せ!」

「よ……寄るなああ」

井上は叫んで、よろめきながら舞台の袖に消えた。水晶髑髏を抱(かか)えたまま。

「待てや、コラ!」

少年はばたばたと井上を追って行った。ゆきのは仲間たちと杏奈とを忙しく見比べて、結局、少年たちの後を追った。

また、面倒が増えた。どうしてあの連中、防空壕の中でおとなしくしていてくれなかったんだろう。

杏奈は重い足を引きずって、キャットウォークから下りた。

＊

体育館を出た杏奈は、目の前にそびえる校舎を見上げた。

井上の居場所が手に取るようにわかる。いや、正確には水晶髑髏の在り処が、だ。髑髏の描いた軌跡が、青い線となって杏奈の網膜に映る。上だ。生徒会長は屋上に向かっている。

杏奈は校舎に入り、階段を上った。近づくにつれて、髑髏の波動がいよいよ強く感じられる。最上階。屋上へ通じる扉を開けようとしたところで、後ろから誰かに肩をつかまれた。振り返ると、レオだ。今までどこにいたのか知らないが、気がつくと杏奈のすぐ後ろにいた。顔の半分だけ隠していた仮面が、全体をすっぽり覆う形のものに替わっている。

「井上が屋上に……」

説明しようとしたが、レオは遮って言った。

「すぐに魔女どもが追いついてくる。雑魚の始末は連中にやらせておけ」

「でも……」

レオは杏奈の言葉を聞こうともせずに、白い仮面を手渡した。生徒会が配っていたような安っぽい仮面ではなかった。ずっしりと重く、象牙のような風合いを帯びている。今レオがつけているのと同じもののようだ。

額の部分に、青い紋章が刻まれていた。説明されるまでもなく、杏奈にはわかった。蠍の紋章。スコーピオの仮面だ。

杏奈はそれを顔に押し当ててみた。すっと張りつくように、仮面は杏奈の顔に装着された。仮面は人格を支配する。顔を隠した瞬間、杏奈の中で何かが切り替わった。挫折した陸上選手、吉栄杏奈の人格は無意識の奥底へと後退し、もっと冷たい、もっと力強い精神が目覚めた。レイディ・スコルピオン。杏奈は、それが単なるコードネームではなく、仮面を装着したときに現われるもう一つの人格であることを知った。

井上康夫がいる。

金網に背をつけるようにして、ぶつぶつ何かつぶやいている。水晶髑髏の恐怖は、彼をパニックに陥れたようだ。眼鏡の奥の目は血走り、口の端には泡がこびりついていた。レイディ・スコルピオンとキング・レオは昇降口の上から彼の様子を見下ろしていた。こちらからは屋上が見渡せるが、屋上からは死角となる、絶好の位置だ。

あわただしい足音がしたかと思うと、ドアが勢いよく開いた。例の青い髪の少年が飛び出してくる。すぐ後ろに、達哉たち一行が続いている。

「康夫！　てめえええ！　なんのつもりだ、みんなを元に戻しやがれ！」

少年の恫喝に、井上は震える声で何やら弁解を始めた。

当然のことながら、青髪の少年対井上の話し合いはたちまち決裂した。井上は甲高い声で何か叫んだ。

空気が震える。人の声というより、獣のような雄叫びだった。聞く者の精神を破壊するかのような。

「来たれ、ペルソナ!」

叫び声と同時に、井上の身体が青い光に包まれた。

青髪の少年は一瞬怯んだようだった。しかし次の瞬間、彼の身体からすさまじい闘気が解き放たれた。

闘気はたちまち凝集し、人の形となる。輝く肢体をしなやかに反らせて、井上に襲いかかる。井上は弾き飛ばされ、転がった。

同時に、周防達哉が躍り上がった。彼の身体から、金色の鎧をまとった軍神のような姿が飛び出した。

炎撃。紅蓮の鞭が井上を狙う。

正確に打ち込まれたそれを、井上はあやうく身体をひねって避け、跳ね起きると同時に疾風の刃を放った。

肉の切れる音。ブロンドの少女が、裂傷を受けて倒れる。

彼女を庇うように、天野舞耶が大きく両手を広げた。舞耶の身体から飛び出したのは、薄紅の気を放つ女神だった。包みこむような、優しい笑顔の。

女神の指から、きらきら輝く飛沫が飛び散る。優しい雨に打たれて、傷ついた少女がたちま

ち回復する……。

「あれが……ペルソナ？」

レイディ・スコルピオンは、戦いを見下ろしながらつぶやいた。

キング・レオは仮面の奥でくぐもった笑いを漏らし、何かつぶやいた。しかし、その声は杏奈には届いていなかった。

ぞくぞくする。常人の目にはとらえられない高速度の動きが、杏奈を魅了した。

それは想像を絶する光景だった。この世のものではありえない。神話の戦いだ。凄絶で……美しい。

これが、ペルソナの力。

万華鏡のようにあわただしく変化する、複雑な自我……。

鋭い咆哮とともに、ゆきのがペルソナを解き放った。

彼女のペルソナは、猛々しい女帝の姿となって具現した。井上に狙われた達哉を援護するように、オレンジ色の火柱が噴き上がる。

勝負は明白だった。長い時間は必要なかった。井上は一方的に圧され、追い詰められ、ついに膝を折って頽れた。

達哉たちは、とどめを刺そうとはしなかった。井上を囲んで、何か問いかけている。仮面党や水晶髑髏について詰問しているのだろう。

レイディ・スコルピオンは跳んだ。考えるより先に、身体が動いていた。無様に引きずっていたはずの足が、軽やかに動く。選手だったときよりも軽いぐらいだ。

人間の跳躍ではなかった。たった今見せつけられたペルソナの戦いが――あるいは顔につけた蠍の仮面が、眠れる力を引き出したのかもしれない。彼女は音もたてずに、ゆきのたちの真後ろに降り立っていた。

全員が同時に振り向いた。ゆきのが、驚愕に引きつった顔で叫んだ。

「杏……奈？」

レイディ・スコルピオンは鞭を一振りして、井上のかたわらに転がっていた水晶髑髏を奪い返した。

「杏奈。あんた、杏奈だろ？　その仮面……あんた、まさか……何やってんの……」

ゆきのは柄にもなくうろたえているようだった。

レイディはそちらを見なかった。なぜか、見ることができなかった。

仮面の下に抑えつけられたはずの人格が苦しさを訴える。ゆきのの声が……怖い。

レイディは軽く首を振り、邪念を払いのけた。水晶髑髏さえ奪い返せば、この学校に用はない。そのまま立ち去ろうとしたときだった。

すさまじい絶叫が響いた。
レイディはそちらへ目を向け、絶句した。
井上の身体が燃えていた。胸の真ん中から炎を噴き上げ、両手を苦し紛れに振り回して、グロテスクなダンスを踊っていた。
一瞬の出来事だった。どこから火がついたのかわからない。生徒会長はたちまち炎に呑み込まれ、人の形をした火柱となった。
断末魔の絶叫はすぐに消えた。もう声を出せる状態ではない。炭化した杭のような身体がゆらりと傾いで倒れた。一瞬にして水分を失った身体は、パサリと軽い、乾いた音を立てて崩れ散った。
女の悲鳴が響いた。
「い……いやあああああ！」
喉がかき切れそうな声だった。
天野舞耶だ。レオが魔女と呼んだ女が、悲鳴を上げてうずくまる。
青髪の少年がうろたえて手を差し伸べようとしたが、まったく無駄だった。
「いや……いやあああ……あああああ……怖い……怖いよお父さん……怖い怖いお父さんお父さんお父さん……！」
舞耶は両手で自分の耳をふさぎ、パニックを起こしたように声を上げ続けた。幼女のような

声だった。

目の前で突然人が燃え上がったのだ。恐怖を感じるのは当然だが、それにしても舞耶の反応は激しすぎた。まるで、彼女自身が業火に焼かれているかのようだ。

高い笑い声が響いた。金属的な響きを帯びた、心をかきむしるような声だった。

「魔女よ、大凶星よ、思い出したか？」

獅子の仮面をつけた男が、いつのまにかレイディのかたわらに降り立っていた。井上の身体を一瞬で火柱に変えたのはこの男の仕業だったのだ。——おそらく、舞耶への見せしめのためだけに。

「おまえらが十年前にやったことをよ……あの夜の火は綺麗だったなあ……今でも焼きついてるぜ。俺の溶けちまった右目に、しっかり焼きついていてやがる」

舞耶の絶叫はやんでいた。ぐったりして、気を失っているように見える。

「こいつはただの予告だ。おまえらのときは、こんなちっぽけな火じゃすまねエぞ。魔女よ、大凶星よ、貴様らまとめて煉獄行きだ。おまえらの運命はあの方の手中にある。逃れられねえよ。待ってな、綺麗な火をつけてやるから。十年前の夜みたいな……脳の奥まで焼きつくような綺麗な火をつけてやるからよ……」

周防達哉が舞耶を庇うように立ち、レオを睨みつけた。レオは再び笑い出した。耳を引っかくような、神経を逆なでするような笑い声。

　その声を打ち砕くように、ゆきのが叫んだ。
「杏奈……あんた正気かい！　正気で仮面党に加わってるの!?」
　驚き、そして怒りのこもった声だった。
　レイディはやはり、ゆきののほうを見なかった。どうしてもそちらへ視線を向けることができなかった。
　――怖いのだろうか。
　わたしは、ゆきののまなざしを怖がっている？
　馬鹿な。
　認めたくなかった。レイディ・スコルピオンは腹立たしさをこらえ、目を背けたまま、かたわらのレオにつぶやいた。
「レオ、あの女に手を出さないで」
　一歩後じさりながら、釘(くぎ)をさす。
「黛ゆきのは――わたしが殺る。あれは私の獲物(えもの)。手出ししないで」
　レオが了解(りょうかい)したのかどうか。確かめる余裕もなく、レイディは素早く身を翻(ひるがえ)した。
「待ちな、杏奈ぁ！」
　最後に聞こえたのは、怒り狂ったゆきのの声。
　レイディはぎゅっと唇を結んで、姿を消した。

3

「また失敗か！　まったく、何をやってるんだ……」
プリンス・トーラスの怒声が響いている。杏奈は彼の非難を適当に聞き流しながら、別のことを考えていた。
場所はこれまでと同じく、クラブ・ゾディアックのVIPルーム。例によって、仮面党の幹部たちが顔を揃えている。
杏奈の前のテーブルに、青みを帯びた水晶髑髏が置かれていた。井上康夫から奪い返したものだ。杏奈はこれを井上に託したが、井上は負荷に耐え切れずに逃げ出し、結局レオによって焼き殺された。杏奈は、自分の任務を全うできなかったのだ。井上が集めたイデアル・エナジーは、ジョーカーが要求している量には達していなかった。失敗と言われても仕方がない。
しかし、杏奈は上の空だった。頭にあるのは、黛ゆきののことばかりだ。
あれ以来、気がつくと彼女のことを考えている。いかにも気の強そうな目、歯切れのよい口調を思い返している。もちろん、好意的な意味ではない。思い返すとむしゃくしゃするに決ま

っているのに、それでも考えずにはいられないのだ。
お節介な女。杏奈の無意識まで支配しようとする。
腹立ち紛れに、黛ゆきのを殺す場面を想像してみた。血まみれのゆきの。苦痛の呻き声を上げるゆきの。恐怖におののく目で杏奈を見上げ、命乞いをするゆきの……。
「聞いてるのか!」
トーラスに怒鳴りつけられて、杏奈はようやく彼の顔を見た。
「何を?」
「……」
トーラスはお手上げだとばかりにまぶたを押さえ、「最近の若い子はわからん」と年寄りくさいことをつぶやいた。
「レイディ、君がこうも失敗を重ねると、ジョーカー様に指示を仰がざるをえない。君はやはりこのような重責に不適だったと報告せざるをえないんだよ」
「すればいいじゃない」
「君はジョーカー様が恐ろしくないのか? あの方の怒りに触れることが?」
「別に」
杏奈の無気力な返事に、トーラスは怒りの持って行き場を失って大きなため息をついた。アクエリアスの笑い声が響いた。

「その子にお説教しようと思っても無駄よ。クールに振る舞いたいお年頃なんでしょう。それよりプリンス、あなた、自分のほうの計画はどうなの？　進んでるの？」
「心外だな」
トーラスはネクタイの結び目をいじりながら、アクエリアスに視線を向けた。
「これ以上ないくらいにうまく行ってるさ。街中に貼ってあるポスターが目に入らないのか？」
「わたし、街なんか歩かないもの」
アクエリアスはいかにも気位が高そうな微笑を見せた。
「テレビ局で見かけたことはあるけれどね。そろそろデビューよね？」
「明日がコンサートだ。チケットもあっという間に完売した」
杏奈にはなんの話かわからなかったが、興味もないので聞き返さなかった。
しかし、トーラスはちょっと得意げな顔で杏奈に言った。
「ああ、すまない。君にはまだ伝えてなかったな。MUSESの件」
「何、それ」
「そういう名のアイドルグループをデビューさせるのさ」
「あんたが？」
「俺はプロデューサーなんだ」
杏奈は驚いた。この男、てっきりヒモか何かだと思っていたのに、正業についていたとは。

「デビュー曲のタイトルは『JOKER』。作詞も作曲も俺がやった。歌詞に、マイヤの託宣を織り込んである」
「マイヤの……何？」
「なんだ、それも知らないのか？　イン・ラケチの中に書いてある詩さ。人類の未来を予言する内容で……空に瞬く昴の星に……えーと……」
よく覚えていないらしい。口ごもったトーラスに代わって、あとを続けたのはキング・レオだった。
「止まった刻は動き出す」
全員の視線を集めても、キング・レオは素知らぬ顔だった。杏奈よりもさらに、この場に興味をもっていないらしい。独り言のように彼は続けた。
「享楽の舞　影達の宴　異国の詠　贖罪の迎え火は天を照らし　獅子の咆哮はあまねく響く　冥府に輝くは五なる髑髏　天上に輝くは聖なる十字架　天に上りて星が動きを止める時　マイヤの乙女の鼓動も止まる　後に残るは地上の楽園　そして刻は繰り返す」
一本調子だが、聞いているうちに引き込まれる、魔術的な声だった。いや、声というより、託宣の内容のせいかもしれない。
思い出した。冥府に輝くは五なる髑髏……それは、青い髑髏が杏奈に告げた言葉だ。
レオの声がやむと、トーラスは我に返ったように言った。

「そう。それがマイヤの託宣。そいつを織り込んだ歌詞をアイドルに歌わせ、世に広める。この曲が話題になれば、イン・ラケチ成就に一歩近づくことになる」

「まだ足りない」

つぶやいたのはレオだった。トーラスはきょとんとして、仮面に覆われたレオの顔に目を向けた。

「足りないって？　何が？」

「贖罪の迎え火だ……そいつがなければ、託宣は成就しない。俺が手伝ってやるよ、トーラス」

「な……？」

トーラスは口をぱくぱくさせ、しどろもどろにレオに訴えかけた。

「手伝うって？　なんだ、つまり、君もコンサート会場に来るってことか？　いや、いらない。君の申し出はありがたいが、手伝いはいらない、俺一人で十分だ。君はゆっくり休んでてくれ……」

トーラスはほとんどパニックに陥っている。しかし、レオはさっぱり聞いている気配がなかった。もう用件は終わったとばかりに、立ち上がって部屋を出て行ってしまった。

アクエリアスが笑い出した。「あらあら、大変ねーえ」と、杏奈に向けて言ったのとまったく同じ台詞を口にし、彼女も出て行った。

後に残ったのは、トーラスと杏奈である。トーラスは、レオとのやりとりがよほどショック

だったのか、がっくり肩を落としてうなだれてしまった。
杏奈も帰ろうかと思ったが、ふと気が変わってトーラスに尋ねた。
「レオって何者？」
トーラスは顔を上げた。まだ立ち直っていない。視線が泳いでいる。
「はあ？」
「レオって何者よ。わたし、あいつに殺されかけたんだけど」
「珍しいことじゃないさ。俺なんか百回ぐらい殺されかけている」
「何者なの？」
トーラスは滑稽なほど念入りに部屋の中を見回し、ドアも窓も完全に遮断されているのを確かめてから、小声で言った。
「誰にも言うなよ。やつの本名は須藤竜也。須藤竜蔵って政治家を知ってるか？」
杏奈は首を横に振った。
「表面上は清廉潔白で通ってるが、裏ではいろいろ悪い噂の絶えない代議士なんだ。レオはそいつの息子だ」
「政治家の息子……？」
「うん。有力者のバカ息子なんて掃いて捨てるほどいるだろうが、レオの場合はタガのはずれ具合が違う。あいつ、少し前まで入院してたんだよ。十年ぐらいずっと、病院に閉じ込められ

てたらしい」
十年。杏奈はレオの言葉を思い出した。十年前の夏。
あの女が俺の顔を焼きやがった。
「身体が弱くて入院してたってことになってるけど、まったく嘘だね。親父さんに強制的に監禁されてたんだ」
「なぜ？」
「あくまでも噂だけど、あいつ、十年前にヤバい事件を起こしたらしい。放火だってさ。連台にアラヤ神社ってのがあるだろう。あれ、十年前に焼けて再建したんだよ。その十年前の火付けが、レオの仕業じゃないかって言われてる。神社の他にも、当時、放火事件が相次いでて、それの犯人がレオだったらしいんだ。でも、父親がもみ消して、息子を監禁した。噂だよ、あくまでも」
杏奈は、目の前で焼け死んだ井上康夫のことを思い出した。
焼き殺したのはレオ。十年前に彼の顔を焼いたのは天野舞耶。舞耶は井上が燃えるのを見て悲鳴を上げた。まるで自分が焼かれたみたいに。
——変だ。何かがずれている。
「ジョーカーは、なぜそんな危険なヤツを仲間にしてるの？」
「さあ。あの方の考えることはわからないよ。レオのやつ、贖罪の火がどうのこうの言ってた

が……まさかコンサート会場に放火するつもりじゃないだろうな……プロデューサーの俺の面子ってものを考えてくれないと……なんてレオが考えるわけないか……はああ」

口調が愚痴っぽくなり、トーラスは盛大なため息をついた。

気を取り直したように杏奈のほうを見て、口調を変える。

「なんなら、君もコンサートに来るかい？　歌も踊りもなっちゃいない素人娘どもだが、曲はすごいぜ。ま、ミリオンセラーは確実だな」

自信ありげに、白い歯を見せた。

「チケットは完売してるが、君が来るならいい席を用意してやるよ。曲に聞き入りすぎて、仮面党の本分を忘れてもらっちゃ困るが……」

「興味ない」

杏奈はあっさり言って立ち上がった。トーラスは、拍子抜けしたようだった。

彼が腹立たしげに舌打ちしたのが聞こえたが、杏奈はさっさと背を向けて部屋を出た。

＊

ゾディアックを出て、駅の方向に歩き出したときだった。

前方から見覚えのある人物が近づいてくるのに気付いて、杏奈は足を止めた。

目を疑った。黛ゆきのだった。

いつものように活動的なパンツにジャケット、グレーの帽子というスタイルだ。レンズの丸いサングラスをかけている。周防たちの姿は見当たらない。

ゆきのは先に杏奈に気付いていたようだ。足早に近づいて来ると、いつになく朗らかな声で言った。

「なーんだ、杏奈じゃない。何やってんの、こんなところで」

ちらっとゾディアックのほうをうかがい、馬鹿にしたように肩をすくめる。

「ああ、あのクラブからの帰りか。つまんないことやってるねぇ、相変わらず」

杏奈は唖然とした。なんとなく、これまで抱いてきたゆきののイメージと違う。もちろん、そう言い切れるほど彼女のことを知っているわけではないが、こんな喋り方をするとは思わなかった。

喋り方ばかりではない。ゆきのは、杏奈の肩になれなれしく腕を回してきた。

「ま、いいや。ここで会ったのも何かの縁だ、ちょっと付き合わない？　近くにいいバーがあるんだ。奢るからさ」

ぐっと抱き寄せられたので、杏奈は思い切りゆきのの手を払いのけた。

どうしてしまったんだろう、この女。脳に虫でもわいたか。

「冷たいねぇ、杏奈ちゃんは」

ゆきのはニヤニヤ笑った。杏奈はあっけにとられて、彼女の顔を見つめるばかりだ。

「別に下心があるわけじゃない。ちょっと仲良くしたいだけなのになあ。あたしみたいなタイプって嫌い？」
ゆきのはふざけた仕草で、杏奈の顎に指をかけた。杏奈は素早くその手を振り払って、一歩退いた。
震えが走る。肌に触れたゆきのの指は、ぞっとするほど冷たかった。
「あんた誰」
杏奈は、ゆきのを睨みつけて尋ねた。ゆきのは大笑いして答えた。
「誰って？　黛ゆきのだよ。忘れちゃったの？　冷たいねぇ、さすが蠍座のレイディ」
「ゆきのじゃない」
触られた顎が気持ち悪かった。まるで、蛇に這われたような感触だった。その部分を手の甲で何度もこすりながら杏奈は言った
「あんた、ゆきのじゃない。誰」
「ゆきのじゃなきゃ、いったい誰だっていうの？　こんな顔の女、他にいる？」
ゆきのの顔が、ぐっと近づいてきた。今にも唇が触れそうな距離まで。杏奈はカッと赤くなり、夢中でその顔を引っぱたいた。
サングラスが弾け飛んだ。杏奈はぎょっとした。現われた双眸は、血を浮かべたかのように真っ赤だった。

「乱暴だねぇ」
ゆきのの偽者は、少しも動じずに笑いながら杏奈を見ている。
同じ顔。同じ声。しかし、絶対に黛ゆきのではなかった。顔の造作は同じでも、表情が天と地ほども違う。ゆきのはこんな笑い方はしない。こんな、人を小馬鹿にした、いやらしい笑い方は。
「あたしは、ゆきのだよ」
偽者は笑い止んでそう言った。
「あんたが認めたくなくても、それが真実。あんたが考えてる黛ゆきのなんて、所詮、ただの幻想。あんたの思いこみにすぎない。ホントのあたしは、この通り……」
「失せな」
杏奈は険しい声でつぶやいた。
悪寒がする。偽者から発する邪気に、身体の奥まで侵されそうだ。
「そーお。残念」
偽者はサングラスを拾ってかけ直した。赤目が消えると、本当にゆきののように見える。杏奈は顔を背けた。
「あたしの勘違いかなぁ。会った瞬間、杏奈ちゃんったらすごく嬉しそうな顔したように見えたんだけどなぁ」

杏奈は怒りをこらえた。くだらない挑発だ。乗ってはいけない。

「ま、気が変わったらまた会おう。あたし、あんたみたいな子、好きよ。仲良くしたいな。あんたもまんざらじゃなさそうだし。バイバイ」

杏奈が睨みつけたときには、もう偽者ゆきのは背を向けて遠ざかるところだった。

*

ファッションビルの壁面の巨大な広告スペースに、「MUSES」の名が躍っていた。三人の少女が映っている。二人は正面を向いているが、一人はシルエットになっていて顔がわからない。印象的なデザインだった。街中にこのポスターがあふれている。大型アイドルユニットMUSESデビュー。初コンサートは——今日だ。

杏奈は信号が変わるのを待ちながら、ぼんやり広告を眺めていた。

昨日はあの後、ゾディアックに駆け戻ってトーラスをつかまえ、偽者ゆきのについて質問を浴びせかけた。トーラスは面食らったような顔で、「そんなやつは知らん」と答えた。

なんだったんだろう。あれは。偽者であることは間違いないが——それにしては、あまりにゆきのによく似ていた。顔も、声も。

私はもう一人のあなた。呪文のように、その言葉が頭の中をめぐっている。ボディダブル。ドッペルゲンガー。この世には三人同じ顔の人間がいるという——。

「もう聞いた？『JOKER』」

杏奈のすぐ近くで信号待ちをしていた女の子たちが話している。杏奈は、気分の悪い夢想を追い払うために、あえて苦手な女の子たちのお喋りに耳を傾けた。

「うん。いい曲だよね」

「で、三人めの素顔ってわかったの？」

「ラジオの公録に来てたらしいよ。リサっていうんだって。金髪でスタイル良くて英語ペラペラだって」

「もったいぶってるよねえ。あのプロデューサー……佐々木銀次だっけ、そういう仕掛け好きだよね。デビュー直前までプロフィール伏せるとか」

佐々木銀次。あいつそんな名前だったのか……と杏奈はトーラスの得意そうな顔を思い浮かべた。

「コンサート、今日でしょ」

「くやしー。あたし、チケット取れなかったんだ。一時間で完売だって」

「野音、行くだけ行ってみよっか。ダフ屋から買えるかも」

「高いだろうなあ」

信号が変わり、杏奈は女の子たちから離れた。

評判は上々のようだ。コンサートは成功するだろう。――レオが邪魔をしなければ。

横断歩道を渡りきったところで、杏奈はつんのめりそうになった。
「お姉さまああ！」
耳をふさぎたくなるような声が響いたのだ。白昼、駅前の混雑のただ中で。
確かめるまでもない。杏奈は顔を伏せ、せかせかと足を速めた。
「お姉さま、待ってください、お姉さま、杏奈お姉さまあああ！」
一層、声を張り上げている。放置しておいたら、フルネーム連呼は必至だった。
杏奈は足を止めた。人をかき分けかき分け、小柄な少女がやってくる。片山典子。
この間、ゾディアックで冷たくあしらわれたことを、もう忘れているらしい。満面の笑顔で駆け寄ってくる。この子が子犬だったら、今ごろ尻尾が振りちぎれているに違いない。
「お姉さま、こんなところでお会いできるなんて感激です……お出かけですか？　どちらへ？」
「あんたには関係ない」
「え……あ、はい、そうですね。ごめんなさい……あの」
ノリコは上目遣いに杏奈を見た。杏奈は顔をしかめて見下ろした。
「まだ何かあるの？」
「あの……一つ、どうしてもお聞きしておきたいことがあって。お姉さま、もう陸上選手に戻ってくださる気はないんですか？」
「……」

杏奈は無言で踵を返した。

ノリコが泣きそうな声で追いかけてくる。

「すみません、お気に障ったらすみません。でも、あたし、どうしても諦めきれないんです。お姉さまの走る姿、もう一度見たいんです。お姉さま、もしも足が治ったら戻ってくださいますか？　足が完治して、走れるようになったら……」

「ノリコォ」

呼びかける声がした。かったるそうな、女の子の声。

「何やってんのぉ。急がないとコンサート始まっちゃうよぉ」

コンサート。その単語が引っかかって、杏奈は振り向いた。

二人の女の子が、こちらを見ている。ノリコの友達らしかった。

「ごめん、先に行ってて」

ノリコは友人たちに言った。二人は顔を見合わせ、唇を尖らせる。

「何言ってんのよ、ノリコ。あんたがどうしても行きたいって言うから付き合ってるのに……」

「だいたい、あんたトロいんだから。一人じゃ野音の場所、わかんないでしょ」

「大丈夫。一人で行けるから。ちょっと遅れるかもしれないけど、必ず行くから」

ノリコは拝むような仕草をした。二人はぶつぶつ言いながら、去って行った。

「……コンサートって」

杏奈はMUSESの巨大な広告パネルを指差した。
「あれ？」
「はい」
「行くつもりなの？」
「はい」
杏奈は考えた。止めるべきか？
結論は二秒で出た。必要なし。ノリコがどうなろうと、杏奈の知ったことではない。トーラスの仕事を邪魔することもない。
「じゃ、さっさと行けば」
そう言って離れようとしたのに、ノリコはまだくっついて来た。
「お姉さま。今日のコンサートについて、ご存じですか？」
「知らない」
「デビュー曲のタイトル、『JOKER』っていうんです。ちょっと神秘的な歌詞で、街で流れてるジョーカー様の噂に関係があるらしいんです」
「だから何？」
「ジョーカー様は、願いをなんでもかなえてくれるんです。MUSESがジョーカー様に関係あるなら、今日のコンサートには何か秘密があるんじゃないかと思うんです。集まったファン

は、願いをかなえるパワーを得られるとか」
横目でノリコの表情をうかがう。思い詰めたような顔をしている。
ノリコみたいなトロい子にも、ジョーカーにすがりたくなるほどの夢があるというのだろうか。杏奈は薄笑いを浮かべた。
ノリコの夢はなんだろう。美人になりたい？　素敵な彼氏が欲しい？　MUSESみたいなアイドルになりたい？
いや、この子にそんな望みがあるとは思えない。ノリコの頭の中は、陸上部と「お姉さま」、つまり杏奈のことでいっぱいだ……。
そこまで考えたとき、杏奈の薄笑いが強ばった。
――まさか。
いくらなんでも。まさか。
杏奈は青ざめて、ノリコの腕をつかんだ。
「あんた……何を望んでるの？　ジョーカーにかなえてほしい夢って……？」
「……怒らないでくださいね」
ノリコは怯えたような表情で答えた。
「わたし、ジョーカー様にお願いしてみるつもりなんです。お姉さまの足を治してくださいって……もう一度走れるようにしてくださいって」

杏奈はノリコの顔を見下ろした。

激しい怒りにかられたとき、頭に血が上るタイプと、逆に冷静になるタイプがある。杏奈は明らかに後者だった。指先が冷たくなる。すーっと、血の気が引いて行くのがわかる。

「……やめて」

自分でも意外に思うほど、冷静な声が出た。

「え……？」

「やめてくれる？　余計なお節介は」

「でも……」

ノリコは両手を胸の前で組んで、必死の表情で言い張った。

「わたしにとって一番の夢は、お姉さまが走る姿をもう一度見ることなんです。わたし、お姉さまに憧れて陸上を始めたんですもの。他には何も望みません。お姉さまさえ陸上部に戻ってくだされぱいいんです。そうすれば、わたし……」

パシン。乾いた音がした。

杏奈の右手が、ノリコの頬を打ったのだ。

通行人が、びっくりしたように見ている。ノリコはぶたれた頬を押さえて、呆然と杏奈を見つめた。

杏奈は感情のこもらない声で言い捨てた。

「わたしにかまわないで。あんたみたいな子――ぞっとする」
杏奈は踵を返した。
歩き始めてすぐに、自分がまだ災厄から逃れていないことを知った。しくしくと、しゃくり上げる声がすぐ後ろについてくる。
杏奈はしばらく無視して歩いたが、泣き声は去らなかった。このままでは、いい見世物だ。我慢ならなくなって立ち止まった。振り返ると、ノリコが目をこすりながらベソベソ泣いていた。
「……あんた……」
言葉が見つからない。怒りよりも、脱力感にとらわれる。
「ご、ごめんなさい……わたし……バカでした。自分の都合ばかり優先で……お姉さまの気持ちも考えないで……怒られるの当然です……」
「わかったなら、さっさとコンサートでもなんでも行けば」
「行きません」
ノリコは手の甲で涙をふいて顔を上げた。
化粧っ気がないので、マスカラが落ちたりファンデが流れたりする醜態はさらしていない。が、涙と鼻水でグズグズになった顔は、やはり相当にみっともなかった。
「わたし、自分が間違ってたことがわかりました。ジョーカー様のことはきっぱり忘れます。

コンサートも行きませんし、MUSESのCDも買いません」
「……あ、そう」
泣くときも立ち直るときも、単純な子である。
杏奈は背を向けた。しかし、ひたひたという足音はまだついて来た。
もう杏奈は足を止めなかった。代わりに、歩きながら背後へ向けて言った。
「――なんでついて来るの？」
「ご迷惑でしょうか」
「迷惑に決まってるでしょ」
「つきまとってるわけじゃないです。わたしもこっちの方向に行きたいだけです」
杏奈は無言で歩き続けた。足に自信があれば、ダッシュして振り切りたいところだが、今の杏奈の足では無理だ。
ストーカーに狙われたような気分だ。ノリコのちょこちょこした足音が、ぴったり背後にくっついてくる。
しばらく街を歩き回った。杏奈には別に、どこに行こうという当てはない。家にいても息苦しいから、ぶらっと外出しただけだった。
ゾディアックに行くには時間が早すぎる。ゲーセンという気分でもない。買い物もしたくないし、喫茶店も気が進まない……。

結局、杏奈はぐるぐる歩き回った揚げ句に、元いたファッションビルの前に戻って来た。植え込みの縁のレンガに腰を下ろす。ノリコはおずおずと、杏奈の隣に座った。

「あのう……」

気詰まりそうな顔で、ノリコは腕時計を見た。

「コンサート、もう始まってますね」

「……」

「あ、もちろん、もう行かないって決めたからいいんです。友達にはあとで怒られると思いますけど、いいんです」

「……」

「MUSESって、うちの学校の生徒なんですよ。メンバー三人とも。ご存じでした？」

初耳だった。

杏奈は周囲をうかがった。並べて貼られたMUSESのポスターが目に入る。二人は正面向き、一人はシルエット――。

「みんな二年生なんです。わたしとはクラスは違いますけど。一番右端が荻島さん……みーぽっていって、スポーツ万能なんです。陸上部にも見学に来たことがあるんですよ。入部はしてくれなかったけど。左は柴田さん。わたしは話したことないんですけど、大人っぽくて美人だから、男子にすごく人気あるんです。ホントにアイドルになっちゃうとは思わなかったけど……

そして真ん中の、シルエットになっているのが……」
ノリコはポスターを指差した。
杏奈はわずかに目を細めて、逆光で撮影された少女の写真を見つめる。顔は影になっていてわからないが、陽に透けた見事な金髪が目立つ。
「リサです。リサ・シルバーマン。お姉さまもきっと、学校で見かけたことあると思います。リサって目立つから。リサ・シルバーマン。ご両親ともアメリカ人なんですって。でも、お父さんが日本びいきで、すごい和風のお屋敷に住んでるんですよ。本人はカンフー映画好きで、広東語喋ったりするし……面白い人なんです。美人だけど、気取ってないし……」
リサ・シルバーマン。
周防たちと一緒に行動しているブロンド少女だ。間違いない。
なぜ彼女がMUSESのメンバーに？　周防たちを裏切ったということか？　トーラスは何を企んでいる……？
杏奈はノリコに向き直った。
「MUSESのデビューって、どうやって決まったの？」
「はい？」
杏奈のほうから話しかけてきたので、面食らったらしい。ノリコは目を瞬き、嬉しそうな顔になった。

「スカウトされたって聞きました。三人で撮ったプリクラにメッセージを書いてゲーセンのボードに貼っておいたら、偶然プロデューサーの目に留まったんですって。ドラマチックですよねー」

——違う。

偶然であるはずがない。トーラスは、リサ・シルバーマンが周防の仲間であることを知って、デビューを仕組んだのだ。リサはトーラスの正体に気付いていないのだろうか。芸能活動を始めて、戦線を離脱するつもりなんだろうか？

何かおかしい。トーラスの目的はなんだろう。予言を織り込んだ歌をヒットさせ、イン・ラケチの成就を目指す。それだけなら、周防たちに邪魔される危険を冒してまで、リサを引き込む理由はない。何を企んでいる……？。

突然、周囲が騒がしくなった。

人々が立ち止まり、ざわめき、上を見上げている。空に何か出現したのかと思ったが、そうではなかった。

彼らが見ているのは、ビルの上に取り付けられた電光掲示板だった。ニュース速報が表示されているらしい。

「うそー」

「どうして？　テロ？」

「なんてテロリストがコンサート会場なんか狙うのよ？」

みるみるうちに、騒ぎが広がってゆく。杏奈は素早く立ち上がって、頭上に流れる電光文字に目をやった。

――アイドルグループMUSESのコンサート会場で火災発生。爆発物によるテロ事件とみられる。出演者・観客に死者はない模様。

「ええ……!?」

ノリコが悲鳴のような声を上げた。

「野外音楽堂が!?　ど、どうして……!?」

レオだ。

トーラスの危惧が的中したのだ。レオは、贖罪の火と称してコンサート会場に火を放った。しかも、ただの放火ではない。爆発物によるテロ。

「どうしよう……友達が二人、コンサートに行ってるのに……！」

ノリコは震え出した。

「わ、わたし、音楽堂に行ってみます。友達を捜さなきゃ」

「あんたが行ったって役に立たない」

「それはわかってますけど……でも……」

「死者はいないってニュースに出てた。それより、家に帰ったほうがいい」

「だけど……」
「巻き込まれたくなければね」
杏奈はノリコの腕をつかんで、顔を寄せた。周囲の人に聞かれて、パニックを引き起こすのはごめんだ。
「たぶん、一か所じゃ終わらないから」
「……え？」
「テロ、続くと思う」
ノリコは呆然として杏奈を見つめた。
杏奈は、トーラスから聞いた話を思い出していた。
十年前、放火事件が相次いだ。その犯人がレオだったのではないかと言われている。炎の宴の再来だ。しかも、もっと規模が大きい。きっと、爆破は音楽堂だけでは終わらない。放火を繰り返したのと同様、レオは爆破を繰り返す。必ず。
「お姉さま……どうしてそんなこと知って……？」
人ごみをぬって歩き出した杏奈の後を、またしてもノリコはついて来る。
「待ってください、お姉さまあ……どこへいらっしゃるんですか？　お姉さまも家に帰るんですか？　駅はこっちです……」
「電車は使わないほうがいい」

杏奈のつぶやきと同時に、また周囲が騒がしくなり始めた。杏奈は目を上げた。電光掲示板に、ニュースの続報が流れている。

――港南警察署、青葉消防署も同時爆破。警視庁では同一犯人による連続テロと見て、緊急対策本部を設置。

「どういうこと!?」

掲示板を見上げた若い女性が、悲鳴のような声を上げている。

「いったい誰が……」

「過激派？　愉快犯？」

「大変、うち港南区なのに……」

「ねえ、無差別連続テロなら、繁華街は危ないいんじゃない？　今日はもう帰ったほうが……」

人の流れが変わった。みな、あわただしく駅へ急ぎ始める。

杏奈はその流れに逆らって歩いた。

気の狂ったようなレオの笑い声が、耳の奥に谺する。電車は危ない。多数の人々が集まる閉鎖空間は、レオの格好の標的になる。

杏奈はバッグから携帯電話を取り出した。着信履歴から、トーラスの番号へかけてみる。だが、予想通り、電話は通じなかった。

アクエリアスやジョーカーに連絡を取る方法はわからない。どうすればいい……？

　とりあえず、ゾディアックに向かってみることにした。あそこで待っていれば、きっと誰かが現われるだろう。ゾディアックは夢崎区にある。ここから徒歩だと二時間はかかってしまうが、杏奈は歩く覚悟を決めていた。レオのお祭りに巻き込まれるよりはマシだ。
「犯人、仮面党じゃない？」
　そんな声が耳に飛び込んできた。杏奈は立ち止まって、声の方向に目を向けた。
　OL風の女性が二人、話し合っている。二人とも興奮している様子だった。
「ほら、最近噂になってる団体があるじゃない。ウチの会社でも、入党しちゃった人がいるのよ」
「名前だけは知ってるけど。何。新興宗教？」
「私も実体は知らないけど……MUSESって、『JOKER』って曲を歌ってたんでしょ？　ジョーカーって、仮面党の党首だもの。安易に名前を使われたから、怒って報復したのかも……」
　滑稽な推理だ。そのコンサートそのものが、仮面党四天王の一人が仕組んだものなのに。
　しかし、彼女たちの声高な会話は周囲に波紋をもたらした。あちこちで、同様の声が起き始めた。
「仮面党か……うさんくさいよな。オレは前から怪しいと思ってたんだ」
「同時多発テロってことは、組織力がなきゃできないし」
「宗教団体なの？　やだ、怖い」

「まさか、強硬手段で珠閒瑠市を乗っ取るつもりじゃ……？」

盛り上がる声を聞いて、杏奈はぞっとした。

この街では、ある種の噂は現実になる。テロは仮面党の仕業——そんな噂が独り歩きしてしまったら、本当に仮面党はテロ組織へと変貌しかねない。

「お姉さま……」

またノリコだ。小柄な彼女は、人の流れにもまれ、突き飛ばされたり押しのけられたりしながら、必死に杏奈について来る。

「帰れって言ってるのに」

「帰ります。はい、帰ります。でも、お姉さまはどちらへ？」

「あんたに関係ない」

「は、はい。でも、と、途中まででもご一緒させてください。わたし……わたし……心細くて……」

また泣き出されたら厄介だ。杏奈は放っておくことにした。

ようやく人ごみを抜けて、大通りに出た。車道は大渋滞だった。バカみたいにクラクションを鳴らし続けているヤツもいるが、車は一向に動く気配がない。爆破の影響で、何か所かの道路が封鎖されているのだろう。これでは、タクシーも使えない。

杏奈は無言で歩き続けた。ノリコももう何も言わない。

あわただしい一日が終わろうとしていた。

杏奈とノリコは平坂区に入った。昔ながらの下町で、古びた建物が多い。このあたりには、爆破事件の影響はさほど及んでおらず、人の流れはのんびりしていた。

若者が多く集まる青葉区や夢崎区に比べると、取り残された感のある界隈だが、最近はようやく再開発が進み始めた。駅ビルは小洒落たショッピングセンターになっているし、周辺には新しいファッションビルがいくつか並んでいる。それでもどこか庶民的な空気を残しているのが平坂区の特徴だった。

杏奈は横断歩道を渡った。左手に高架が見える。銀色の電車が、ちょうど駅のホームにすべり込んで来るところだった。杏奈の危惧に反して、ダイヤは順調に動いているようだ。

「お姉さま、どこまでいらっしゃるんですか……」

ノリコが久しぶりに口をきいた。心細さがますます募ってきたらしい。杏奈はため息をついた。

「帰れって言ってるんだけど」

「でも……」

「いい加減にしてくれない？　あんたのお守りはしてられな……」

その瞬間だった。

正面からすさまじい衝撃波を食らった。

杏奈には何が起きたのかわからなかった。まともに爆風に襲われ、数メートル吹っ飛ばされた。
世界が回る。ぐるっと一回転。肩から地面に叩きつけられる。脳裏をよぎったのは、交通事故の記憶だった。あのときと同じ。恐怖に全身が硬直した。
上からばらばらとガラスの破片が降ってきた。今の衝撃で、通りに面したビルの窓が破砕したのだ。杏奈は腕を上げて顔を庇った。
なんとかガラスの雨がおさまったので、顔を上げた。視界に飛び込んできたのは、火の色だった。駅ビル——スマイル平坂の窓から、勢いよくオレンジ色の火炎が噴き出している。
テロだ。キング・レオはここにも爆弾を仕掛けていたのだ。
「お姉さま、あれ……!」
ノリコの悲鳴で、杏奈は視線を向けた。総毛立つような光景が展開していた。
駅ビル爆破の衝撃で、高架線路が崩れ落ち始めたのだ。堅固に組まれた石壁が瓦解し、その下に軒を連ねていた居酒屋が押しつぶされてゆく。安っぽい看板が地面に落ちて割れる。引き戸がひしゃげ、中からあわてた人々が飛び出してくる……。
すべてがゆっくりと、スローモーションのように見えた。
すでにホームを出発していた電車が、耳の痛くなるような急ブレーキの音をたてながら、折れた線路に突っ込んでいった。杏奈は息を止めて、止めようのない悲劇を見つめていた。

轟音。電車が高架からすべり落ちてゆく。車体が玩具のように折れて、新たな火が噴き上がった。ノリコの悲鳴も、爆発音と人々の絶叫にかき消された。

——キング・レオ。

杏奈は奥歯を食いしばった。身体が震える。豪奢な火の色は、目の前で焼死した井上康夫を思い出させた。

須藤竜也。何人殺すつもり……？

「お……お姉さまああ」

ノリコが這い寄ってきた。足を怪我しているのかと思ったが、そうではなかった。単に腰が抜けて立てないらしい。

「テ、テロです。こんなところまで、爆破テロが……」

大混乱が生じていた。悲鳴を上げて走り出す人々。車を捨てて逃げるドライバー。

杏奈は服に散ったガラス片を払い、歩き出そうとした。炎上する駅ビルに背を向けて。

「お姉さま、待ってください！」

ノリコが切迫した声を上げた。いつもの甘ったれた調子ではない。

杏奈は振り向いた。ノリコはなんとか気を取り直したらしく、立ち上がっていた。

近くで、倒れている老婆がいた。さっきの爆風でやられたらしい。転んだ拍子に骨を折ったのかもしれない。立ち上がれない様子だった。このままでは、急ぎ足に逃げる人々に蹴られ、

踏まれ、大怪我をしそうだ。
ノリコは駆け寄って、老婆に手を貸そうとした。振り向き、杏奈に向けて必死の声で訴える。
「手伝ってください、お姉さま。この方、立てないみたいなんです」
「……」
杏奈はじっとノリコの顔を見つめた。
あきれる。この子、何をやってるんだろう。他人にかまっている場合ではないのに。さっさと逃げなければ、二次爆発の危険もあるのに。こんなときまで善人ぶりたいのだろうか？
人ごみの中で声を張り上げている中年の男性がいた。逃げ惑う人々の悲鳴の間から、彼の声がはっきり響いてきた。
「落ち着いて！　落ち着くんだ！　怪我をしていない人はこっちへ来て手を貸してくれ。怪我人を運び出すから」
大半の人は足を止めない。みんな、自分の身を守ることに必死だ。
だが、中には駅ビルの方向に引き返す人もいた。怪我人救出に協力するつもりらしい。
理解できない。こんな状況で、人助けなんて。
「お姉さま！」
ノリコの苛立ったような声で、我に返った。ノリコは老婆に肩を貸し、精一杯足を踏んばって、なんとか立ち上がらせようとしている。

「手伝ってくださいってば！　わたし一人じゃ運べません。何をボーッとしてるんです!?」
顔を真っ赤にし、別人のような形相で怒鳴りつける。ノリコがこんな顔をするとは思わなかった。
杏奈はゆっくり首を横に振った。
背を向ける。歩き出す。
「お姉さま!?」
ノリコの声が追いかけてきた。信じられない……と言いたげな声。
杏奈は心を閉じた。聞こえない。聞きたくない。
なぜ、他人にかまう。この非常時にまで。
「――バカ！」
怒りと侮蔑をこめた声が投げつけられた。
バカ呼ばわりされるのは二度目だ。最初は、ゾディアックで煙草の煙を吹きかけたとき。あのときのノリコは、自分の気持ちを踏みにじられて傷つき、子供っぽく泣き叫んでいた。今は違う。ノリコは怒っている。心の底から怒り――杏奈を軽蔑している。
杏奈は足を止めなかった。
胸の奥に、苦い塊が生じた。ノリコに嫌われようが幻滅されようが、どうでもいいはずなのに――なぜか、心にぽっかり穴があいたような気がした。

＊

ようやく駅前の騒ぎから逃れたと思ったら、また声をかけられた。どうやら今日は、揉め事が杏奈を見つけて寄ってくる日らしい。

「杏奈さん！　杏奈さんじゃないッスか！」

新聞部員、島崎光雄だった。手を振りながら、杏奈のほうへ駆け寄ってきた。

「うわー、奇遇ッス！　杏奈さん、さっきの爆発、見ました？」

「……すぐ近くにいたよ」

「えっ、そうなんスか。うわー、よくぞご無事で。オレ、カス校のあたりにいたんスよ。カス校の文化祭で、生徒会長が焼死するっていうスゴい事件があったもんで、取材に」

「……」

「カス校生つかまえていろいろ聞いてる途中で、携帯に電話かかってきたんです。同じ新聞部のヤツからで、MUSESのコンサート会場が爆破されたって。オレ、チケット取れなくてフテてたんスけど、行かなくてよかったッス。んで、他にもテロが相次いでるって言われて、驚いてたら、いきなりドーンって音がして。見たら、駅のほうで火が出てるじゃないッスか。ビびりましたよ～」

童顔を赤くし、興奮した口調でまくしたてている。杏奈は思いついて尋ねた。

「テロのこと、詳しく調べられる？」
「え？　はい、ただいま新聞部員が総力て取材中ッス。みんな、携帯で連絡取り合いながら。セブンス新聞部の取材力はダテじゃないッス！　でも、現場は危険だから、あんまり近づけないッスけど……」
「わかってることを教えて。被害の状況とか。犯人像とか」
「了解ッス！」
光雄は、杏奈から頼られたのが嬉しいらしい。張り切って携帯電話を取り出した。
「ホントは部外者にニュースを漏らしたりしちゃいけないんスけど、今は非常事態ッス。市民のためになる情報提供なら、華小路部長も許してくれると思うッス……あ、もしもし。チカリン？」
光雄は何やら話していたが、すぐに電話を切った。
「チカリンが情報の中継役になってるんス。この近くにいますから、会いに行ってみましょう。あいつのところにいれば、情報が続々入ってくるッス」
「チカリンて誰」
「新聞部員ス。一年生ッスけど、すっげえ優秀だって先輩たちから誉められてるんスよ。オレも見習わなくっちゃー」
杏奈は、元気よく歩き出した光雄に続いた。

光雄が向かったのは、商店街カメヤ横丁だった。アーケードの中に、ドラッグストアやらファーストフード店やら、あるいは昔ながらの惣菜屋やらがひしめいている。猥雑で生活感のある通りなのだが、爆破事件の影響か人通りはほとんどなく、ひっそりしていた。
「このちょっと先に、ピースダイナーってハンバーガー屋があるんス。チカリンはそこの常連なんスけど……杏奈さん、入ったことあります？」
「ない」
「結構ウマいッスよ。オレのお薦めはビッグピースバーガーとポテトとシェイクのセットなんスけど、最近は前より少しサイズが小さくなってることに、何か陰謀の匂いを感じるッス……あ、ここッス」
明るい看板のファーストフード店だった。店内には流行のＪポップが流れている。普段ならにぎわっているのだろうが、今、店内にいる客は一人だけだった。光雄は、カウンターの近くにいたその女の子に駆け寄り、杏奈に紹介した。
「杏奈さん、こいつがチカリンッス。チカリン、こちらが……」
「存じておりますわぁ、もちろん」
セブンスの制服を着た少女は、ハスキーな声で言った。髪を不規則にツンツン立たせ、カラフルな鳥の羽根を飾っている。よくいえば個性的、悪くいえば突拍子もないファッションセンスの持ち主のようだ。

「吉栄杏奈先輩、お目にかかれて光栄でございますぅ。わたくしセブンス一年の上田知香、どうかお気軽にチカリンとお呼びくださいませ」

「杏奈さんはテロ事件について知りたいんだって。チカリン、何か新しい情報ある？」

「情報はまだ錯綜している状況でございます。犯人については、仮面党のテロリストだとか、五人組だとか、いろいろな情報が飛び交っていますが、まだ確定的ではないのでございます」

「五人組？」

「野外音楽堂から五人組の男女が逃げ出すのを見たという目撃情報があるのです。そのうち一人がセブンスの制服を着ていたとか、いやカス校だったとか、はたまたリサ・シルバーマン先輩だったとか、それはもういろいろ」

「待てよ、リサ先輩はＭＵＳＥＳのメンバーじゃん。犯人のわけないよ」

光雄が言ったが、チカリンは首を振った。

「だから、まだ確定的ではありませんのでございます。ただ、現場から金髪の女性が逃げたという目撃情報が数件ありまして、これがリサ先輩ではないかとみられています」

杏奈は考えこんだ。

目撃されたのは間違いなくリサだろう。五人組というのは、周防たちのことだ。

昨日会った、偽者ゆきののことを思い出した。五人組に加わっているゆきのは、果たしてどちらだ？　本物なのか、偽者なのか？

光雄は甲斐甲斐しく、ポテトだの飲み物だのを買ってきてテーブルの上に並べた。杏奈は合いの手を出さずに、ただチカリンの話に耳を傾けた。

「本日最初に爆破されたのは野外音楽堂。時限装置を用いた爆弾だったようです。その直後に青葉消防署と港南警察署。さらについ先ほど、スマイル平坂と、夢崎区のスポーツクラブGOLDが爆破されたという情報が入ってきています」

「ひえー……ホント、無差別テロだな」

光雄が身震いしたとき、チカリンの携帯電話が鳴り出した。応対したチカリンは、早口の通話を終えると、緊張した顔で杏奈たちに向き直った。

「港南区取材中の新聞部員より、ただいままた新しい情報が入りました。港南区〈空の科学館〉が襲撃された模様。一階から上の階へ、一定時間をおいて炎上していったそうで、なんらかの発火装置を使ったものと思われます。そして……この情報の真偽はあやふやなのですけれど」

チカリンは自信のなさそうな顔で付け加えた。

「飛行船が飛んだそうです」

「……え？」

「科学館の屋上に、飛行船の模型が飾ってあったのです。それが飛んだらしいのです」

「なんだって？　模型だろ？」

光雄が目を見開いた。

「オレ、見たことあるぜ。かなりデカいけど、本物じゃないよ、ただの飾りだよ。あんなもの、飛ぶわけないじゃん」
チカリンはますます自信なさげに答えた。
「ですから、真偽のほどは確定できないのです。動力も燃料もない飛行船の模型が、飛ぶはずないですから……ただ、セブンス新聞部員がいい加減な情報を伝えることは考えられませんので、まず信じてよいかと。チカリンが考えますに、これは噂システムのせいではないでしょうか」
「噂……？」
「はい。珠間瑠市で、噂が次々に現実化していることはご存じかと思います。実は、科学館の飛行船は非常時には飛ぶ仕掛けになっていると、小学生たちの間で噂が広まっていたのです。チカリン、小学生の弟がおりますので聞き及んでおりました。子供たちのたわいない空想なんですけれども、土壇場でそれが現実化してしまったのではないかと」
「それって、誰が乗ってたんだ？」
「それはまだ不明でございます。科学館の中に、社会科見学中の小学生が多数いた模様なので、その子たちが乗って救出されているとよいのですけれども……あ、お待ちくださいませ―」
また携帯電話が鳴った。チカリンは通話の途中で「ええっ」と素っ頓狂な声を上げ、あわただしく電話を切った。

「またまた新情報でございます。科学館を飛び立った飛行船は、離陸後しばらく港南区上空を飛んだ後、恵比寿海岸沖に墜落した模様です」

「墜落……？」

「はい。乗員の生死は不明でございます。テロの犯人が乗っていたのかどうかも、今のところは」

杏奈は眉を寄せた。

レオは乗っていたのだろうか。周防たちは。……黛ゆきのは。

レオや周防はともかく、黛ゆきのがこんなことでくたばるとは思いたくなかった。もしも本物であれば、だが。

あいつは杏奈の獲物だ。偽者との因果関係も問い正さねば気がおさまらない。杏奈が手を下す前に死なれてはたまらない。

「なんだかさっぱりわからねえよ。コンサートを妨害してみたり、飛行船を飛ばしてみたり、テロリストの目的ってなんなんだよ？」

苛立ったような光雄の声に、チカリンが答えた。

「情報がまだ少なすぎますわね。ちょっとお待ちを、ただいま、チカリンの秘密兵器をお目にかけます。ぱんぱかぱーん」

自演のファンファーレとともにチカリンが鞄から取り出したのは、手のひらにのるサイズの

モバイル端末だった。たちまち、光雄が目を輝かせる。
「うぉ、かっこいー！　チカリン、いいもの持ってるなー！」
「ネットに接続してみます。珠閒瑠市の噂を扱ってるサイトがありますので、何かわかるかも。ご期待くださいませ」
チカリンは端末と携帯電話を接続し、キーボードを操作した。
杏奈は黙って眺めていた。すさまじい速度でキーを打つチカリンの指が、まるで別種の生き物のように見える。光雄が気付いて、小声で囁きかけてきた。
「ひょっとして、杏奈さんって、インターネットとか全然やらないッスか」
「悪い？」
「悪くないッス。ネットやってる杏奈さんて想像つかないッス」
「繋がりました」
チカリンが宣言し、杏奈は小さな画面をのぞきこんでみた。暗い赤の地に、金色で「BAOFU」の文字が浮かび上がっている。チカリンが説明した。
「パオフゥは、仮面党をはじめとする珠閒瑠市の怪情報を専門に扱ってるサイトなのでございます。情報量にかけては文句なく最高です。もっとも、時々信用できない情報も混じってますけれど……ああ、速報がいろいろ入ってるようです」
チカリンが読み上げたのは、ほとんど杏奈の知っていることばかりだった。連続テロ、目撃

された五人組、仮面党の関与。
「あ、ラッキーでございますわ、お喜びくださいませ。掲示板にELLIEさんの書き込みが」
「えりーさん？」
「ハンドルネームです。えーと、つまり、掲示板に書き込みを行なう際につけるペンネームのようなものですわ。ELLIEさんはオカルト関係の情報に詳しい人で、今回の珠閒瑠噂システムについてもいろいろ書き込みをしてらっしゃるのです……」
チカリンはすごい速度で画面をスクロールさせてゆく。画面を見慣れない杏奈には、目がちかちかして追いつけなかった。
「な、な、なるほどぉ！　ELLIEさんの仮説はやっぱり面白いです」
「何が書いてあるの」
「今回の爆破事件、一見関連性がないように見えますけれども、これには意味があるのだというこことです。珠閒瑠市全体はほぼ円形をしていますので、これをゾディアックに見立てるのだそうです」
「クラブ・ゾディアックのことか？」
と光雄が尋ね、チカリンがあっさり否定した。
「ゾディアックっていうのは黄道十二宮のことです。占星術に使う用語なのです。爆破された建物のうち、消防署と警察署はその後の爆破をやりやすくするためにのみ破壊されたものとみ

なし、除外します。すると、標的となった建物は四つ。これらをゾディアックに当てはめるのです。すると、野外音楽堂が獅子座、スマイル平坂が水瓶座、GOLDが蠍座、空の科学館が牡牛座の位置に該当します」
杏奈は、四天王それぞれの呼称を思い出した。レオ、アクエリアス、スコルピオン、トーラス。なるほど、対応している。
「この四つの星座は、グランドクロスを形成する星座として、占星術上では特に意味があるのだそうです。つまり、犯人は占星術についての知識をもった人物で、一種の呪術を完成させるために爆破場所を選んだのだということになります」
「なんだか、こじつけっぽいなぁ」
光雄が退屈そうに言った。単純な彼には、チカリンの説明がよく呑み込めなかったらしい。
「無差別テロって考えたほうがわかりやすいけど」
「チカリンは、ミツオくんよりELLIEさんを信用しますわ」
「ひでぇなー」
二人は笑い合ったが、杏奈は考えこんだ。
グランドクロス。四つの星座。呪術を完成させるための爆破。
レオは言った。贖罪の火が必要だと。選ばれた四つの地点に火を点すことが、イン・ラケチの成就のために必要だったということか？　爆破が実現したということは、すでに託宣のその

部分は成就したと考えてよいのだろうか？

マイヤの託宣にあった言葉は――贖罪の迎え火は天を照らし　獅子の咆哮はあまねく響く。

獅子の咆哮とは何を意味するのだろう。キング・レオがまだ何かやらかすということ……？

チカリンはさらに小一時間ほどキーボードを叩き続けたが、それ以上の情報は引き出せなかった。杏奈の興味を引いたのは、MUSESのプロデューサー佐々木銀次が取材に応じ、「遺憾である。ファンの皆様にお詫び申し上げる」という短いコメントを発表したというニュースぐらいだった。

「申し訳ありません、今の段階ではこれが限度のようです。飛行船については、もう少し粘れば続報が入ると思いますが……」

「もういい」

杏奈は席を立った。

飛行船墜落のニュースは気になるが、ここで待っているよりも、トーラスを捜しに行ったほうが早そうだ。彼に会えば、レオの生死も――ゆきのの所在もわかるだろう。

杏奈はピースダイナーを出た。とりあえずトーラスに電話してみようと携帯を取り出したとき、前方の人影に気付いた。

身体がすくむ。昨日とまったく同じシチュエーションだ。

足早に歩いて来るのは、ゆきのだった。服装も昨日と同じ。鮮やかなレモンイエローのパン

ツにグレーのジャケット、帽子、丸いサングラスまで。
偽者だ。そう直感した。赤い瞳を隠しているのが、その証拠。
一瞬、隠れてやり過ごそうかと思ったが、それも癪だった。杏奈はわざと顔を上げて、ゆきのを睨みつけながら歩いた。
ゆきのは、ほとんどぶつかりそうになるところまで、杏奈に気付かなかったらしい。急に「わっ」と叫んで飛び上がった。
「杏奈!?」
険しい声で叫ぶ。杏奈は足を止めて顎を引き、上目遣いにゆきのを睨んだ。
どう出るつもり? 昨日みたいになれなれしく触ったら、殴ってやる……。
ゆきのはしばらく黙っていたが、気の抜けた声で言った。
「……何やってんの、こんなとこで」
「あんたに関係ない」
「その言い方、やめなよ」
ゆきのは片手を腰に当て、叱りつけるように言った。
「あんたが仮面党なんかにかかわってる以上、あたしは無関係じゃないんだから。仮面党にはずいぶんてこずらされてるし……まったく、今日はさんざんな目に遭ったよ。あんた、まさか一連のテロにかかわってるんじゃないだろうね? キング・レオの手伝いなんか、やってない

だろうね？」
怒ったような、心配そうな口調だった。
杏奈が知っている通りのゆきのだ。どうやら本物らしい。一気に緊張がとけた。
しかし、まだ油断はできない。杏奈は手を伸ばし、ゆきのがかけているサングラスをむしり取った。
「わっ。何するんだよっ」
ゆきのは面食らったようだ。杏奈はじっとその顔を見上げた。
間違いない。黒い目だ。本物の黛ゆきのだった。
「なんだよ、失礼な。返しな」
ゆきのはムッとしたように杏奈からサングラスを奪い取って、かけ直した。
「なんで、そんなのしてるの」
「指名手配中なんだよ。念のため、変装してるんだ」
「指名手配？」
「あんたのお仲間がやった爆破テロ。あれが、どういうわけか、うちらの仕業にされててね」
ゆきのは忌々しげに言った。
杏奈は微笑した。良かった。本物のゆきのだ。
「何ニコニコしてんの」

ゆきのに問われて、杏奈の微笑が消えた。
自分の思考が謎だ。何が「良かった」なのだろう。ゆきのが本物だろうが偽者だろうが、敵であることに変わりはないのに。
「そんな怖い顔しなくてもいいじゃないか。笑ってるほうがいいよ」
「……うるさい」
「それより、さっきの質問。答えなよ。あんた、爆破テロの手伝いしてたの？」
杏奈は答えなかった。ゆきのは困ったように続けた。
「科学館が炎上したことは聞いてる？　あんたのお仲間のキング・レオがやったんだけど」
「飛行船が飛んだとか落ちたとか、聞いたけど」
「そうなんだよ。それで——キング・レオだけど」
ゆきのは、杏奈を気遣うような顔をして言った。
「死んだよ」
杏奈はゆきのの顔を見つめ、小さくうなずいた。
驚きは感じない。予感はしていた。ゆきのの無事な姿を見たときに。
悲しくはなかった。ゆきのは「お仲間」と呼ぶが、レオに好意を感じたことはない。ただ、四つの星座の一つが欠けたな、と思っただけだった。
獅子の咆哮はあまねく響く。獅子の星座を負う男が息絶えたということは、あの託宣の文句

は、もはや成就しないのだろうか。ジョーカーはどうするつもりだろう……。
「あのね、あたしはこの近くの事務所で、仲間たちと待ち合わせてるんだけど」
ゆきのは、妙にためらうような口調で言った。
つまり、周防たちがもうじきこの付近にやって来るということか。その前に去れと言っているのか。
うなずきかけた杏奈に、ゆきのは思い切ったように言った。
「あんたも、来ない？」
「……？」
「仮面党なんてやめちまいなよ。あんたには似合わないよ。あたしたちと一緒においでよ。周防だって舞耶さんだって、絶対にあんたを拒んだりしないから。きっとわかってくれるから。あたしからも、一緒に頼んであげるからさ……ね、そうしなよ」
杏奈はじっとゆきのの顔を見つめた。
言葉が出ない。昨日の偽ゆきのとは別の意味で、本物ゆきのには唖然とさせられる。何を言い出すのかと思えば……やはり、虫でもわいてるとしか思えない。
ゆきのは真面目な顔で杏奈を見下ろしている。杏奈は苦笑した。杏奈が改心すると期待しているゆきのが、滑稽だった。
「一つ、訊きたいんだけど」

「なんだい？」
「あんた、双子の姉か妹いる？」
「はあ？」
質問が唐突すぎたらしい。ゆきのは間の抜けた声で答えた。
「いないよ、んなもん」
「本当に？　昔生き別れたとか、ない？」
「ないよ。弟や妹はいるけど、歳離れてるし。双子って、何それ」
「なんでもない」
すると、昨日のあれはなんだったのだろう。ドッペルゲンガー。もう一人のわたし……。
「おかしなやつだね。とにかく、今言ったこと考えてみてよ。レオのやったこと考えれば、仮面党がどんな組織かわかるだろ。かかわってると、ろくなことにならない……」
杏奈は最後まで聞かずに、ゆきののそばを離れた。
歩み去ろうとする杏奈の背に、ゆきのはぽつんと声を投げかけてきた。
「杏奈。一人で生きていけるなんて考えるのは、子供の甘えだよ」
杏奈は振り返らなかった。
ありきたりのお説教。大人ぶった正論。偽善者のお節介。
なのに、ゆきのの声は鋭い槍となって杏奈の胸に突き刺さった。

ゆきのはこの後、仲間の周防たちと合流し、杏奈のことなど忘れるだろう。身勝手な、救いようのないヒネクレ者として、意識の隅に追いやってしまうのだろう。

ゆきのに比べて、杏奈には何もなかった。仮面党は、ゆきのが語るような意味での「仲間」ではない。杏奈が帰る場所はどこにもない。

——寂しい？

馬鹿な。

杏奈は、心が弱くなりかけている自分にあきれた。

ずっと、平気だったはず。誰にもかかわりたくなかったし、誰からもかまわれたくなかった。なのに、今になってどうしてこんな気持ちになるのだろう。

杏奈は唇を噛み、首に巻いたマフラーに顎まですっぽり埋めて、足を速めた。

＊

トーラスの電話はやはり繋がらなかった。杏奈は夢崎区を目指して歩き続けた。

道路が封鎖されていたり、大混雑に巻き込まれたりして、かなりの時間を要した。結局、たどり着いたときにはすっかり夜になっていた。

この区の被害は、スポーツクラブGOLD。杏奈が通りかかったときにはすでに鎮火され、建物の上半分は無残に鉄骨をさらしていた。救急車が間に合わないらしく、路上にはまだ幾人

もの怪我人が横たわり、呻きながら助けを待っている。建材が燃えた異臭と、血の臭いが生々しかった。

ここでも、テロの犯人は仮面党だという噂が囁かれていた。怒りをこめた人々の会話が耳に飛び込んでくる。杏奈は人ごみをぬってゾディアックに向かった。

開店時間はとっくに過ぎているが、店は開いていなかった。さすがに、街がこの状態では、臨時休業するしかないだろう。

裏口から建物に忍びこみ、三階に上がる。トーラスやアクエリアスが来ているかどうかはわからなかったが、待っていれば現われるはずだ。杏奈には、彼らと連絡を取る手段が他に思い当たらなかった。

扉を開いた杏奈は、一瞬、立ちすくんだ。

見知らぬ少年がいた。ソファに座っている。

彼は、杏奈が入って行っても顔を向けなかった。うなだれて、床に視線を落としている。青い学生服は、春日山高校の制服だった。

この部屋は、仮面党幹部にしか利用されていないはずだ。この少年は何者だろう。ゾディアックの客が迷いこんだとも思えない。仮面党に入党したくてまぎれこんだのか。それにしては様子が変だ。

杏奈はドアを閉めて、少年に歩み寄った。少年はようやく顔を上げた。

静かに、放心したような表情で杏奈を見つめている。女の子かと見間違えるほどの、整った容貌だった。物憂げに翳った瞳は長い睫毛に縁どられ、前髪が片目を隠すほど長く伸びている。肌は白く、なめらかだった。

しかし、よく見れば、女の子に特有の柔らかさがない。顎も頬も引き締まり、優しげな表情の中にも芯の通った強さがある。凛とした少年の顔だった。

「……あんた……誰？　ここで何してるの？」

杏奈は警戒しながら尋ねた。

少年は杏奈に視線を据えて、微笑んだ。くらくらきそうな笑顔だった。美少年だ。掛け値なしの。

「久しぶりだね。吉栄杏奈」

かすかに笑いを含んだ、からかうような声。聞き覚えがあった。

杏奈は呆然とした。信じられなかった。

質問が、口から滑り出る。

「……その声って……まさか、ジョーカー？」

「そうだよ」

少年は小さくうなずき、杏奈から視線をはずして壁のほうを見た。

杏奈はその横顔に釘づけになった。鼻から唇、顎にかけてのラインが、完璧に美しい。

肯定の返事を得ても、まだ信じられなかった。仮面の怪人ジョーカーが、まさかこんな素顔をもっていたなんて。杏奈の想像するジョーカーは、もっと年上で、もっと陰気で、もっと恐ろしい顔をした人物のはずだった。

杏奈は少年に向き合う位置に座った。外の喧騒が嘘のように、この部屋は静かだった。まるで、この空間だけが世界から切り離されているような錯覚を覚える。

「どうして……」

つぶやきが漏れたが、自分でもなんと続けるつもりなのかわからず、言葉を濁した。

聞きたいことは山ほどある。どうして、仮面をはずしているの。どうして、ここに来たの。どうして、一人きりなの。なぜ、あなたみたいな人がジョーカーになったの。だが、結局何も言葉にならなかった。

杏奈はしばらく黙ったままジョーカーを見つめていた。少年の横顔を見ていると、胸が痛くなった。あまりにも、寂しげだったから。

長い静寂の後で、杏奈は小声で尋ねた。

「ジョーカー……泣いてるの？」

答えはなかった。少年は無言で、杏奈に横顔を向けていた。

涙は見えない。だが、杏奈にはやはり彼が泣いているように見えた。涙を流さず、声もたてずに。



やがて、ジョーカーは静かに答えた。
「レオが、死んでしまったんだよ」
「……知ってる」
「かわいそうに……誰からも理解されず……誰のことも理解しないまま逝ってしまった」
ジョーカーは杏奈に視線を戻した。ようやく、その切れ長の瞳に涙がにじんだ。
少年は悔しげにうなだれた。長い前髪が表情を隠した。
杏奈は戸惑った。レオは杏奈にとって、無気味で得体のしれない相手でしかなかった。仮面党内にそれほどの団結があるようにも思えなかったし、まさか部下の死にジョーカーが泣くなんて思いもしなかった。
「レオは……邪悪だったよ」
杏奈はつぶやいた。
「わたしはあいつを仲間だなんて思ったことはない。嫌いだった。わたしの目の前でカス校の生徒会長を焼き殺したとき、あいつは笑ってた。面白くてたまらないみたいな声てね……あんな奴のために泣いてやるの？」
「レオは、僕に力を貸してくれたんだ」
少年は顔を上げなかった。声がかすかに震えていた。
「彼が邪悪だったって……わかってるよ。そんなことはわかってる。彼は君の言う通り、残酷

だった。凶悪だった」
「だったら……」
「だけど、彼は僕を呼び出して助けを求めたんだ。あの陰気な、寂しい病院で十年間も過ごして……最後に僕に助けを求めてきたんだ。彼の病室を初めて訪れたとき、僕は鳥肌が立った。あんな怖い……冷たい……気味の悪い場所は他に知らない。彼は壁一面に詩を書きつけて、自分の血で床を汚して、ぼんやり座りこんでた。彼は……狂ってたわけじゃない。父親が彼を壊した。それだけだ」
　杏奈は眉をひそめてジョーカーを見つめた。
　この少年は優しすぎる。嘲笑的なジョーカーの仮面とは裏腹に。
　同情や共感は美しい感情だけれど、ときに本質を見誤らせてしまう。彼は、須藤竜也の監禁生活に同情するあまり、錯誤に陥っている。レオが監禁されたのは、彼自身の罪のためなのだ。誰のせいでもない。
「僕が彼を病院から連れ出したりしなければ、彼は死なずに済んだんだろうか。彼を仮面党に誘ったりしなければ……幹部の地位を与えたりしなければ……彼を殺したのは……僕か……」
「ジョーカー」
「レオは……父さんに協力してくれた。イン・ラケチを完成させるために、力を尽くしてくれた。そんな彼を、僕は……救うどころか、逆に……」

「落ち着いてよ」

どうしてよいのかわからなかった。トーラスかアクエリアスが来てくれればよいのに。他人を慰めたり力づけたりするのは、杏奈の柄ではない。

「父さんって、あなたの？　イン・ラケチを書いたのは、あなたのお父さん？」

「そう。父さんはセブンスの先生だったんだ。古代史に詳しくて、珠間瑠市とマヤ文明の関連について研究してた。当時、レオはセブンスの生徒で……父さんに協力して、イン・ラケチを完成させたんだ」

どこかで聞いたような話だと考えて、すぐに思い当たった。

七姉妹学園に伝わる「七不思議」の一つだ。昔、世界史の教師が超古代史の研究にのめりこんで、珠間瑠市は文明発祥の地だとかいう怪しげな理論を説いた。生徒に協力させたり、授業中にまで珍説を繰り広げたりするので、校長から厳重に注意されていた。あるとき、その教師は時計台の事故で死んだ。以来、七姉妹学園の時計台には幽霊が出る。くたびれた表情で、狂った理論を口にする世界史教師の霊が――。

もちろん杏奈はそんな幽霊を見たことはないし、噂も適当に聞き流していた。ひょっとして、それがジョーカーの父親なのだろうか？

「レオは優れたチャネラーだった。宇宙からの声を聞くことができた。イン・ラケチは、父さんとレオの二人の力で完成したんだよ。僕は彼らに代わってイン・ラケチを成就させるつもり

だった。だから父さんの言いつけ通り、仮面をかぶって、ジョーカーになって……みんなの夢をかなえてあげたかった。人類がイデアリアンに進化すれば、もう何も悲しいことはなくなる。みんな幸せになる。だから僕は……でも、終わりだ。レオが死んでしまった。もう誰も星の声を聞き取ることはできない。ああ、そうだ。父さんに報告しないと。この先、どうすればいいのか……」

少年はふらふら立ち上がろうとした。杏奈は彼の腕をつかんで引き止めた。

「落ち着いてよ、ジョーカー。父さんに報告って何。あなたのお父さんは死んでる」

「まさか」

少年は微笑んだが、瞳の色は暗かった。さっきまでのような優しい微笑ではない。せわしなく瞬く瞳は、極度の混乱を示していた。

「なんてことを言うんだ。父さんは死んでなんかいないよ。僕はずっと父さんと暮らしてるもの」

「セブンスの世界史教師の噂、聞いたことがあるよ。時計台の事故で死んだって」

「馬鹿な」

少年は杏奈の腕を振りほどき、子供のように激しく首を振った。

「嘘を言うな。父さんは死んでない」

「……だけど、時計台で……」

「嘘を言うな！　違う、それは父さんじゃない」
ジョーカーは叫び、震え出した。
「死んでない。父さんは死んでなんかいない。父さんは僕に助言を与えてくれる。僕が何をすればいいか、全部教えてくれるんだ！」
「ジョーカー……」
「嘘を言うな!!」
少年は叫び、崩れるようにソファに座り直して、自分の耳を両手で押さえた。それは、悪意に満ちた世界のすべてから、自分を守ろうとする姿勢だった。
身体が小刻みに震えているのがわかる。何も聞きたくない。何にも侵されたくない。かたくなな、拒絶のポーズ。彼の怯えが、ひりひりと伝わってくる。
——仮面があれば。
杏奈はそう願った。ここに、ジョーカーの仮面があれば。この少年の素顔を隠し、冷酷で嘲笑的なジョーカーの仮面をかぶせてしまうことができれば。こんな悲痛な姿を見なくても済むのに。
仮面は人格を支配する。この少年は怯えている。混乱する記憶に追い詰められ、自分を守ることに必死になっている。彼には、ジョーカーの仮面が必要なのだ。
杏奈はぎこちなく腕を持ち上げてみた。少年を抱きしめ、大丈夫だと言い聞かせてやりたか

った。だが、極力他人とかかわることを避けてきた杏奈には、やはりできなかった。
結局そのまま腕を下ろし、代わりに、ぎこちなく言ってみた。
「……その制服、春日山高校でしょ」
杏奈はしばらく待った。
やがて、少年はおそるおそる、耳をふさいでいた両手を下ろした。彼を閉ざしていた氷が少し溶けたのがわかって、杏奈はほっとした。
「何年生？」
「……三年」
「わたしと同じだ。わたしはもう学校やめたけど」
杏奈は、ジョーカーを呼び出したときのことを思い出した。
杏奈が名乗る前から、彼は杏奈のことを知っている風だった。あのときは、何もかも見透かされているみたいで無気味に思ったものだが、同じ市内の高校生なら、ひょっとして何か接点があったのかもしれない。
「わたしたち、前に会ったことある？」
少年はかぶりを振った。
「ないよ。君は僕のことを知らないと思う。僕は君を知ってたけど」
「なぜ？」

「君は有名人だった」

徐々に、彼は落ち着きを取り戻していた。大きく息を吸い込み、安心したように微笑んだ。

「君を初めて見たのは高校一年のとき。僕はその当時、別の市に住んでいたんだけど。たまたま珠間瑠市に用事があって、セブンスのそばを通りかかったことがあった。そして、校庭で走ってる君を見かけた。陸上部の練習中だったんだと思う。何度もスタートをやり直していた」

杏奈は肩をすくめた。そのころは、ほとんど毎日、陸上の練習に明け暮れていたはずだ。金網の外で見物しているヤツのことなど、いちいち気にかけているわけがない。

「君は綺麗だった。目を奪われた」

「からかわないでよ」

「からかってない。本当に美しかったんだ。他にも陸上部員はたくさんいたはずだけど、まったく目に入らなかった。君は特別だったよ。誰よりも走ることを楽しんでた」

胸の奥がキリキリと痛んだ。

放課後の校庭。何度も繰り返したクラウチングスタート。それは、永遠に失われた幸福の記憶だ。再現するのはつらすぎる。

やめさせたい。こんな話。だが、杏奈は何も言わずに聞いていた。

「時間がたつのも忘れるくらい、君に見とれてしまった。それて、学校から出てきたセブンスの生徒をつかまえて、聞いてみたんだ。あれは誰かって。陸上部の[illegible]栄杏奈。そう聞いた。病

校女子の新記録を出したりしてる、すごい選手だって」
「……」
「不思議なことだけど、君の顔はほとんど覚えてなかったんだ。走るフォームにばかり目がいってたらしくてね」
「顔はお粗末だから。悪かったわね」
「そんな意味じゃない。走る姿の印象が強すぎて、他がかすんでしまっただけだよ。その後、君が交通事故に遭ったって聞いた。足を怪我して、選手をやめてしまったって。残念だった。会ったこともない人なのにね……まるで友人が不幸に遭ったみたいに落ちこんだ」
「再会の感想は？」
　杏奈は少年の顔に視線を戻し、皮肉に笑った。
「失望した？　かつての陸上部のスターは、ごらんの通り」
「……正直言うとね、走りたくないと言われたときは、少しむっとした。誰よりも恵まれた資質をもってるのに、なぜそれを生かさないんだろうと思って。だけど——話をするうちにわかった。君の炎は消えていない」
　杏奈の微笑が強ばった。
　忘れてはいけない。優しげな顔はしていても、彼はジョーカーだ。心を見透かし、その闇に鋭く斬りこんでくる。

「もう一度尋ねるよ。吉栄杏奈、君の望みは？」
「――ない。そう答えたはずだけど」
「君はジョーカーを呼び出した。なんのために？」
「暇つぶし。ゾディアックで噂を聞いて、ちょっと試してみただけ。まさか、本当に現われると思わなかったから」
「違う。君は、ジョーカーに望みをかなえてもらいたがっていた。表面上の意識が否定しても、君の無意識は走ることを望んでる。スコルピオンは、秘めた情熱の象徴だ」
「やめてよ」
杏奈は険しい目で少年を睨んだ。
「勝手な解釈で、ひとをわかったような気にならないで。わたしのことはわたし自身が一番よくわかってる」
「どうしても認めないの？　望みを口にしない者は、本来、仮面党に入る資格はない。君だけが例外だった」
「なぜ？」
それは、最初から杏奈の心に引っかかっている疑問だった。
夢をもたない者はジョーカーに従う資格はない。クイーン・アクエリアスもそう指摘していた。なぜ杏奈だけが例外なのか？

「なぜだろう……よくわからない」
少年は苦笑した。
「ただ、君を放っておけなかったんだ。もう一度、夢を取り戻してほしかった」
「――ばかばかしい」
「それ、君の口癖だね」
杏奈は顔をしかめた。少年はおだやかに微笑んでいる。『ばかばかしい』、『別に』、『あんたに関係ない』
わからなかった。なぜこんな優しい笑い方をする少年が、仮面党を組織し、夢見る人々を影人間にしてしまうのか。すべての人の夢をかなえたいと言い、夢見る人のエナジーを奪い取るという。どちらが、彼の本当の顔なのか。
さっき彼は言った。「父さんの言いつけ通り」。父親が、彼に仮面党を組織させたのだろうか。
だが、その人はもう何年も前に死んでいるはずだ。
変だ。何かがずれている。この違和感は、前にも感じたことがあった。キング・レオが顔を焼かれたと聞いたとき。
人々の記憶が少しずつ食い違い、結果的にまったく違う絵を描いているように思える。何が真実なのだろう……。
「イン・ラケチを世に広めなきゃ」
ジョーカーがつぶやいたので、杏奈ははっとした。

「レオが死んでしまった以上、もうぐずぐずしてられない。これ以上、周防たちに邪魔される前に——イン・ラケチを出版しないと」

「待って、ジョーカー」

少年は立ち上がり、出て行こうとしていたが、杏奈は素早く引き止めた。

「周防たちは、あなたとどういう関係があるの？　レオは天野を魔女と呼んだし、トーラスはリサ・シルバーマンに近づいた。なぜなの？」

「君が知る必要はない」

ジョーカーは無表情に答えた。優しい微笑は拭(ぬぐ)い去ったように消えていた。繊細(せんさい)な素顔を、見えない仮面で覆い隠してしまったかのようだった。

杏奈は彼を見上げて尋ねた。

「十年前、何があったの？」

そこに、たぶんすべての鍵(かぎ)がある。天野が異常に火を怖がる理由も、優しい少年がジョーカーに変じた理由も。いや、現在の珠閒瑠市に起きている異変(いへん)のすべて。噂が現実化するというばかばかしい状況すら、その十年前の出来事に起因(きいん)しているに違いない。

ジョーカーは杏奈を見下ろした。別人のようにひややかな、怒りをこめたまなざしだった。

「——周防が、殺した」

「……え？」

「僕が守ろうと決めた人を、周防が殺した。すべてはアラヤ神社から始まった。僕は――奴を許さない」

少年は部屋を出て行った。

杏奈は、無口な元クラスメートの顔を思い出した。

周防達哉。滅多に表情を変えない、何を考えているのかよくわからないやつと言われていた。そんなところに、自分と似た性格を感じ取って、杏奈は彼に好意を抱いていた。といっても、他のクラスメートに比べればちょっとマシ、という程度ではあったが。

彼が殺した？　十年前といえば、まだ小学生だ。ますますわからなくなった。

ただ、はっきりしていることが一つあった。ジョーカーは嘘をついていない。彼の怒りと悲しみは演技ではなかった。

あれほどに暗い瞳を見たのは初めてだった。

4

――本日は三人のゲストの方をお招きして、緊急出版されることになった『イン・ラケチ』についておうかがいします。出版元であるキスメット出版のA編集長、古代文明に造詣の深いオカルト研究家のG先生、国際軍事評論家のO先生のお三方です。先生方、よろしくお願いいたします。まず、この耳慣れないタイトルなんですが……。

A「マヤ語ですね。四世紀から九世紀にかけて隆盛を誇ったといわれる、マヤ帝国で使われていた言葉です。『私はもう一人のあなた』を意味します」

――著者はどんな方なんですか？

A「すでに亡くなっています。今回の出版は、著者のゆかりの方が我が社に原稿を持ちこんで来られまして、一読した編集部がその重大さに驚き、急遽決めたものなんです。著者および原稿を持ちこんだ方のお名前を明らかにすることはできません」

――で、その内容なんですが。G先生、解説していただけますか。

G「これはもう、読んでいただくのが一番早いでしょう。徹底した取材と精緻な理論によって

組み立てられた、二十世紀最後の驚愕の書です。私の長年の研究とも、ぴったり合致しております。著者はすでに亡くなっているということですが、非常に残念です。この著者は、史上最も優れた歴史理論家の一人といえます」

——具体的には……。

G「それをお話しするには、まずマヤ文明の世界観から始めなければなりません。マヤの神話はポポル・ヴフと呼ばれておりまして、簡単に言うと、双子の神フンアフプーとイシュバランケーが悪を討ち滅ぼして太陽と月になる、という物語になっています。シバルバーと呼ばれる闇の地下帝国がありまして、双子神はそこで大活躍をするのです」

——はあ……それで……？

G「シバルバーという言葉は、『イン・ラケチ』にも再々出てきます。著者によれば、珠間瑠市の地下に、このシバルバーが実在するというんですね」

——驚きですね。

G「著者は、シバルバーを巨大な宇宙船と推定しているんです。ここで少し話が飛びますが、日本語で〈昴〉と言われる一群の星があります。プレヤデス星団ですね。この中のマイヤという名の恒星から、はるかな古代、地球にやって来た連中がいる。マヤ語でいうところのオシュラフンティク族、つまり〈十三柱の光の神〉ですね。彼らは、同じ星系に住むボロンティック族、すなわち〈九柱の夜の神〉との戦争に敗れまして、はるかな地球にまで逃げてきたわけで

す」

——はあ……。

G「オシュラフンティク族が降り立った土地が、現在の珠閒瑠市です。珠閒瑠市の名は、かつての彼らの故郷である〈昴〉に音を借りて名づけられたものなのです。さて、オシュラフンティク族は温和な種族で、当時まだ類人猿の段階だった人類に霊的遺伝子改造を行ったり、文明を授けたりして、進化を促します。しかし、彼らを追って好戦的なボロンティック族が地球を襲います。彼らが乗ってきた宇宙船がシバルバーというわけです」

——……。

G「このマイヤ人二種族の戦いは全太陽系を巻き込み、そのときの衝撃で惑星が一つ吹き飛びました。この破片が、現在の小惑星帯、いわゆるアステロイド・ベルトです。当然、地球も壊滅的な打撃を受けまして、世界はいったん滅びます。力を使い果たした両種族は、それぞれ長い眠りにつくことになります。周到なボロンティック族は、眠りにつく直前、いつか自分たちが復活する日の手だてとして、五つの水晶髑髏を用意します。この髑髏に心的エネルギー、すなわちイデアル・エナジーが満ちたとき、地下に潜ったシバルバーが再び浮上する。ボロンティック族もよみがえるという段取りです。荒唐無稽と思われるかもしれませんが、現に、水晶髑髏は一九二七年に南米で発見されているんです。現代の最先端のテクノロジーでも精製不可能といわれる、怖いほど精巧な細工品ですよ。これ一つを取っても、はるかな古代に、人類の

文明をはるかに超える何者かの介入があったことは確かでしょう」

――それで、イン・ラケチの内容は……。

G「先ほど、人類の進化はマイヤ人の操作によるものだったと申しましたが、同じことがもう一度起こるんです。シバルバーが浮上し、眠れるマイヤ人が目覚めたとき、人類は覚醒し、超人類すなわちイデアリアンへと進化する。これが、イン・ラケチの骨子です」

A「進化するだけなら喜ばしいんですが（笑）、そうではないんですね」

G「そうです。人類が進化するためには、水晶髑髏の力だけでは不十分なんです。あらゆる生物は、絶滅の危機に瀕したときに進化を遂げる。これが生物界の掟です。そして、ボロンティック族は破壊を好む種族なのです。彼らは、人類を進化させるために世界を滅ぼそうとするはずです。そこで注目されるのが、四つの星座が天に十字架を描く天体現象――すなわちグランドクロスなのです。シバルバーが生じたとき、地球を大災厄が襲い、シバルバーが浮上する。シバルバーに乗ることのできた一握りの人類だけがイデアリアンへと進化し、大多数の人類は滅亡する――これが、イン・ラケチが予告する恐るべき未来図なのです」

――しかし、現代の天文学では、グランドクロスは地球に影響を及ぼさないと言われていますが……。

G「天文物理学的にはその通りでしょう。しかし、占星術的な影響は別です。その瞬間何が起こるか、ちっぽけな人類の知識では測り得ないんです。ここで思い出していただきたいのが、

アドルフ・ヒトラー。彼が占星術に傾倒していたことは有名ですね。そもそも、彼が第二次大戦を引き起こしたのは、人類を滅亡の淵に立たせ、超人類への進化を促すためだったと言われています。その彼が占星術に並々ならぬ興味を示したということは、すなわち、星の運行が地上にもたらす影響を知り抜いていたからに他ならず……」

O「そこで、ザ・ラスト・バタリオンの存在が問題になってくるわけですよ」

――国際軍事評論家のO先生、ラスト・バタリオンの解説をお願いします。この言葉もイン・ラケチに出てくるんですね？

O「そのようです。が、もともとこれは〈最後の大隊〉を意味する英語でね。第二次大戦終結直後から囁かれている有名な噂ですよ」

――それは、どういう……。

O「この私の著書（本を掲げる）を読んでいただければ一目瞭然なんですがね、つまり、一九四五年四月三十日、ヒトラーは愛人エバ・ブラウンとともに自殺したと言われてるが、これはまったく嘘。彼は生き延び、今もナチス再興を密かに画策している。そのために、彼はザ・ラスト・バタリオンという部隊を用意していたんです。第三帝国の軍事力を結集した、まさに最後の大隊。これを投入し、東西冷戦に引き裂かれた世界を一挙に手に入れようというのがヒトラーの計画なんです」

――しかし、冷戦はとっくに終結しているわけで……。

O「そんなことは表向きの話でしょう。世界の裏側で何が進行しているか、あなた知ってますか。私が信頼すべき筋から得た情報によると、ヒトラー存命の痕跡は世界中で見つかってるんですよ。大戦中に、ドイツ海軍長官デーニッツは『Uボート艦隊は世界のある場所にこの世の天国と同時に難攻不落の砦を築いた』と宣言しています。この『ある場所』がどこなのか、各国の研究家が血眼で捜したが、見つからなかった。パタゴニアであるとか、南極大陸であるとか、さまざまに憶測されていますが、決定打がない。これが実は珠閒瑠市ではないかと、このイン・ラケチという本は示唆しているわけです」

G「イン・ラケチの著者、仮にX氏としておきましょうか、X氏はナチスの謀略によって殺害された疑いがあるんです。彼はあまりに危険な真実を探り当ててしまったということでしょう。今この瞬間にも、ヒトラーの軍隊が珠閒瑠市の地下に潜行して、第三帝国再興の機会をうかがっているかもしれないんです」

——もしも本当なら大変なことですね。先生方、ありがとうございました。では、コマーシャルの後は、テレフォンショッピングのコーナーです……。

＊

車は、湾岸の道を快調に走っていた。

港南区は、警察署や〈空の科学館〉が爆破され、被害の大きかった地域だが、道路は早くも

復旧されている。破壊された建物はまだ無残な姿をさらしているが、警察組織は仮庁舎に移行されており、大きな混乱はない。珠間瑠市を震撼させた連続テロも、早くも過去の事件になりつつあった。人々の営みは、かくも逞しい。

杏奈は助手席に座って、窓の外を眺めている。ハンドルを握っているのはプリンス・トーラスこと佐々木銀次だ。

晴れた日の湾岸ドライブ。助手席に若い女。黄色い派手なシャツを着た銀次は、楽しそうに口笛を吹いたが、杏奈がじろっと睨むとやめた。

「すまない。不謹慎だったな。墓参りだというのに」

「別に」

不謹慎だからではない。耳障りだから睨んだだけだ。だが杏奈は説明せずに、けだるく右手の海を眺めていた。

海面が午後の陽射しを反射して、きらきら光っている。大都市沿いの汚れた海だが、こうして遠くから眺めれば、それなりに綺麗だ。

「俺は、レオのことは苦手だったが……」

銀次はしんみりと言った。

「死んだと思うと悲しいな。一応、仲間だったたし。仮面党四天王筆頭だったしな……かわいそうな奴だった……」

レオの暴走テロによってコンサートを滅茶苦茶にされた恨みは、もう忘れているらしい。単純な男だ。
「MUSESって、結局どうするの？」
「どうしようもない。終わりだよ。表向きは、コンサート会場のテロのショックで引退ってことになってる。デビュー・コンサートで即引退というのが、かえって話題になってってね。MUSESのポスターには、早くもプレミアがついてる。十年後には『お宝』アイドルさ」
「……なぜ、リサ・シルバーマンをメンバーに引き入れたの？」
「あれは、ジョーカー様のご希望だ」
予想通りの答えだった。
杏奈はトーラスのほうを見たが、トーラスはまっすぐ前を向いてハンドルを握っており、杏奈と目を合わせようとはしなかった。
「なぜ？」
「さー。金髪が好みだったんじゃないのかな」
冗談めかしておいて、すぐ反省したらしい。真面目な声になって続けた。
「ジョーカー様は、リサ・シルバーマンを知ってるらしいんだ。個人的に」
「……」
「知ってるどころじゃない、すさまじく憎んでいる。過去に何かあったようだが、詳しいこと

はわからない。とにかくあの方は、リサに復讐するつもりだったんだな。リサを利用し、彼女の力によってマイヤの託宣を世に広める。すべてを知れば、リサは苦しむ。そういう段取りだった。ま、実現する前にMUSESが崩壊しちまったが」
杏奈は少年の暗い瞳を思い出した。怒りと悲しみ、そして絶望に凍りついた瞳。
リサ・シルバーマンは、過去にジョーカーとどんな因縁があったのだろう。どんな糸が彼らを結びつけているのか。十年前の夏、アラヤ神社で。ジョーカーは、どんな傷を負ったというのか……。
杏奈は窓の外に視線を戻した。
余計なことを考えすぎだ。十年前に何があろうと、杏奈には関係のないことだ。最近なんとなく調子がおかしい。黛ゆきのの出現以来、お節介がうつりつつあるのではないだろうか。これまで、杏奈はいつも無関心無気力の平安の中にいたはずなのに。
他人の過去を探るのはよそう。自分はただ、レイディ・スコルピオンとして求められていることをすればいい……。
「イン・ラケチの番組、見た？」
杏奈は目を窓の外に向けたまま尋ねた。
「テレビをつければそれ関連の番組ばかりだ。いくつか見たよ」
「知ってた？」

「何を？」
「イン・ラケチがあんな内容だってこと」
「まあね。ジョーカー様から聞いてはいた。ほとんど理解できなかったが」
「プレヤデス星団だとかヒトラーだとか……正気？」
「正気なわけがない。いわゆるトンデモ本ってやつだよ。全部妄想だ。だが、この街では噂も妄想も現実化する。最悪の場合、ラスト・バタリオンも実体化するぜ」
杏奈はため息をついた。
「面倒くさい」
「だから、時間勝負さ。噂が追いついてくるより早く、計画を進めないと。レオが欠けたのは痛いな……」
恵比寿海岸に着いた。銀次は愛車を路肩に寄せて止めた。
海水浴のシーズンにはにぎわうのだが、今は季節はずれだ。砂浜に人影は見当たらなかった。
杏奈と銀次は肩を並べて砂浜へ下りた。銀次は真っ赤な薔薇の花束を抱えている。ひょっとすると、遠目には睦まじい恋人に見えるかもしれない。だが、杏奈の心は白けていた。
レオは、一連の爆破テロの最後に〈空の科学館〉を選んだ。模型や映像などで航空機の仕組みや歴史を展示し、子供たちの学習の場として人気の高い場所だった。杏奈も、小学生のときに校外学習で出かけた記憶がある。

レオが火を放ったとき、科学館には大勢の子供がいた。大惨事を免れたのは、周防達哉らの活躍のためだ。科学館に駆けつけた彼らは子供たちを避難させ、レオを屋上へと追いつめた。あとは、チカリンからの情報通りだった。屋上にあった模型の飛行船が空に舞い上がった。小学生たちの噂が、ありえぬはずのことを実現させたのだ。周防ら一行とキング・レオは飛行船内で戦い、敗れたレオは命を落とした。

模型の飛行船は長く飛び続けることはできず、海に落下した。周防たちは子供らと共に脱出したが、レオの遺体は飛行船もろとも散った。彼は、この海のどこかで眠っているはずである。

杏奈は適当なところで足を止めた。銀次は「アデュー」とつぶやいて、片腕に抱えていた花束を恭しく海に浮かべた。赤い花束は、波間に漂いながら、沖へと運ばれてゆく。

「なんで薔薇なの。しかも赤いの」

「悪いか」

「悪趣味。死者に捧げる花じゃない」

「俺は薔薇が好きなんだ」

杏奈は煙草をくわえて火をつけた。風が強い。髪がなびき、煙が流れた。しばらく、二人で並んで、漂う花束を見つめていた。

やがて花束は波間に消えた。煙草を捨てて、踵を返そうとしたときだった。

陽射しが急に翳った。杏奈は足を止め、顔を上げた。

空に、無数の花が咲いていた。

パラシュートだ。はるか上空を飛ぶ飛行機から、次々にパラシュートが降下してくる。適当な高度まで下りると、それがパッと大きく広がって、空に咲いた花のように見えるのだった。

杏奈は目を細めた。信じ難い光景に、一瞬、幻惑された。

「あれは……！」

銀次が叫んだ。顔が引きつっている。

「なんだろう。自衛隊の演習……？」

「馬鹿、よく見ろ。飛行機にマークがついてる」

「目、いいね」

「ハーケンクロイツ。鈎十字だ」

杏奈は眉を寄せた。

何機かの飛行機がぐっと高度を下げ、家並みをかすめそうな超低空飛行をした。不吉な機体を見せつけるかのように。

杏奈にもはっきり見てとれた。尾翼についているマークは、ナチス・ドイツの象徴。ハーケンクロイツだった。

「ラスト・バタリオン」

銀次は喘ぐように言った。

「現実化しやがった……いつかは来ると思ってたが……早すぎる」
「テレビでさんざん流したから……」
騒動の発端は、ジョーカーが出版社に持ち込んだイン・ラケチだ。そこに記されていたからこそ、ヒトラー生存説やらラスト・バタリオンやらの妄想が話題になったのだ。
つまり、ナチスをよみがえらせてしまったのは、ジョーカーのミスだということになる。イン・ラケチ成就を急ぐあまり、とんでもない化け物を召喚してしまったのだ。
「ということは……ヒトラーも実体化してる……？」
「してるだろうさ、そりゃ。どえらいことになったな。行こう、とにかくジョーカー様に指示を仰がなければ」
銀次は車に向けて走り出した。
杏奈は、舞い降りてくるパラシュート部隊を見て身震いし、銀次に続いた。

＊

降下猟兵。第二次世界大戦時、連合国から「緑の悪魔」と呼ばれ、恐れられたドイツ空挺部隊である。
迷彩服と鉄帽を着用し、突撃自動ライフルＦＧ42を構えた兵士たちが、珠間瑠市を闊歩している。威嚇に従わない民間人は即射殺。当初、ナチス軍の侵攻を「冗談」、「テレビの企画」

としか受け止められなかった市民の何人かが犠牲になった。
空を制した後は、戦車が出現した。ドイツ陸軍が誇るⅥ号戦車B型ティーガーIIが隊列を組んで青葉公園通りを進撃し、狂喜して写真撮影していたミリタリーマニアが殺されるという悲劇も起きた。
時空を超えてよみがえった鈎十字の恐怖が、珠閒瑠市を踏みにじろうとしていた。あまりに非現実的な事態に、日本政府がまともに対応できるはずもない。やっと自衛隊が「国籍不明の某勢力」を掃討すべく出動したときには、すでに手遅れだった。珠閒瑠市は完全にナチスの支配下におかれていた。
その後数日にわたって、自衛隊はナチス軍と戦火を交えたが、まったく歯が立たなかった。ラスト・バタリオンの戦車や兵器は、第二次大戦当時の古色蒼然たるものだったが、彼らの武器はそれだけではなかった。
四足歩行をする箱型のロボット。子供ほどの背丈の、人型ロボット。生命をもたぬ鋼鉄の兵士が、ナチス軍の主戦力だった。それらを率いるのは、ナチス軍が「聖槍騎士団」と呼ぶ、銀色の甲冑に身を包んだ十三体の戦士。もちろんいずれも、第二次大戦当時には存在しなかったものだ。いや、現在の科学力すらはるかに凌駕した、驚異のテクノロジーだった。
加えて、珠閒瑠市民のすべてを人質に取られた状態である。自衛隊も、あるいは在日米軍も、迂闊に手出しできなかった。

少なからぬ犠牲を払った後、ついに政府は方針を変更し、自衛隊を撤退させた。ナチス軍は珠間瑠市から出てくる気配はなく、少なくとも当面のところ、他の地域に被害が及ぶ心配はなかった。

珠間瑠市を見捨てさえすれば、日本は安全なのだ。そんな判断が一般に広まると、「ナチスを殲滅せよ」という強硬論は一気に下火になった。珠間瑠市は事実上、日本から切り離されて孤立した。

珠間瑠市の人々は絶望にかられ、落胆した。市からの逃走を試みた者も多かったが、一人残らず射殺され、無謀な脱走を企てる者はいなくなった。

諦めが市を覆った。市民たちはおとなしくなった。

人々は——このナンセンスな現実に適応したのだ。疑問を抱くよりも、家に閉じこもって震えているほうが楽だから。何が起きているのかを考えるより、「やっぱりイン・ラケチは正しかったんだ」と自分を納得させるほうが、簡単だから。抵抗さえしなければ、ナチス軍に殺されることはないのだ。

珠間瑠市民は、よく躾られた子犬のように従順だった。

ゾディアック三階に、ジョーカーと仮面党幹部が顔を揃えた。

普段なら幹部たちに任せておくはずだが、さすがに非常事態だ。ジョーカー自らが幹部三人

を召集したのである。杏奈に見せた素顔はさらさず、例の仮面をつけていた。
「青葉区の公園通りは戦車隊によって封鎖されました。どこから湧いて出るのか、車両も兵士も続々と増えてます。連中はなぜか、珠閒瑠市郊外にある蝸牛山を目指しているようです。蝸牛山といったら、中腹に古びた寺があるだけで、重要な場所とは思えないんですが……」
プリンス・トーラスが、メモを見ながら報告している。珠閒瑠市上空に初めてナチス機が現われて以来、彼はその広い人脈を駆使して情報収集に当たっている。
「次はきっと、恵比寿海岸沖にUボートね」
頬杖をついたクイーン・アクエリアスが、冗談めかした口調でつぶやく。
「誰か戦争映画を撮らないかしら。迫真の映像を撮るチャンスよ。私、金髪美形のドイツ将校と恋に落ちて日本を売り飛ばす役で出演してみたい」
トーラスは「笑い事じゃない。近いうちに、本当にUボートが現われるはずだ」と真面目に応じた。
ジョーカーは無言だった。仮面に覆われた美しい顔にいったいどんな表情を浮かべているのか、杏奈には想像がつかなかった。
「混乱の原因はナチスだけじゃありません、仮面党員の一部が暴走している模様です。無抵抗の市民に暴力を加えるなどして、揉め事を起こしています。どうやら、例の連続テロの際に、仮面党員の仕業だという噂が流れて、それに影響されているようですね」

「レオの置き土産ってわけ」
クイーン・アクエリアスは皮肉に笑って髪をかき上げた。
「……党員たちに、伝えろ」
ジョーカーは口を開いた。動揺している気配は感じられない。
「破壊行為をすぐにやめるように。戦う相手は市民ではない、ラスト・バタリオンだ」
「は？」
トーラスは目を瞬き、念を押すように尋ねた。
「ラスト・バタリオンと戦えとおっしゃるのですか？」
「そうだ」
「仮面党員にそこまでさせる必要がありますか。彼らも元をただせば一般人です。訓練を受けているわけでもないし、ナチスと戦えなんて無茶……」
「党の方針を決めるのは私だ。君ではない」
自分の先走った行動によってナチスを実体化させてしまったことを、悔やんでいるのだろうか。ジョーカーの声は険しかった。トーラスは「失礼しました」とおとなしく引き下がった。
「他に、市内の動きは？」
「宗教団体がいくつか活発に動いています。人類滅亡への恐怖を煽って、信者を増やすつもりですね。街頭演説が頻繁に行なわれています。ほとんどは取るに足りませんが、ちょっと気に

かかったものが一件」
「なんだ」
「宗教関係ではないらしいんですが、昨日、錯乱したような女性が平坂駅前で支離滅裂なことを喚き散らし、保護されました。七姉妹学園の教師だそうです」
「教師？」
杏奈が聞き返した。トーラスは「うん、日本史教師だそうだ」と答えて、またジョーカーに向き直った。
「どうやらこの人物は、レオのことを知っているらしいんです。須藤君はどうしてしまったんだろうと泣き伏していたそうです。他にも、ナウイ・オリンの時代が終わるとか、マイヤの託宣が成就するとか、意味深なことを口走っていたというので、気にかかるんですが……」
「イデアルだ」
杏奈はつぶやいた。ジョーカーが「それは？」と尋ねた。
「セブンスの教師で、電波入ってる奴っていったら、一人しかいない。日本史の岡村。そういえば、イデアル・エナジーがどうのこうのってよく言ってたけど……それで、イデアルってあだ名がついてた」
「岡村真夜？」
クイーン・アクエリアスが面白そうに身を乗り出してきた。

女優と高校教師の間にどんな接点があったのか、杏奈は不審に思った。
「インは、当時セブンスの生徒だった須藤竜也――つまりレオのチャネリングにインスパイアされて、オカルト好きの妄想教師が書き上げたもの。そのとき助手として彼を補佐したのが、新米教師だった岡村真夜よ」
「クイーン、なんでそんなことに詳しいんだ」
トーラスが不思議そうに尋ねた。アクエリアスは美しい顔を歪めた。
「どうでもいいでしょう。放っておきなさいよ、そんなつまらない女のことなんて。ただの妄想狂なんだから」
アクエリアスは斬り捨てるように笑ったが、ジョーカーは何か気にかかるようだった。
「――保護された、と言ったな」
「はい。気になったので、彼女の足取りを追ってみました。いったん警察の厄介になったりしたようですが、最終的には、探偵事務所に引き取られたようです」
「探偵事務所？」
「平坂区のカメヤ横丁に、葛葉探偵事務所というのがあるんです。ちっぽけな、冴えない興信

所ですが。彼女はそこにいます。この探偵事務所、周防たちがたびたび出入りしてるらしいんです。で、調べてみたところ」

トーラスは、スクープをつかんだ記者のように秘密めかした顔をした。

「葛葉探偵事務所は、珠閒瑠市で噂が現実化することをいち早く察知して、周防たちに協力的な噂を流してきたようです。どうやら、所員の一人が御影町エルミン学園の出身で、黛ゆきのの同級生だったらしく」

杏奈はびくっとした。黛ゆきの。どうも、その名前を聞くとおだやかでいられない。

カメヤ横丁でゆきのと会ったことを思い出した。確か、「事務所で周防たちと合流する」とか言っていた。たぶん、その事務所というのが、葛葉のことだったのだろう。

「その繋がりで、周防たちに協力してるらしいんです。岡村真夜が葛葉に身を寄せているのも、周防たちに関連している可能性が大きいと思います」

「真夜……イデアル……そうか。マイヤの乙女だ」

ジョーカーは、何か思い当たったようだった。

「星が動きを止めるとき　マイヤの乙女の鼓動も止まる。『マイヤの託宣』の一節だ。その女、観察しておく必要があるな。イン・ラケチの完成にかかわった、マヤという名の女。無関係とは思えない」

「ジョーカー」

アクエリアスが、身体（からだ）の向きを変えて、ジョーカーのほうを向いた。短いスカートで、大胆（だいたん）に組んだ足が挑発的（ちょうはつてき）だ。
「本気で言ってるの？　たかが高校教師が、マイヤの乙女ですって？　笑い話だわ。そんなくだらない女に、イン・ラケチの重要なポイントが託されるはずないでしょう。放っておきなさいよ、誇大妄想の電波女なんて」
「いや、でも」
トーラスが割って入った。
「レオは真性電波野郎だったし、イン・ラケチの著者も電波くさいし、電波女に何か重要な役割を振っていたとしてもおかしくないぜ。三人がかりでイン・ラケチを完成させたんだろう？　その三人にしかわからない絆（きずな）みたいなものがあったんじゃないだろうか。ジョーカー様のおっしゃる通り、一応、チェックしといたほうがいい……」
アクエリアスは、一瞬、かっと頬（ほほ）を染めた。怒りが彼女をとらえたようだった。
クールな彼女がこんな表情を見せるのは珍（めずら）しいことだった。トーラスはびっくりしたように瞬いた。
しかし、結局アクエリアスは何も言わなかった。すっと息を吸い込むと、いつものように落ち着いた声で言った。
「無駄（むだ）だとは思うけど。ジョーカー、あなたはどう思う？」

「――プリンス、君はその女性を見張ってくれ。レイディ、君は蝸牛山へ」

「山？」

「ラスト・バタリオンがそこを目指している。奴らはおそらく、蝸牛山をカラコルに見立てているのだと思う」

「カラコルって？」

「イン・ラケチに記述がある。マヤの遺跡チチェン・イッツアに、カラコルと呼ばれる建物がある。古代に、天文台として使われたものらしく、螺旋状の階段が刻まれている。カラコルとは、スペイン語で螺旋やカタツムリを意味する単語だ。イン・ラケチによれば、マヤ文明の起源は珠閒瑠市にある。蝸牛山は、ちょうどカラコルに似た形をしている。当然、両者は関連づけて考えられる」

「……つまり」

杏奈は頭の中を整理した。

「イン・ラケチの妄想が実体化して、蝸牛山が本当にカラコルに変わってるってこと？」

「おそらく。そうでなければ、ラスト・バタリオンがそこを目指す理由がない」

「カラコルには何があるの？」

「――時の円環」

その言葉をつぶやいたジョーカーは、苦しげだった。表情はわからないが、声が沈んでいる。

「それが、シバルバーに至る道を開く鍵となる。奴らにシバルバーを制圧させてはならない」
「わかった。それで、わたしはカラコルで何をすれば……」
言いかけて、杏奈は口をつぐんだ。
一般人にすぎない仮面党員たちにすら、ラスト・バタリオンと戦うことを命じようとしているジョーカーである。彼がレイディ・スコルピオンに望んでいることははっきりしていた。
杏奈は呆然とした。
――ヒトラーの軍隊と戦う？　わたしが？
あまりに現実味がない。その意味が頭に浸透するのに時間がかかった。
パラシュートで降下してきた無気味な影。キャタピラで街を蹂躙する戦車隊。現在カラコルに向かっているのは、彼らよりもさらに強力な装備を備えたナチスの精鋭部隊であるはずだ。
そんな連中と、戦えと？　たった一人で？
杏奈はまじろぎもせずにジョーカーを見つめた。ジョーカーは杏奈のほうを見ていなかった。
勝てる見込みなんて、万に一つもない。杏奈がカラコルで果たせる役割といったら、せいぜいラスト・バタリオンをてこずらせ、ジョーカーが行動するための時間を稼ぐことぐらいだ。
当然、生還する可能性は限りなくゼロに近い。
私に力を貸してくれないか。あの夜、路地でそう囁いたとき、すでにジョーカーはこうなることを予想していたのだろうか。仮面党のために――イン・ラケチの成就のために捨て駒にな

れと？

思い出した。あのとき、自分が何を言ったか。

世界が終わる日まで、何もせずにただぼーっとしていたい。ぼーっとして、何もかもが終わるのを見ていたい。杏奈はそう言ったのだ。

みんな死んでしまわないか。ふわあっと、何もせず、苦しみもなく、ただ死んでしまわないか。それが杏奈の望みだった。ある意味、これは願望通りの展開だ。破滅はすぐ目の前に迫っている。それが杏奈はカラコルで殺されればいい。大したことはしなくていい、ただちょっとラスト・バタリオンを足止めして、殺される。それでジョーカーの役に立つ。

杏奈はジョーカーの素顔を思い返した。天使のような微笑から、怒りに狂った形相まで、めまぐるしく表情を変えた美しい顔。彼は無数の自我に引き裂かれていた。混乱した記憶に苦しめられていた。

今、彼は心の平安を取り戻しているようだった。迷いも苦しみもなく、静かに座っている。きっと、ぎりぎりまで揺れていたのだろう。ジョーカーの仮面と少年の素顔と、二つの人格の間を行き来しながら苦しんだことだろう。彼の素顔を見てしまった杏奈には、それがよくわかった。

だが、結局、加速する現実が彼の意識を押しつぶした。実体化してしまったラスト・バタリオンと戦うために、彼はジョーカーであることを選んだのだ。レオのために泣いた優しい少年

は、もうどこにもいない。冷徹に、部下に死を命じる仮面の男がいるだけだ。
ならば、杏奈も従わなければならない。ジョーカーに従い、命令通りに死地に赴かねばならない。杏奈は理想を差し出すことなく仮面党に加わった、唯一の例外だ。その代償は、今払わねばならない。

「あ……えっと……カラコルへは俺が行きましょう。レイディも一応、女の子だし」
トーラスが申し出た。臆病者とばかり思っていたが、意外に侠気があるらしい。
「いいよ、プリンス」
杏奈は言った。
「ジョーカーの命令を覆すわけにはいかない。わたしが行くよ」
「だが、相手はナチスだ。君には荷が重すぎる」
「わたしでもあんたでも同じ。ナチスの精鋭を相手に戦ったことなんてないでしょ」
「……そりゃ、ないが……」
「レイディ・スコルピオン。戦闘に際しては、ペルソナが君を助けるだろう」
ジョーカーが言った。
「ペルソナは、もう一つの自我だ。いつも、君の中にある」
「わかった。行くよ」
「――吉栄杏奈」

トーラスとアクエリアスが、驚いたような顔をした。仮面党内部で、本名を呼ぶことはタブーとされてきたはずだ。ジョーカー本人が、今その禁を破った。

「すまなかった。君との約束、果たせなかった」

「約束って。何かあった？」

「君の夢、取り戻したかった」

「わたしには夢なんてない。そう言ったはずだけど」

杏奈は微笑んだ。

ジョーカーは誤解している。杏奈が、本当は今でも走りたがってるのだと信じている。

杏奈には何もない。夢も、理想も。強がりではない。走る夢を絶たれて、かえってすっきりしているくらいだ。インターハイとかオリンピックとか、高みを目指せばキリがない。努力すればするほど、もっと高い理想が見えてきて、疲れるだけ。

甘い夢なら、いくらでも見ればいい。でも、実現困難な遠い夢なんて、ないほうがマシ。杏奈は杏奈なりに、安らぎの中にいる。ジョーカーが詫びる必要はどこにもない。

「わたしは？」

けだるげな声は、クイーン・アクエリアスだった。

長い髪をたわむれに指に巻きつけながら、彼女はちらっとジョーカーを見た。

「わたしは、何をすればいいの？」
「あなたは、私と一緒に来てもらう。周防と決着をつける。奴らを粛清し、それからカラコルへ向かう。時の円環を開いて、イン・ラケチを成就させよう」
ジョーカーは少し間をおいてから続けた。
「クイーン・アクエリアス。あなたの力が必要だ」
アクエリアスは驚いたように眉を上げ、おどけて応えた。
「了解」
笑い声は、少女のようだった。

*

ゾディアックの建物を出ようとしたところで、クイーン・アクエリアスに呼び止められた。
少し意外だった。アクエリアスは最初から、杏奈を馬鹿にしたような態度を取り続けていたので、彼女のほうから声をかけてくることがあるとは思わなかった。
「どう、ナチスと戦いに行く心境は？」
例によって笑いを含んだ声で囁く。杏奈は無視しようとした。からかいに応じる気分ではなかった。
「お待ちなさいよ。あなたに、これあげるわ」

アクエリアスは、金属でできた輪のような物を取り出し、杏奈に渡した。
杏奈の手のひらに少し余るほどのサイズだ。円周にそってぐるっと文字のようなものが彫り込んである他は、装飾らしいものはない。目を近づけてみたが、書かれた文字は仮名でも漢字でもアルファベットでもなく、杏奈には読めなかった。
「……これは？」
「チャクラムっていうんだそうよ。武器の一種」
「なんで、こんなものを？」
「ラスト・バタリオンと戦うのに、普通の武器じゃ心細いでしょ。だから、あげるって言ってるのよ」
珍しく親切だと思ったら、やっぱり意地の悪い一言を付け加えた。
「思い切り戦って、心おきなく死んでちょうだい」
「……」
杏奈は上目遣いにアクエリアスを睨んだ。
「あら、恐ろしい。そんな目をするものじゃないわ。せっかく人が好意で言ってるんだから」
「こんな輪っかが、なんの役に立つわけ？」
杏奈は人差し指にチャクラムを引っかけて、くるくる回した。どうせ嫌味のつもりなら、玩具の水鉄砲でもよこせというのだ。

突き返そうとしたが、アクエリアスは受け取らなかった。
「ただの輪じゃないのよ。周囲に文字が書いてあるでしょう。なんだかよくわからないけど、呪術的な力があるらしいわ。どこかの遺跡から発掘された貴重な武器だそうよ」
杏奈はチャクラムを見直した。
古ぼけた、汚らしい輪っかだ。そんな貴重なものにはとても見えない。うっかり礼を言ったら、途端に大笑いするのがアクエリアスの流儀ではないかという気がした。
しかし、アクエリアスは表情を改めた。少なくとも杏奈にはこれまで見覚えがない、真面目な顔になった。
「死んだ亭主からもらったのよ。とっくに処分したと思ったのに、クローゼットから出てきたの」
「……」
「いつも使ってる場所なのに、ずっと気がつかなかったの。今朝、急に転がり出てきてね。何か意味ありげでしょ。でも、私が持ってたって使えないから、あなたにあげる」
そう言われてもまだ疑わしくて、杏奈はじーっとアクエリアスを見つめた。アクエリアスは苦笑した。
「そう警戒しないでちょうだい。私の好意よ、これは」
「……死んだ亭主って。なんて、こんなもの持ってたの」

「変人てね。遺跡を発掘に行ったり、ガラクタを買いこんできたりするのが好きだったのよ」
派手な私生活で知られる女優・黒須純子にしては、奇妙な夫をもっていたものだ。
「それね、彼が外国に旅行したときに、胡散臭い土産物屋で見つけてきたらしいの。子供みたいに興奮してね……これはすごいんだ、本物のパワーを秘めているんだなんて主張するから、笑っちゃったわ。こんなもの、汚らしいただのガラクタじゃない。いくら出して買ったのよ。だまされたに決まってるわよって。でも、あの人、いやに真剣な顔でね……君にあげるって……きっとお守りになるからって。バカよね、こんなもの、アクセサリーにもなりやしない。私は宝石が欲しかったのに。結局、あの人がプレゼントしてくれたものなんて、こんなガラクタばっかり。私、花束一つもらったことなかったわ」
アクエリアスは独り言のように、沈みこんだ声でつぶやいた。
そして、急に思い出したように杏奈の顔を見直すと、いつもの口調で続けた。
「本当に力のある武器なのかどうか、知らないけれどね。ないよりマシでしょ」
「……ありがと」
一応、礼を言っておいた。アクエリアスの表情や言葉からは、いつもの皮肉っぽさは感じ取れなかった。
アクエリアスはじっと杏奈を見ていたが、ふと目をそらせてつぶやいた。
「淳をお願い」

「——え?」

「守ってやって。できる限り、わたしがそばについていてやりたいけれど……わたしが倒れたら、あの子は一人になってしまう。お願い。あの子を裏切らないで」

「淳って?　誰のこと?」

杏奈は眉を寄せた。息子のことを語っているようだが、アクエリアスの子供のことなど知らない。そういえば、「結構大きい子供がいるって噂がある」と新聞部の光雄が言っていたが……。

アクエリアスは答えなかった。いつものシニカルな口調に戻って「じゃ、せいぜいがんばることね」と告げると、ひらひらと手を振り、足早に去って行ってしまった。

杏奈は手の中に残ったチャクラムを見直した。

刻まれた文字は読めなかったが、握っていると手のひらが温かくなるような気がする。どれほどの力が秘められているかはわからないが、ただのガラクタという認識は改めたほうがよさそうだった。

いったい、どんな人物だったのだろう。黒須純子の夫とは。よくまあ、あんなワガママで贅沢な女と結婚する気になったものだ。しかも、あの派手好き女とはまったく性格が相容れなさそうな、ガラクタ・オタクのオカルト好きときた……。

ふと、杏奈は妙な符合に気付いた。

オカルト好き——イデアル。

さっき、イデアルの話が出たとき、クイーン・アクエリアスは彼女らしくもない激昂の表情を見せた。何が彼女を刺激したのか、よくわからなかった。だが、有名女優と一介の高校教師の間に何か接点があるとしたら——。

イン・ラケチ。

岡村はイン・ラケチ完成に協力した。書き上げたのは、やはりオカルト狂いの妄想狂、セブンスの世界史教師だった。

杏奈は呆然として、チャクラムを握りしめた。

根拠のない仮説ではある。だが、黒須純子の元・夫が、その世界史教師だったとしたら？

彼女が岡村の話題にあれほど激しい反応を見せたのも、納得がいく。岡村は、ぎくしゃくした夫婦に投じられた一個の石だったのだ。オカルト狂いの夫、それを理解しない派手好きの妻、夫の良き理解者として現われた若い女性。こんな三人が揃えば、どんな嫉妬や葛藤が生じるか、杏奈にも容易に想像がつく。

——淳をお願い。

思い詰めたようなアクエリアスの言葉を思い出した。

杏奈は呆然とした。イン・ラケチの著者はジョーカーの父親。そして同時にアクエリアスの夫。

すべての辻褄が合う。彼女が口にした「淳」とは——ジョーカーだ。

杏奈は、ジョーカーの素顔を思い浮かべた。あのときは気付かなかった。ただ、なんて美しい少年だろうと思っただけだった。

似ている。彼の素顔は、黒須純子によく似ている。切れ長の目といい、形の良い薄い唇といい。

杏奈は壁にもたれかかった。殴られたような衝撃だった。

ジョーカーは黒須純子の息子？　そんな素振りはまったく見えなかった。あれほど完璧に、他人を演じきれるものだろうか？

彼は父親を生きていると言い張っている。記憶に混乱が生じているのだとすれば、アクエリアスが自分の母親であることに気づいていない可能性もある。

確かめなければならない。死を覚悟したようなアクエリアスの言葉を思い出すと、うやむやなままにはしておけない。

杏奈はアクエリアスを追った。彼女はもう大通りへ出て、車に乗りこもうとしていたが、杏奈に気づいて振り返った。

杏奈はチャクラムをしっかり握りしめ、息をはずませて尋ねた。

「……母親なの？」

その一言で、杏奈が真相に気づいたことを悟ったようだった。

アクエリアスは答えず、微笑んだ。テレビの中で見せるのと同じ、気取った華やかな笑顔だった。
「なんの話？」
「教えて。あなた、ジョーカーの母親なの？」
「わたしは女優よ」
車のドアに手をかけて、アクエリアスは笑顔を消した。長い髪が、ふわっと翻った。
「母親役を求められれば演じる。それだけよ」
「クイーン……」
「スキャンダルはごめんだわ」
アクエリアスは車に乗りこんだ。車は素早く発進した。
杏奈は車を見送って立ち尽くした。なぜ——疑問が胸に渦巻く。なぜ、彼ら親子三人はこんな数奇な運命に投げ込まれてしまったのだろう。なぜ、少年はジョーカーと化したのだろう。なぜ彼は忘れているのだろう。父親がとっくの昔に死んでいることも。母親が自分のすぐ近くにいることも。
他の記憶はしっかりしているのに、両親のことだけ都合よく忘れるなんて考えられない。記憶喪失というより、記憶を改変されているのだ。何者かの意図によって。
珠間瑠市では、ある種の噂が現実化する。実現する噂と、しない噂との差がどこにあるのか

はわからない。ただ、何者かの意図に気まぐれに左右されるだけだ。

何者なのだろう。珠間瑠市を弄び、ジョーカーを操っているのは。人ではありえない。とてつもなく邪悪な、宇宙の意識。闇に這う神……。

自分の身体が急速に縮んだような錯覚を覚えて、杏奈は身震いした。

杏奈も、ジョーカーも、アクエリアスも、周防たちも、死んでしまったレオも――踊らされているだけなのか。時空を超越し、人間たちを嘲笑う、混沌の神によって。

杏奈はチャクラムを握り直した。そこから伝わってくる波動は、温かかった。

たとえ――邪悪な意志に踊らされているだけだとしても。

立ち止まることはできない。杏奈はすでに渦の中にいた。

一瞬、鋭い哄笑が耳の奥に聞こえたような気がしたが、頭を振って錯覚を払いのけた。チャクラムを握って、杏奈は歩き出した。

5

鋭い破裂音とともに砂塵が舞う。
一瞬早く、杏奈は飛びのいている。杏奈がいた場所には、無数の弾丸が撃ち込まれていた。木々の合間に、鳥のように甲高い声が響いた。マスク越しのナチス兵の叫びだ。何を言っているのか聞き取れない。
正面の敵は三体。
三人、ではない。どう見ても生命を宿していない、四角い金属の塊が二体。一応人間の形をしているが、子供のように小さく、人形のようにぎくしゃく動く金属兵が一体だ。
杏奈は身体を反転させながら、アンダースローでチャクラムを放った。
軌跡が見えない。早すぎて。
硬質な音をたてて弾かれた戦輪は、優雅な弧を描いて杏奈の手に戻ってきた。金属兵は首を折られ、崩れた玩具のように倒れる。
アクエリアスの言葉ははったりではなかった。確かに、このチャクラムには魔的な力が宿っ

ている。

一息入れる暇もない。金属の箱が反応する。

低いモーター音とともに、箱から突き出した銃身が旋回した。杏奈は仰向けにのけぞった。間一髪。たった今まで杏奈の身体があった空間を、レーザービームが切り裂いている。

身体を起こすのと、再びチャクラムを放つのとは同時だった。

一体を切断した輪は、はね返ってまた一体を真っ二つにした。

完了。杏奈は額をぬぐった。汗をかくなんて、久しぶりだ。

もともと運動神経は卓越している杏奈だが、それでも、今の動きは本来の彼女の力ではなかった。反射速度、跳躍の距離、柔軟性、すべてが人間離れしている。ジョーカーから与えられた力のおかげだ。

風が吹いた。木々がざわめく。

蝸牛山は珠間瑠市郊外にある低い山で、平時であれば家族連れのピクニックなどでにぎわう場所だ。現在はナチスによって登山口を封鎖されており、一般人は入りこめない。杏奈はバリケードを強行突破して、山道へ侵入したのである。

今ので、敵との遭遇は四回目だった。

うんざりする。カラコルへの入り口は、山頂にある。そこにたどりつくまでに、あと何度の戦いを経ねばならないのだろう。

救いは、行く手を阻む兵士がさほど強くないことだった。たぶん、このあたりはまだザコが守っているからだろう。銃撃、毒ガスと見境のない攻撃をしかけてくるが、まともに食らわないよう気をつけながらチャクラムを投げつければ、決着がついた。
しかし、いつまでもこの調子で進めるとは思えない。なるべく敵との接触を避け、体力を温存して山頂に向かうには、ルートを選ばないと……。
突然、激しい風に煽られた。
杏奈は自分から身体を倒して衝撃を避け、顔を上げた。
新たな敵が出現していた。大きな翼とうねる尻尾を持つ緑色の龍が二体、宙に浮かんでいる。
これも新手の兵器か？　金属には見えないが。
龍は翼を広げて舞い上がり、かっと口を開けた。
開いた口から無数の粒子が放たれる。
氷だ。龍の吐息が、微細な氷の粒となって吹きつけられた。
杏奈はとっさに腕を上げて顔を庇った。邪気を帯びた氷の粒子を浴びて、鳥肌が立ったが、さほどのダメージはない。蠍の星座に生まれついた者は、水のエレメントに守られる。水性の攻撃は杏奈にはきかない。
だが、草木はそうはいかない。氷粒を浴びた下草は、あっという間に茶色く変色した。

──ナチスじゃない。

杏奈は唇を噛んで竜を見上げた。

どうやらこの山道には、ラスト・バタリオンとはまったく無関係なこんな化け物も出没するらしい。珠間瑠市の座標は、今や手のほどこしようがないくらいにズタズタにされている。次元の裂け目を通って、この世のものならぬ悪魔たちがやってくる。

龍には、幾分かの知性があるらしい。杏奈を仕留められなかったことで、苛立っている様子が感じられた。

一体が翼を広げる。胸部が膨らむ。再び氷の粒子を吐く構え。

もう一体が素早く杏奈の背後に回り込んだ。

挟撃。小賢しい真似を。

杏奈は身体を低くして、チャクラムを投げた。

正確に、龍の胴体を切断。断末魔の叫びと青い血飛沫を残して、龍の身体は地に落ちた。

残るは一体。仲間の死に動揺している。楽勝。

しかし、チャクラムが手に戻るのが一瞬遅れた。怒った龍が、翼をはばたく。

突風に煽られて、杏奈は吹き飛んだ。

仰向けに倒れたところへ、龍が襲いかかってくる。

頭を下に、急降下。ガラスのような目玉と、鋭い牙が目に入った。

チャクラム。間に合わない。

鋼のような牙に裂かれる——その寸前、杏奈の手は氷の槍を握っていた。

考える余裕はない。本能的に繰り出した槍は、龍の喉を刺し貫いた。

痺れるような手応えがあった。杏奈は横たわったまま、驚きに見開かれた龍の目玉を見上げていた。

ぽたぽたと、青い液体が滴り落ちてくる。龍は生臭い血を撒き散らして地に落ちた。

戦闘の終了と同時に、氷の槍は消えた。杏奈は横たわったまましばらく息をはずませた。

なんだったのだろう。今のは。

目の前に手をかざしてみた。変わったところはない。生命線の短い、杏奈の手だ。

これもまた、ジョーカーが与えた力なのか。危機に応じて、身体の奥底の力が目覚める。

杏奈は立ち上がった。今のは、ちょっとばかりハードだった。呼吸がなかなか整わない。

服についた龍の血をぬぐい、歩き出してすぐに気付いた。

足元に、巨大な魔方陣が描かれている。そして、そのすぐ前方に、黒々とせり上がる壁が見えた。

——カラコル。

いよいよ、目的地に到達したのだ。

*

自分の足音が、うるさいくらいに反響している。

カラコル内部は、複雑な迷路構造になっていた。気を抜くとすぐに方向がわからなくなるし、床には罠が隠れている。何度か地雷を踏んで、ダメージをこうむった。

罠ばかりではない。至るところに、ナチスと悪魔どもが待ち構えていた。一体ずつ確実に撃破しながら、先を急ぐ。チャクラムの使い方もだんだん板についてきたようだ。戦闘にかかる時間が短くなった。

内部は薄暗かったが、目が慣れてくると少しずつ様子がわかってきた。

壁も床も天井も、石とも金属ともつかぬ物質で構成されている。陽はまったく差し込まないが、壁や床の全体がうっすらと光っており、目が慣れれば、足元に不自由はなかった。

迷宮を正しく進むと、階段が見つかる。先の見えない暗い階段が、下へ、下へと続いていた。ちょうど、蝸牛山の内側を、地下へ下りてゆくことになる。

冥府行。世界各地の神話に語られる、あの物語を思い出す。エウリディケとオルフェウス。イザナミとイザナギ。死せる妻を追って、地の底へと下りて行く夫。行き着く先は亡者の国……。

地下四階に達した。いったいどこまで行けばいいのか、杏奈はそろそろうんざりし始めてい

た。
列柱の間を通り抜けたところで、足を止めた。
前方に、巨大な影が見えた。
鋼鉄の騎士が三体。これまで戦ってきたザコどもとは、明らかに格が違う。
まず、その大きさ。杏奈の背丈の二倍近くありそうだ。大きさばかりではない、そのフォルムは、これまでに見た金属兵などとは比較にならないほど美しく洗練されている。すっきりした二本の足と、力強い胴部。手に長い槍を握り、小さな頭部には赤い光を宿していた。
杏奈はまっすぐに敵を睨みつけた。
足元から震えがくる。本物の恐怖がこみあげてくる。
――ナチス・ドイツの最終兵器。聖槍騎士団だ。
「ようこそ、フラウ・スコルピオン」
一体の騎士が、轟くような声を上げた。杏奈はびくっとした。
怯えを悟られてはいけない。精一杯胸を張り、鋼鉄の顔を睨む。
「一人で来たのか？　さすがは、仮面党の美しきヴァルキューレ」
「殺すには惜しいな」
騎士たちは笑った。
杏奈は、手にしたチャクラムを強く握りしめた。

恐怖は去れ。心を怒りに染めろ。

「ここで投降するなら、見逃してやらんでもないぞ。総統は情け深い方だ。おまえを連れて行けば、きっとお喜びになるだろう……」

ロンギヌスの言葉が終わらぬうちに、杏奈は床を蹴っていた。

飛び出すと同時に、渾身の力をこめてチャクラムを投げつける。

硬い音が響いた。戦輪はロンギヌスの装甲に弾き返され、杏奈の手に戻ってきた。

絶望にとらわれる。金属兵を簡単に切断してきたチャクラムも、ロンギヌスの前では玩具同然だった。

「無粋だな、フロイライン。歓迎の挨拶も済まぬうちに」

あきれ返ったような、ロンギヌスの声。

杏奈は身体の内側に力が生じるのを感じた。凍った炎のような、冷たい力だ。一瞬にして、背骨が氷柱に変わったかのような。

青き髑髏よ。天の十字よ。蠍の星宿よ。我に力を。

漲る力を指先に凝縮し、一気に解き放つ。

水の気が迸る。一直線に、ロンギヌスめがけて。

これはさすがに手応えがあった。避けきれなかった鋼鉄の騎士は、直撃を食らって仰向けにひっくり返った。

床が震える。しかし次の瞬間、ロンギヌスはその巨体が嘘のように素早く起き直った。
「小娘……いい気になるなよ！」
怒声。先ほどまでの紳士めかした余裕が嘘のようだ。
「9」
別の騎士がたしなめた。
「落ち着け」
「しかし10、このクソアマが……！」
「言葉を慎め。第三帝国の誇りを穢すな」
ロンギヌス10が手にした槍が、優雅な弧を描く。穂先が杏奈に向いた。
杏奈は緊張した。力をかければ折れそうなほど細い槍だが、見かけどおりの武器とは思えない。何が飛び出すのか……。
「残念だ、フラウ・スコルピオン。君のような美しい女性と、このような出会い方はしたくなかった」
ばーか。
短くつぶやいて、杏奈はもう一度攻撃を繰り出そうとした。
読まれていた。ロンギヌス9が、隙をついて素早く杏奈の背後に回り込む。
そちらに気を取られた瞬間だった。

ロンギヌス10の槍先から青い閃光が迸った。
上に向けて放たれたそれは、高い天井で反射し、降り注ぐ稲妻となった。
杏奈は床に転がった。なんとか直撃は免れたが、左腕をかすめた。
左半身に痺れが走る。帯電した空気は、ちりちりと焦げたような臭いがした。
「お見事(プリマ)、猿嬢(フラウ・エフヒエン)」
ロンギヌス8(アハト)が嘲笑した。
「身軽なことだ。どこまで逃げ回れるかな……」
杏奈は息を吸い込んだ。
額の前に手をかざす。再び、水撃を放つ。
ロンギヌスの槍が素早く旋回する。その穂先から、ターコイズ・ブルーの稲妻が迸った。
身体が爆発したような衝撃を受けた。悲鳴すら上げられずに、杏奈は倒れた。
心臓が止まらなかったのが不思議だ。ロンギヌスの放った霊的雷光(ガイステスブリッツ)が、水流を伝って杏奈を直撃したのだった。
「無駄だ、フロイライン」
哀れむような声が降ってきた。
「聖槍騎士団は無敵。おのれの無謀さを悔やむがいい」
ロンギヌス9が槍を振り上げた。

貫かれる——杏奈は死を覚悟した。だが、鋭い槍先は杏奈の左肩をかすめて宙を裂いていた。

一瞬遅れて、痛みではなく熱さを感じた。さっきの電撃のせいで、痛覚が鈍くなっている。

肩から流れ出した血は、幾条もの筋を描いて腕を伝い、冷たい床に滴り落ちた。鮮烈な赤。

夢の中でたびたび見た色だ。

Ich liebe dich, mich reizt deine schöne Gestalt.

『魔王』の一節を囁くような声で歌い、ロンギヌス9は笑い出した。

連中、とどめを刺さずに楽しんでいる。

杏奈は傷ついた肩を押さえた。指の隙間から温かい血が滴り落ちる。足がふらついた。失血に伴って、急速に力が失われてゆく。

「もう終わりかね、フロイライン？　さっきまでの威勢の良さはどうした？」

ロンギヌス10の槍が杏奈を小突いた。

立っていられなかった。杏奈は自分の血だまりの上に膝をついた。

チャクラムが、乾いた音をたてて床に落ちた。

転がったそれを、ロンギヌスの槍が引っかけ、拾い上げる。穂先でチャクラムを弄びながら、ロンギヌスは嘲笑した。

「どうだ、赦しを乞うてみないか、フロイライン」

「這いつくばって命乞いをすれば、聞いてやらんこともない」

「総統を崇めよ。第三帝国に忠誠を誓え」
杏奈は鋼鉄の騎士たちを睨みつけた。
むろん、ロンギヌスたちも杏奈が素直に聞き入れるとは思っていない。また、気に障る笑い声が響いた。
「強情は美徳ではない。君がそれを知る機会がなかったのは気の毒なことだ。おやすみ、フラウ・スコルピオン」
槍先がはね上がる。
戦輪が杏奈めがけて飛んでくる。
避けきれなかった。チャクラムは杏奈の脇腹を抉って後方へ飛んだ。歯を食いしばっても、苦痛の呻き声をこらえきれなかった。
ロンギヌスたちは決して致命傷を与えようとせず、じわじわ嬲って楽しんでいる。杏奈は絶望した。この屈辱的な時間は、いつまで続くのか……。
そのとき、背後に気配が生じた。
──また、新たな敵が？
杏奈はゆっくり振り返った。
まず目に入ったのはチャクラムだった。杏奈を傷つけたチャクラムが、鈴のような音をたてて床を転がってゆく。

続いて、そのチャクラムを踏みつける爪先が見えた。黄色いストレートパンツに包まれた長い足。
杏奈はゆっくり視線を上げた。
黛ゆきのが立っている。ゆきのは身をかがめて、チャクラムを拾い上げた。
一人ではない。仲間たちと一緒だった。周防達哉とリサ・シルバーマン、天野舞耶、カス校の制服を着た青髪の少年。
「来たか、人形ども！」
ロンギヌス10が満足げな声を上げた。彼らの到着を予期していたようだ。
杏奈は何度も瞬いた。なぜ、ゆきのがここへ……？
ゆきのはチャクラムを両手で持って、鋼鉄の騎士たちを睨みつけている。冷え冷えとした怒りが伝わってくる。ゆきののこんな表情を見るのは初めてだった。
怒り――だけじゃない。声にならぬ慟哭が聞こえる。
何があったのだろう？　何が、ゆきのをこんなに悲しませている？
「杏奈から離れろ」
ゆきのが言った。感情のこもらない、平坦な声に聞こえた。しかし彼女の目は零下の怒りをたたえている。
「これ以上――あたしを怒らせるな」

ロンギヌス9が、小馬鹿にしたように槍をくるっと旋回させた。

「嘆かわしいことだな。最近は、虫けらが人間並みの口をきく。人間並みの夢を抱き、人間並みの理想を語る……」

「星をつかめ、だと。笑わせてくれる。虫は虫らしく地を這っておればよいものを」

ロンギヌスたちは声を合わせて笑った。

杏奈は身震いした。ゆきのの怒りが伝わってくる。怖いほどの殺気が空気を染めてゆく。

「……笑ったな」

ゆきのは押し殺した声で囁いた。

「あの人を……笑ったな！」

ロンギヌスが槍を振り上げる。

青い光が迸る。雷撃がゆきのに襲いかかったが、ゆきのは一瞬早く床を蹴っていた。

避けたのではない。逆に、ロンギヌスの懐へ飛び込んだのだ。

ゆきののペルソナが具現した。カス校の屋上で見たときとは違う。もっと大きく、もっとまばゆい光に包まれた——女帝ドゥルガーが躍り出る。

「こっち！」

リサ・シルバーマンが杏奈に駆け寄ってきた。傷ついた肩にリサの手が触れると、途端に痛みが消えた。

「あんたたち……」
わけがわからず、問おうとしたが、リサはきっぱり首を横に振り、杏奈の腕を引いた。
「話はあと。あいつら片づけるから、休んでて！」
「だけど……」
「あとだってば！　わかんないの？　ゆきのさん、怒り狂ってるんだよ。今のあなたの状態じゃ、巻き添え食らって吹っ飛ばされるよ」
リサは杏奈を突き飛ばすようにして柱の陰に休ませると、自分は身を翻して戦場へ駆け戻った。
杏奈は座り込んで、呼吸を整えた。リサの言う通り、今の杏奈の体力では、とても戦闘には参加できない。リサの手当てのおかげで傷口はふさがったが、失われた血は戻らない。しばらくの休息が必要だった。
柱に身を寄せて、ゆきののほうを見る。
ロンギヌスたちの動きがおかしかった。さっきまでのような余裕が感じられない。彼らは浮き足立っていた。ゆきのの無鉄砲さは、計算外だったのだろう。至近距離に近づいたゆきのを攻撃するには、長い槍はかえって邪魔になった。
リサの言った通りだ。ゆきのは怒り狂っていた。見境なく突っ込んで、捨て身の攻撃を放つ。仲間たちの援護がなければ、あっというまに殺られているだろう。

彼らの連係は見事だった。達哉のペルソナが火を放つと同時に、舞耶がその威力を増幅し、ロンギヌスたちにぶつける。銀色の装甲が火の色を映して、赤く輝いた。

騎士たちに体勢を立て直す隙を与えず、青髪の少年が疾風撃を打ち込んだ。ロンギヌス8が咆哮し、稲妻を放つ。吹き飛ばされた少年を、素早くリサが手当てする……。

杏奈の視線は、ゆきのだけを追っていた。

なぜ、あんなに怒っているんだろう。なぜ、あんなに悲しそうなんだろう。

黛ゆきの。なぜ、あんなふうに戦えるんだろう。

ついに、ロンギヌス9が倒れた。ゆきのの放った烈風弾が致命傷となったのだ。巨体が横倒しになり、白煙を吹き上げた。

8と10は、仲間の脱落にも見向きもしない。槍を振り回して、ゆきのを狙っている。

稲妻が縦横に走り、騎士たちを守る網となる。ゆきののペルソナは両腕を広げ、軽々とその網を破った。

皮肉なことに、杏奈が思い浮かべたのは、さっきロンギヌスが歌った詩の一節だった。

Ich liebe dich, mich reizt deine shöne Gestalt.

愛している。私はもう、美しいおまえの虜。

ゆきのは美しかった。怒りが、悲しみが、白い光となって彼女を包んでいる。無駄のない動きで、ロンギヌスたちを圧倒する。息が詰まる。目を奪われる。

8が膝を屈した。追い詰められた10が、気の狂ったような雄叫びを上げる。

「勝った気になるなよ、マリオネッテン！　虫けらがどんなに足掻こうとも、我々の高みには届かんぞ！　第三帝国は不滅だ！　ハイル・ヒトラー！」

「何がハイルよ！　何がヒトラーよ！」

興奮して叫んだのは天野舞耶だ。舞耶は片手を腰に当て、もう片方の手をピストルの形にして、ロンギヌスにビシッと突きつけた。

「消えちゃえ！　あんたたちなんて、ただの妄想の産物なんだから！　本物のナチスはとっくに滅びた。ヒトラーは愛人と一緒に自殺したのよ。歴史の教科書に書いてある通り！」

「ふざけるな！」

「ふざけてるのはどっちよ！　本物のナチスは日本語喋ったりしないわよっ！」

「舞耶ちゃん、なーいす！」

リサが手を叩き、ペルソナを発動させた。

ロンギヌスの槍が真っ二つに折れ、青い火花を散らせた。10は仰向けに倒れ、動かなくなった。

静寂が訪れた。杏奈は立ち上がった。わずか数分間の休息だったが、体力は十分に回復していた。

ゆきのが振り返った。息をはずませている。表情が険しい。

杏奈には、なんと声をかけてよいのかわからなかった。黙って見つめていると、ゆきのは怖い顔のまま足早に近づいてきた。
「杏奈、怪我は!?」
「治したよー」
リサが手を振って答えた。ゆきのの表情が、やっと和らいだ。
「よかった、間に合って」
「……なんで？」
杏奈は尋ねた。
ゆきのの笑顔が不思議だった。さっきまで、あれほど猛り狂った顔をしていたのに。なぜ、こんな優しい顔で笑っているのだろう。
ゆきのはきょとんとして聞き返した。
「なんでって？　何？」
「なんで……わたしを助けたの？　お節介なやつ。なんでそんなにわたしにかまうわけ？」
「おいおい、そういう言い方はねーだろう。アネゴはなあ、おまえのことを心配して……」
青髪の少年がしゃしゃり出てきたが、リサにぶっ飛ばされて引っ込んだ。
「かまうなって言われても……さ」
ゆきのは腕を組み、首をかしげた。

「放っておけないんだよ。あんた、昔のあたしに似てるから」
「……似てる？」
意外な言葉だった。どこが似てるというのだ。杏奈はゆきのみたいにお節介じゃない。他人(たにん)に干渉(かんしょう)するのもされるのも嫌いだ。杏奈は――ゆきのみたいに真っ直ぐじゃない。ゆきののようには戦えない。
首を振った杏奈に、ゆきのは微笑(ほほえ)みかけた。
「昔のあたしは、何がしたいのか、自分がなんで生きてるのかわからなくて、いっそ何もかも無くなっちまえばいいと思ってた。毎日イライラして、不安で、憂さ晴らしに暴(あば)れてた。青かったよ。そんなもの、焦(あせ)ったって見つかりゃしないのに。落ち着いて、少しずつ探(さが)しゃいいのさ」
杏奈はゆきのの顔をあらためて見つめ直した。
ゆきのの言葉はぶっきらぼうだったが、乾いた大地に水が染みこむように、杏奈の心に染み透った。
不安。苛立(いらだ)ち。その通りだ。
夢なんてない。理想なんてない。そう自分に言い聞かせなければ、不安でたまらなかった。
走れない自分になんの価値も見出せなくて、気が狂いそうだった。焦らずに、立ち止まって、ゆっくり周りを見回してみる――そんな余裕は全然もてなかった。

切羽詰まった気持ちが、逆に、杏奈を無気力にした。死んでしまえば、世界が滅びてしまえば、この焦燥から逃れられる。何もかもが無になってしまえば、何ももたない自分を嫌悪せずにすむ。杏奈の無気力の底にあったのは、まっさらの自分と向き合うことができない臆病さだった。

涙がこみあげてきた。杏奈はあわてて目を見開いて、涙をこらえた。

「とにかく、間に合って良かったよ。杏奈、前に言ったことだけど、もう一度言う。あたしたちと一緒においでよ。今なら十分やり直せる」

ゆきのは手を差し伸べた。

杏奈は、ゆきのの後ろに立っている連中に目を向けた。ゆきのはよくても、他の連中は認めないだろう。杏奈は仮面党の一員。彼らの敵なのだ。

しかし、まず天野舞耶が大きくうなずいた。リサは満面の笑顔を見せ、青髪の少年は感動したように涙ぐんでいた。周防達哉は無表情だったが、杏奈に向けたまなざしは、拒絶ではなかった。

彼らは、杏奈を受け入れようとしている。なんて人のいい連中——杏奈は苦笑した。胸の奥底が、ふわっと温かくなった。

一歩進み出た。ゆきのの手を取ろうとしたときだった。

「あ——、やだやだ！　ヘドが出るね！」

嘲笑まじりの声が響いた。
ゆきのの声だ。ゆきの自身が、ぎょっとした顔で周囲を見回した。達哉やリサたちも、きょろきょろしている。
杏奈はいち早く察していた。列柱の間を歩いてくる人影がある。ゆきのと同じ顔に、皮肉な笑いを浮かべている。たぶん、どこかに身を隠して今の戦いを見物していたのだろう。赤目の偽者が現われたのだ。
偽者は杏奈たちから数メートルの距離をおいて立ち止まった。サングラスはしていない。無気味に光る赤い目が、杏奈とゆきの、そして周防たちを見回した。
「だまされるんじゃないよ、杏奈。そいつはとんだ偽善者なんだから。エラそうなこと言ったって、ホントは自分が一番よくわかってるはず。そいつはずっと、後悔し続けてんのさ。自分の選んだ道が間違いだったんじゃないかってね」
偽者は片目を細め、にやっと笑った。背筋の凍るような、残酷な微笑だった。
「わかってんだろ、黛ゆきの。おまえの夢は二つあった。一つはカメラマン、一つは教師だ。カメラマンになるにゃ才能がない、教師になるにゃアタマが足りない。どっちつかずで悶々としてるのは、おまえじゃないか。エラそうに人に説教できる立場かい。昔みたいにピリピリして周りに当たり散らしてるほうが、まだ可愛げがあったねェ。悟ったような顔で、歯の浮く台詞を言ってるよりはさ」

赤目は喉の奥で笑った。

「おまえの師匠、死んじまったカメラマン。いったい、なぜあの男に惚れてたんだい？　言ってやろうか？　抱いてもらえりゃ楽になるって計算ずくだったからだ。人に甘えて、寄りかかって、それでイッパシの大人になったつもりとは笑っちまうよ。そんな偽善者にだまされるんじゃないよ、杏奈」

「何言ってやがんだ、偽者が！」

怒り狂って叫んだのは、青髪の少年だった。

「アネゴと同じ顔でそんなこと言うんじゃやねェ！　てめえなんか……！」

「いいよ」

ゆきのが制止した。少年はまだ言い足りなさそうにゆきのを見たが、ゆきのは静かに言葉を継いだ。

「おまえの言う通りだ」

「アネゴ！」

「あたしはずっと迷ってる。だから、俊介さんに寄りかかって楽になりたかった。だけどね、その俊介さんがあたしに教えてくれたんだ。転んだっていい、迷ったっていい、諦めずに一歩ずつ進んで行けってね。カッコよくない自分をまっすぐ受け止めればいい……そうでなきゃ、夢なんて追えやしない。あの人が……俊介さんがそう教えてくれたんだ」

杏奈には聞き覚えのない名前だった。だが、ゆきのがその名を口にする口調を聞けば、その男がゆきのにとってどんな存在だったか容易に想像できた。
限りない尊敬と愛情。そして、もう二度と手の届かない場所へ去ってしまった相手への追慕。ゆきのがどうしてあれほどの怒りと悲しみを抱えていたのか、ようやくわかった。ゆきのは、かけがえのない人を亡くしたのだ。
赤目は腕を組み直した。
「気に入らないね……」
皮肉な笑みが消える。苛立ちの表情。
「気に入らないね。本当に気に入らないね！　おまえなんか、消えちまえ。あたしはあたしだけでいい。二人もいらないんだよ！」
燃えるような目を杏奈に向け、両手を伸ばして偽者は叫んだ。
「おいで、杏奈。だまされるんじゃない。あんた言っただろ、夢も理想もないほうがラクだって。それでいいんだよ。あんたはあんたらしく、あんたの思う通りに生きればいいんだ。誰の指図も受けるな。偽善者の言うことなんか信じるな。いい子だ、杏奈、こっちへおいで。あたしがあんたを守ってやるから。あんたが二度と迷ったり悲しんだりしないよう、抱きしめてやるから。こっちへおいで！」
「――周防」

ゆきのが口を開いた。激昂する偽者とは対照的に、落ち着いた声だった。
「先に行ってな。おまえには、やらなきゃならないことがあるだろ。ここはあたしが決着をつける」
周防達哉は一瞬、杏奈のほうを見た。
杏奈はまともに達哉と視線を絡ませた。彼の目は、これまでに見たこともないくらい力強い光をたたえていた。
達哉は小さくうなずきかけた。杏奈を信頼する、というしるしだった。
舞耶やリサ、そして青髪の少年が素早くその場を離れた。赤目はもう、彼らには見向きもしなかった。炎を宿したような目が睨みつけているのは、もう一人の自分だけ。
達哉たちの足音は遠ざかり、消えた。二人のゆきのと、杏奈だけが残された。
「行くよ……」
赤目は憎悪をこめた口調でつぶやいた。
その身体から、陽炎のような影が立ちのぼる。ゆきののそれと寸分違わぬ、女帝のペルソナが発現した。
ゆきのは、先ほど拾い上げたチャクラムを構えた。
赤目に向かって投げつける。赤目のペルソナは大きく両手を広げ、鋭い気合いとともに電撃を放った。飛びのいたゆきのの足元に、青白い火花が散る。

赤目は一瞬、逃げ遅れた。チャクラムが腕を裂いた。

「この……!」

赤目のペルソナが怒りの波動を帯びる。再び、電撃の構え。ゆきのも自分のペルソナを発動させた。

相手の攻撃を避けながら、攻め合う。どちらも完璧に相手の動きを読みきっている。

杏奈は少し離れた位置に立ち、二人のゆきのの戦いを見つめていた。

鏡合わせの地獄。同じ姿のペルソナが死闘を繰り広げている。どちらが勝っても、倒れるのはゆきの。

杏奈は大きく息を吸い込んだ。

全身に力が漲る。ロンギヌスたちを相手にしたときとは比べ物にならない、すさまじい力が自分の中に満ちるのがわかる。

殻を突き破るように、杏奈のペルソナが空中に生まれ出た。杏奈は目を細めた。いつも自分の中にあった力。しかし、はっきり目にするのは初めてだ。それは、青白い水のベールに包まれた美しい少女の姿をしていた。

ペルソナの放つ光が強まった。無数の氷の刃が、赤目めがけて飛んだ。

赤目はちょうど、ゆきのに向けて攻撃を放つ体勢に入ったところだった。防御は不能だ。杏奈の放った氷刃に全身を切り裂かれ、血飛沫が上がる。悲鳴。

ゆきのが素早く振り返った。しかし杏奈は彼女と目を合わせず、赤目に歩み寄った。
赤目は血まみれだった。ふらふらしながら身体を起こそうとする。真紅の虹彩が、怨嗟をこめて杏奈を睨みつけた。
「バカな子だよ、杏奈……！」
赤目は唇の端から血を流しながら、狂ったように喚いた。
「あんなやつを信じるなんて。このあたしを傷つけるなんて。きっと後悔するよ。おまえを一番理解してやれるのはあたし。おまえに一番よく似てるのはあたし。そいつじゃない。だまされるんじゃないよ、杏奈……！」
杏奈は赤目を見下ろした。
「杏奈」
ゆきのが呼んだが、振り返らなかった。
赤目のペルソナは、すでに具現する力を失っている。神々しい女帝の姿はかき消え、靄のような残骸が宙を漂っているだけだ。
杏奈は水平に腕を伸ばした。
殺気が、剣の形に凝集する。現われたのは、水の気を帯びた青い長剣だった。右手でしっかりその柄を握りしめる。
赤目がたじろぐ。真っ赤な瞳に怯えが走った。

「なぜさ、杏奈。なんでそんな目であたしを見る。やめて。あたしを殺すつもりかい」
「――あんたが言ったんだ」
杏奈は眉を寄せた。ゆきのの顔で、ゆきのの声で、哀願されるのはつらかった。
「ゆきのは一人でいい。あんたは、いらない」
「本当にバカな子。きっと後悔するから……！」
「しないよ」
杏奈は両手で剣を振りかざし、赤目の肩から胸へ一気に斬り下ろした。赤目は断末魔の悲鳴も発せずに倒れた。
切断された頸動脈から、噴水のように血がしぶく。
命の糸を断ち切ると、水の剣はたちまち消滅した。
杏奈は肩で息をして、倒れた赤目を見下ろした。醜い苦悶の表情を浮かべて事切れていた。
かがみこんで、その目を閉じさせた。赤い瞳が消えると、本当にゆきのと見分けがつかなくなる。杏奈は目をそらせて立ち上がった。
「……あーあ」
惚けたような声がした。ゆきのだった。
杏奈のかたわらに歩み寄ってくると、身をかがめて、自分の偽者をのぞきこむ。やはり、同じ顔が死んでいるのは気持ちよくないらしく、顔をしかめた。
「あんた、思い切って殺ったねぇ……あたしの顔だってのに、ためらいもなくバッサリと」

「殺さないほうがよかったの？」
「いや。冗談」
ゆきのは手を伸ばして、杏奈の頬に触れた。赤目の血が飛んでいたらしい。母親が子供にするように、優しくぬぐってくれた。
「……行こうか」
ゆきのは歩き出そうとしたが、杏奈は続かなかった。ゆきのは振り返り、不思議そうに杏奈を促した。
「何やってんの。もう、ここには用はない。周防たちのところへ行こう」
「……わたしは行かない」
杏奈は首を振った。
そっと自分の頬に触れる。ゆきのの指の感触がまだ残っている。以前、赤目に触れられたときとは全然違った。ゆきのの指先はひんやりしていたが、優しくて気持ちがよかった。
ゆきのは杏奈を見つめ直し。心配そうな表情で尋ねた。
「どうしてさ。あんた、まさかまだ仮面党に……」
「うん」
杏奈はうなずいて、ゆきのを見つめ返した。
赤目を斬り捨てた瞬間に、心は決まっていた。

ゆきのは、暗闇の中から杏奈を助け出してくれた。彼女と一緒に行けば、きっと明るい世界が待っている。しかし、そうするわけにはいかなかった。

レイディ・スコルピオン。杏奈はまだその仮面を捨てきれない。

「なぜさ……」

「放っておけない」

杏奈は視線を落として答えた。

「ゆきの、あんたはわたしを放っておかなかった。わたしが拒絶しても、ずっと手を差し伸べ続けてくれた。だから、わたしも放っておけない」

「誰を」

「——淳」

ゆきのは目を見開いた。

杏奈は、仮面をとった少年の素顔を思い出していた。黒須純子によく似た、美しい顔。絶望を宿した瞳。何者かに記憶を操られ、破滅の坂を転がり落ちてゆく——彼を放ってはおけなかった。

「淳って……ジョーカーだろ？」

「知ってたの？」

「周防たちから聞いてる。周防たちの幼なじみだって」

「わたし、約束したの。彼の母親と」
「……母親?」
「絶対、裏切らないって。最後まで淳のそばにいるって。彼はわたしに夢を取り戻させたいって言ってた。わたしを助けてくれたのは、ゆきの、あんただけど、わたしの背中を押してくれたのはジョーカーだったんだ。自分だけ助かるなんて、できないよ。ジョーカーを一人にしておけない。わたしは仮面党に戻る」
「彼は大丈夫だよ」
ゆきのはきっぱり請け合った。杏奈はむっとして言い返した。
「簡単に言わないでくれる。あんたはジョーカーを知らない。彼は一人きりで苦しんでる……」
「一人じゃない」
ゆきのは首を振った。
「周防が助けるよ」
「周防? まさか。ジョーカーは……淳は、彼を恨んでる。周防が昔、淳の大切な人を殺したから。あの二人はきっと殺し合うよ」
「誤解なんだよ。全部、誤解。淳の大事な相手は死んでなんかいない。憎ったらしいくらいピンピンしてるよ」
「……どういうこと?」

淳は確かに、周防達哉が殺したと断言した。十年前の夏。アラヤ神社で。
ゆきのは「うーん」と唸って、かぶっている帽子の上から自分の頭を軽く叩いた。
「説明すると長くなる。あたしゃ頭悪いから、わかりやすい説明ができないんだ。簡単に言うとね、淳の記憶は全部間違い。おわり」
「……簡単すぎ」
「つまりね……えーと……淳や達哉たちは、十年前に友達だったんだよ。アラヤ神社に集まって、みんなで縁日のお面をかぶって遊んでたんだって。中学生だった舞耶さんは、子供たちのいいお姉さんで、みんなから慕われてた。ところが、そこへ事件が起きたんだ。社の中に舞耶さんや周防を閉じ込めたまま、神社が燃えちまった。火をつけたのはレオ——須藤竜也だ。結局、淳たちは離れ離れになって、二度と会わなかった。淳は、事件の原因が周防だって誤解したまま、ジョーカーになっちまったってこと」
「それじゃ……」
淳の悲しみも、怒りも、すべて間違った記憶のせいだったというのだろうか。
十年間。そんなにも長い間、彼は偽りの記憶に踊らされ、絶望の闇にとらわれていたのだろうか。
「それじゃ、かわいそうだ。ジョーカーが……淳が、あまりにもかわいそうだよ」
「そうだよ。だから、周防が助ける」

ゆきのはうなずいた。

「あいつなら、絶対やる。自分の命を賭けてでも、淳を助ける。あいつはそういう漢だよ。あたしは信じてる」

杏奈は、周防達哉の力強い目を思い出した。

強くて、優しい目をしていた。ただ真っ直ぐなだけじゃない。深い悲しみも、怒りも、絶望も、すべて呑みこんで前へ進む、そんな力強い目をしていた。

本当に、やるかもしれない。

周防達哉なら。淳を助けられるかもしれない。

自分がこんなに楽天的な気持ちになれるのが不思議だった。これまでの杏奈なら、最悪の結果を先回りして想像し、投げやりになるところだ。だが、今は信じることができた。ゆきの、達哉、そしてリサや舞耶。彼らなら、きっとやってのける。連中には、世界を動かすほどの力がある。

「子供のころ、夢中になって友達と遊んだ思い出は、人間の記憶の中で一番綺麗なもんだよ。それを穢すやつは、許しちゃおけない。大丈夫、淳はきっと戻ってくる。堂々巡りから抜け出して、周防たちのもとへ戻ってくるよ」

ゆきのは笑った。

言葉にはしなかったが、杏奈には伝わってきた。

たから、あんたもおいで。闇の迷路から出ておいで。

ゆきのは歩き出した。振り返りもしない。杏奈が一緒に来ることを確信しているらしかった。

杏奈は肩をすくめ、ゆきののあとに続いた。

「ねえ」

「何」

「俊介って誰」

杏奈はゆきのと肩を並べ、その横顔を見上げた。ゆきのはわずかに表情を緊張させた。

「あたしの雇い主。あたしは彼の助手だったんだ。カメラのことは一から十まで彼に教わった。技術的なことだけじゃなく、カメラマンの心までもね」

「死んだの？」

気遣いはかえってゆきのを傷つける。そう思ったから、単刀直入に聞いた。

「──うん」

「その人、ゆきのの恋人だったの？」

「違うよ。あたしの片思い」

「……ふうん」

「俊介さん、最期に言ったんだ。星をつかめよ……って。ひどいよね」

ゆきのは笑い声をたてた。乾いた、作り笑い。

「自分はさっさと死んじゃって、あたしを一人にしてさ。あたしの夢は、俊介さんと一緒に世界中を回ることだった。もちろん、二人でカメラを持ってね。あの人とだったらどこへでも行ける。この星に満ちてる悲しみ……戦い……貧困……すべて、目を背けることなく見つめることができる。そう思ってた。そんな風に生きてみたかった。なのに……死んじゃった」

語尾が震えた。

ゆきのは目をこすった。涙を見せまいと必死になっている。

「……みっともないね。赤目のヤツが言ったこと、当たってるんだ。あたしは迷ってる。怖くて仕方がない。俊介さんがいない。あたしは、一人じゃ何もできない」

「一人じゃないよ」

ゆきのは驚いたように杏奈を見た。杏奈はゆっくり、言葉に力をこめて繰り返した。

「一人じゃない。わたしがいる」

ゆきのはよほどびっくりしたらしい。しばらく絶句した後、感極まったように唸った。

「驚いたねぇ……まさか、あんたからそんな言葉を聞くとは」

「悪い？」

「悪いわけないだろ。嬉しいよ。ありがとう」

杏奈は顔を背けた。赤くなった頬を見られたくなかった。

カラコルをさらに下へ下りてゆく。冥府行——だが、一人で彷徨ったときのような不安は感

じなかった。隣にゆきのがいる。どんな敵が現われても、力を合わせて戦える。
「赤目……何者だったんだろう」
杏奈はつぶやいた。
どうやら、最下階にたどりついたようだった。足音の響き方がこれまでの階と違う。
「ん？」
「なんで、あいつ、ゆきのにそっくりだったんだろう。ペルソナまで」
「あいつは、あたしの影だからさ。偽者だったわけじゃない。あいつもやっぱり、黛ゆきのだったんだ。あたしの中には、あいつと同じ心がある。苛立っていて、狂暴で、すぐ周囲に当たり散らしちまう心がね……」
この奥に、ジョーカーの言った「時の円環」があるはずだ。ゆきのも杏奈も、足を速めた。
「ちょいと、つらいね。自分の中の一番醜い部分を見せつけられたみたいで」
「大丈夫。わたしが殺したから」
杏奈はぼそっとつぶやいた。ゆきのの足が止まった。杏奈は歩き続けながら言った。
「ゆきのを苦しめるものは、何人出てきたってわたしが殺してやる。だから大丈夫」
「……あんた」
ゆきのがあわてて追いかけてくる。あきれたような声。
「平然と、おっそろしいこと言うね」

「そう？」
ゆきのを振り返って、微笑みかけたときだった。
激しい揺れが襲ってきた。杏奈とゆきのは折り重なって床に倒れた。
地鳴りのような音が響く。カラコル全体が鳴動している。床が波打ち、二人は嵐にあった小舟のように翻弄された。目が回りそうだ。
「何……地震!?」
「違う」
ゆきのは杏奈を庇いながら天井を見上げた。
確かに、地震の揺れとは違う。大地がゆっくり回転しているようだ。
杏奈はゆきのに支えられながらやっと起き上がったが、足元がふらついた。見えない力で上から押しつけられているような感じがした。
「シバルバー……」
ゆきのは舌打ち交じりにつぶやいた。
「いよいよ浮上しちまったらしいね」
「……浮上？」
杏奈は、テレビのワイドショーでのオカルト評論家たちのトークを思い出した。
シバルバーとは、冥府の謂。イン・ラケチは、それを珠間瑠市の地中に埋まった巨大な宇宙

船と結論づけた。はるかな星から訪れ、戦いの末に力を使い果たした者たちが眠る場所。シバルバーが浮上するとき、眠れる種族がよみがえり、人類は新たな進化を遂げる……。
「地下の宇宙船が浮き上がったってことは……」
「シバルバーの上には珠閒瑠市が丸ごとのっかってる。街が宇宙船の上にのって、浮き上がったってことだ」
「そんな……」
杏奈とゆきのは顔を見合わせた。
「急ごう」
ようやく揺れが収まった。ゆきのは走り出した。杏奈も後に続く。
やがて、前方に巨大な扉が見えてきた。肌がぴりぴりする。ペルソナ使い同士が接近すると、互いに感応し合う。扉の向こう側にいる者たちの存在を、杏奈のペルソナが鋭く感じ取っている。
周防達哉たち。そして淳がいるのだ。
「結局、周防は間に合わなかったってこと……？」
杏奈のつぶやきに、ゆきのは怒ったように答えた。
「バカ。まだ諦めるんじゃない。言っただろ、周防ならきっと淳を救えるって」
しかし、シバルバーは浮上してしまった。外では大混乱が起きているはずだ。死傷者も多数

出ているだろう。それなのに、まだ希望を捨てずにいられるのだろうか……？

ゆきのは扉に手をかけて杏奈を振り返った。

「いいね？」

杏奈はうなずいた。ゆきのが扉を押し開けた。

途端に、まばゆい光に目を射られた。杏奈は目の前に手をかざした。

広い部屋だった。前方に、奇妙なものが見える。壁に埋めこまれた巨大な光輪が、金色の光を放っている。

一目でわかった。あれが、時の円環だ。

杏奈はゆきのに続いて広間に踏み込んだ。何度も瞬くと、ようやく光に目が慣れた。

異様なものが視界に飛び込んできた。杏奈は立ちすくんだ。

巨大な翼を広げた怪物。顔はジョーカーの仮面に覆われている。

——天使？　それにしては、あまりにも邪悪な、異形の姿だった。

その足元に、女が倒れていた。長い黒髪が乱れ広がっている。クイーン・アクエリアスだった。

「ユッキー！」

舞耶の声がした。天使に気を取られていて、気付くのが遅れた。周防たちが敵に対峙している。

ゆきのは杏奈を振り返って、言い聞かせた。
「あんたはここで見ておいで」
「でも……」
「手を出すんじゃない。周防に任せるんだ。淳を救えるのはあいつしかいない」
杏奈は忙しく視線を走らせた。
異形の天使の手に、光の剣が握られている。彼はそれを薙ぎ払った。間一髪、達哉たちは四方に飛んで攻撃を避けた。
杏奈がロンギヌスたちとやりあっている間に、淳はカラコルの最深部へ到達していた。クイーン・アクエリアスを倒したのは達哉たちなのか。だが、その後で何が起きたのか、杏奈には想像がつかない。アクエリアスとともに。なぜ淳はあのような異形に変じてしまったのか。誰が時の円環を作動させたのか。
「やめて、淳！」
リサが泣きそうな声で叫んだ。
「誤解なんだってば！　舞耶ちゃんは死んでない、ここにいるよ！　もう苦しまないで……こっちを見てよ……あたしたちを見てよ、淳！」
「思い出せよ。フェザーマンの仮面かぶって遊んだじゃねえか。暗くなるまで夢中になって……あんなに楽しかったじゃねえか。オレは一番ドンくさくて、転んでばっかりいてよ。おまえ、

よく助けてくれた……思い出してくれよ、淳……！」

青髪の少年も、声を限りに叫んでいる。

天使が咆哮した。杏奈は耳をふさぎたくなった。昏い怒り――そして胸の裂けそうな悲しみに彩られた声だった。

真っ先に動いたのは、周防達哉。

ペルソナが発動する。紅蓮の気をまとった破壊の王が降臨した。

ペルソナの指先から、巨大な火球が放たれる。容赦なく天使を直撃した。天使は壁に叩きつけられた。

「情人!?」

リサが、信じられないと言いたげな顔で振り返る。

「ダメだよ！　淳を殺す気!?」

達哉は聞き入れなかった。体勢を立て直す隙を与えず、第二撃を繰り出す。天使の翼から、雪のような羽毛が散った。

「タッちゃん……」

青髪の少年は絶句している。

杏奈は両手をきつく握りしめた。じっとり汗ばんでいる。

こんな戦いは見たくなかった。傷つけられた淳と同じくらい、達哉も傷ついている。彼の心

が血を流している。
淳を救えるのは達哉しかいない。ゆきのはそう言った。だが、その方法がこんな凄絶な戦いしかないのだとしたら。残酷すぎる。
「行くわよ、みんな」
緊張を破ったのは舞耶だった。リサが唖然として舞耶を見る。
舞耶は天使を見据えていた。達哉と同じく強い――優しい目で。
「淳くんを助けるわよ！」
叫ぶと同時に、舞耶はペルソナを発動させた。
これまで杏奈が見てきた限り、舞耶のペルソナは、傷ついた味方の回復や補佐の役割を果たすことが多かった。しかし今は違った。暖色のオーラをまとったペルソナが、聖なる槍を放つ。真っ直ぐに飛んだそれが、天使の翼を撃ち抜く。
「舞耶ネエ……」
苦しげに呻いたのは、青髪の少年だった。
覚悟を決めたように顔を上げる。彼の身体から、暗黒の気が立ちのぼった。この少年のペルソナは、青ざめた死神の相をもつ。
続いてリサも戦いに加わった。杏奈はじりじりと後じさった。
ゆきのの言う通りだ。手を出せる状況ではない。これは彼らの戦いだった。

いったん守勢になった淳だが、すぐさま体勢を立て直した。彼が放った電撃が達哉を撃つ。倒れた達哉を、リサが庇う。

天使の翼が大きく広がった。徹底的に達哉を狙ってくる。

青髪の少年が飛び出した。相打ち覚悟の無謀な攻撃だ。淳の注意を達哉からそらそうとしている。

天使は身体を反転させた。青髪めがけて光の剣が伸びる。

斬られる——と見えた瞬間だった。

達哉が渾身の力をこめて、攻撃を放った。

炎の奔流が、蛇のようにうねりながら空間を走る。

一瞬、天使の身体が紅蓮に包まれた。翼が炎上し、形を失って崩れてゆく。青髪の少年の身体は、あおりを食らって吹き飛ばされた。

杏奈は目を閉じた。

——殺してしまったのか。

淳は結局、救われぬまま友によって殺されてしまったのか。確かめるのが怖かった。

静寂が訪れた。杏奈はようやく目を開けた。

達哉が、舞耶が、リサが立ち尽くしている。青髪の少年も起き上がった。

杏奈のかたわらには、ゆきのがいた。今の戦いを、息を止めて見守っていたらしい。細く長

いため息が漏れた。
たった今まで邪悪な天使が跳梁していた空間に、一人の少年が倒れていた。
達哉がゆっくり近づいていった。彼の仲間たちも後に続く。
杏奈とゆきのは、彼らの後ろに立って見守った。
「淳くん……」
舞耶が心配そうに呼びかけた。淳の身体がかすかに動いた。
死んではいない。杏奈はようやく安堵した。
達哉がかがみこみ、淳を抱き起こした。
ジョーカーの仮面は砕け散っていた。淳の素顔は杏奈が見覚えている通り、美しかった。ただ、今はまったく血の気を失っている。肌は凍えたように白く、瞳に力がない。
「達……哉……」
淳はかすれた声でつぶやいた。
リサが歓声を上げて淳に飛びつこうとし、彼の怪我の具合を見てあわてて手を引っ込めた。
「目が醒めたんだね、淳！　良かった……ほんとに良かった！」
「リサ……」
淳はまぶしそうに目を細めて、かつての友人たちを見回した。
達哉の腕を振り払って、彼は立ち上がった。今の戦いで傷ついた身体を、無理やり引きずる

ように。

「僕は……」

弱々しくつぶやくと、彼は首を振った。

一歩、後じさる。達哉たちから逃げるかのように。

「淳?」

リサがもどかしげに呼んだ。

「どうして、淳。思い出したんでしょ? あのときアラヤ神社で何があったか、思い出したんでしょ? 悪いのはわたしだった……ワガママ言ってお姉ちゃんを困らせたわたしたちだった。情人は、達哉はちっとも悪くない。お姉ちゃんは助かったし、淳が苦しむことなんて全然ないの。ねえ、思い出したんでしょ?」

「僕……は……」

淳の自我が揺らいでいる。

杏奈は戦慄した。達哉の無実を訴えるリサの言葉は、逆に淳を追い詰める。達哉に罪がないとすれば、淳は達哉を憎む理由をなくす。逆に、淳の罪が浮き彫りになる。

偽りの記憶に踊り、ジョーカーと化して街を混沌に陥れた。多くの人を傷つけ、戦いを引き起こした。その罪の深さに、彼は打ちのめされてしまう。

ようやく、正しい記憶を取り戻したというのに。彼を待ち受けているのは、新たな地獄でし

かないのか――。
「淳くん！」
場違いに明るい声が響いた。
舞耶だ。息苦しいほどの緊張を破る、能天気な声だった。
舞耶は大きく両手を広げた。
「やっと会えたね。ずっと待ってたんだよ。淳くんが帰ってきてくれるのを、みんなずっと待ってたんだよ」
「そ、そうだ」
青髪の少年が言った。見かけによらず涙もろいらしい。すでに涙声になっていた。
「淳よう……おまえのために、オレたちゃここまで来たんだからな……今さら水くせえこと言うんじゃやねえぞ。オレは聞きたくねえ」
淳は戸惑ったように一行を見回した。
舞耶。リサ。青髪。不安げに揺れた視線が、達哉のところで止まった。
達哉は何も言わず、ポケットから何か小さな物を取り出した。
ライターだ。杏奈は、達哉がこれを大事にしてるのを、クラスメートだったころに何度か見たことがあった。
周防のやつ、煙草も吸わねえくせにジッポなんて持ってんの。カッコつけやがって。男子生

徒たちがひやかしていた。

淳の表情が変わった。ためらいが消える。切れ長の瞳に力が宿った。

「それ……持っててくれたのか。十年前、僕が君にあげた……君の時計と交換したライターだね。ここに文字が彫ってある。『大切なことは目に見えない』……」

淳は自分の左腕を差し出した。手首にはめられた腕時計を示す。

「僕も持ってる。君がくれた時計。ずっと大事にしてた……君のこと憎んだはずなのに、どうしてもこの時計だけは捨てられなかった」

文字盤を確かめて、淳は目をみはった。

「……動いてる。ずっと止まってたんだ。壊れてしまったと思ってたのに……」

「それでも時は巡る」

達哉がつぶやいた。淳は弾かれたように顔を上げ、震える声で続けた。

「僕らはバラの花との約束を守らなければならない……そう。思い出した。僕ら、誓ったね。バラの花を……お姉ちゃんを守ろう。それを僕らの合言葉にしようって。なぜ忘れてたんだろう……そんな大事なことを……僕は……」

淳は絶句した。

「淳くん」

進み出たのは、舞耶だった。

彼女の手に、一輪の花が握られていた。ポケットにでも挿していたのだろうか。花はぐったりして萎れかけていたが、美しい色はまだ褪せていなかった。

舞耶はそれを、そっと淳に手渡した。淳はためらいながら花を受け取った。

「ネモフィラ……？」

「そうよ。花言葉は『わたしはあなたを許す』」

舞耶は淳にうなずきかけた。淳は萎れかけた花を抱きしめた。

何度も、何度も瞬く。だが、もう先ほどまでのような混乱はなかった。怯えも迷いも消えうせていた。

ようやく、あるべき場所に戻ってきた喜び。長い旅を終えた安息。淳はほうっとため息をついた。

淳は、少し離れた場所に立っているゆきのと杏奈に気付いた。杏奈と目を合わせると、淳の顔が再び翳った。彼は杏奈に歩み寄り、囁くように言った。

「……レイディ……」

「違うよ」

杏奈は真正面から淳の顔を見た。

初対面の相手に名乗るように、はっきり、大きな声で告げる。

「わたしは、吉栄杏奈だよ」

淳は驚いたような顔をして、それから、杏奈の横に立っているゆきのを見た。

何が杏奈に起きたのか。誰が、杏奈の殻を打ち破ったのか。一瞬で察したらしい。淳の顔がほころんだ。

あんたのおかげ。あんたがわたしに手を差し伸べてくれたから。あの暗い路地で。わたしにとっては、あの瞬間がすべての始まりだった。

そんな言葉が喉まで出かかったが、結局杏奈は何も言わずに、ただ微笑み返した。

「さて、と」

ゆきのが口を開いた。

「再会の喜びはあとにしよう。ここ、抜け出さないとね。シバルバーが浮上しちまったんだろ。今ごろ、大混乱だよ。早いとこ、街に戻ろ……」

ゆきのの声を、低い笑い声が遮った。

同時に、閃光が迸った。突風が吹き荒れ、杏奈はあわてて姿勢を低くした。

今度は何が現われたというのだろう。ラスト・バタリオンか、それとも未知なる悪魔か。

「——どうした、淳」

嘲笑う声が響いた。

肌が粟立った。深みのある、むしろ美声といってよい声だったが、その底に秘められた悪意はすさまじかった。

杏奈は伏せたままあたりを見回した。
いつの間に現われたのか、時の円環を背に一人の男が立っている。三十代の半ばぐらいか。がっしりした体格の男性だった。精悍な顔に、傲慢なまでに自信にあふれた微笑を浮かべている。
「父さん……」
淳は悲鳴のような声を上げた。
では、あれが淳の父親？　黒須純子の夫にして、セブンスの世界史教師。イン・ラケチを記した妄想狂なのか？
そんな風には見えなかった。妄想であれなんであれ、長年の研究を体系化して本にまとめるような人物ならば、その目の奥に純粋な学究の喜びをたたえているはずだ。たとえシニカルなポーズを装っていても、どこかに子供じみた狂熱を宿しているはずだ。
この男からは、そんな熱さは微塵も感じられなかった。彼の心は冷え切っている。何も愛さず、すべてを無化し、嘲笑する。絶対零度の悪意が感じられるだけだ。
これは人間なのか。生ある者が、これほどの邪気を撒き散らせるものなのか。
幽霊かもしれない。淳の父親は、時計台から落ちて死んだと言われている。冥府にも似たこの地下迷宮ならば、あるいは、死者を呼び戻すことが可能なのかもしれない……。
杏奈は目をこらしたが、男は幽霊らしくなかった。二本の足でちゃんと立っているし、その

足元には黒々と濃い影が落ちている。

　死者でないならば——この男は何者？　本当に淳の父親なのか？

「諦めてしまうのか？　人類をイデアリアンへ導くのがおまえの使命だったはず。途中で投げだしてしまうつもりか？」

「父さん……」

「殺せ」

　男は目を細めた。口角が吊り上がり、無気味な微笑を形作る。

「その連中を殺せ。忘れるな。おまえは復讐を誓ったはずだ。そいつらは敵だ。イン・ラケチの成就を邪魔する者だ」

「父さん……」

　淳は苦しげに首を横に振った。懇願するように、声を振り絞る。

「できない……僕は……僕は、達哉たちを信じる」

「臆したか？　淳、おまえは私の息子だ。私の言うことがきけないのか？」

「父さん……」

「てめ……」

　青髪の少年が激して飛び出そうとしたが、達哉が素早く止めた。

　賭けだった。淳が父の命令を振り切れるのかどうか。

手助けすることは誰にもできない。決めるのは淳。彼の心が再び暗黒の側に傾いたとしても、もはや誰にも止めることはできない。
息詰まる沈黙が満ちた。
淳は、きっぱりと口にした。
「できない」
「――ほう」
「僕は大きな罪を犯した。もう二度と繰り返さない。僕は達哉から離れない」
「それがおまえの答えか？」
男は嗤った。
杏奈はうずくまって胸を押さえた。気分が悪くなる。どす黒い邪気が忍び寄ってくる。
「ならば、もはやおまえに用はない。愚かな息子よ――この愚劣な世界とともに滅びるがいい！」
哄笑を残して、男の姿は掻き消えた。
何かが落ちてきて、杏奈の肩に当たった。杏奈は天井を見上げた。
破片が続けざまに落下してくる。カラコルが崩れ始めている。
「やば……」
ゆきのが焦った叫び声を上げた。
達哉が素早く淳の腕をつかまえた。淳はまだ放心したように、父の立っていた場所を見つめ

ていた。
「逃げるよ、杏奈！」
「う、うん……」
しかし杏奈は、ゆきのから離れて、扉とは逆の方向へ走った。
「何やってんの！」
怒鳴られたが、杏奈はかまわずに、クイーン・アクエリアスに駆け寄った。
仮面をかぶったまま倒れているのが救いだった。苦悶の表情は見たくない。
手首を取り、脈をみた。予想はしていたが、すでに事切れていた。
杏奈はチャクラムを取り出して、アクエリアスの手に握らせた。
「……返すよ」
もはや届かぬ相手へ囁く。
違和感が消えない。黒須純子が語った夫の像は、たった今現われて淳を連れ去ろうとした男とは、百八十度違っていた。
オカルト狂。妻にガラクタをプレゼントするような唐変木。どうしても世間と折り合わなかった半端者。悲しいほど一途な、不器用すぎる世界史教師。何が彼を、あんな怪物じみた冷血漢に変えたのだろう。
杏奈にはわからない。ただ、このチャクラムはアクエリアスに返してやりたかった。

今の彼がどんな怪物に変じてしまったとしても。これをお守りだと言って妻に贈ったときの気持ちは、本物だったはず。不器用ななりに、精一杯の優しさで妻を守ろうとしていたはず。そう信じたかった。

「早く、杏奈！」

ゆきのの怒鳴り声が聞こえる。杏奈は立ち上がり、振り返って答えた。

「今行く……」

その瞬間、視界が白く弾けた。

床が消えた。杏奈は空中に放り出された。だが、重力を感じない。まるで白い水の中を泳いでいるかのように、手足がゆっくり動く。

――ゆ・き・の。

呼ぼうとしたが、声が出せなかった。

何も見えない。何も聞こえない。ゆきのも、達哉も、淳も、みんな消えていた。

――わたし……死んだ？

虚無(きょむ)の海を漂いながら、杏奈は不思議な気持ちで思った。

頭の芯(しん)が、すーっと冷たくなる。

杏奈は意識(いしき)を失った。

6

暮れかけた空に、数羽の鳥が群れをなして飛んでいた。

そろそろ巣に帰るのだろう。のどかな光景だった。まるで、異変など何も起きていないかのよう。今日は昨日の続きで、明日は今日の続き。そんな約束が、いまだに通用しているかのような。

だが――そんなはずはない。

シバルバーが浮上したのだ。珠閒瑠市は現在、地上数キロの高さに浮遊しているはずだ。ここにいる限り、とてもそんな実感はないのだが。

……ここ？

ここって、どこ？

気がついたとき、杏奈は石段に座りこんでいた。

鳥たちはねぐらへ帰った。空は刻々と色を変え、夜への準備を整えている。真っ直ぐ天を差

す木々が、魔女の指のようなシルエットになって浮かび上がっている。
視線の先に、赤い鳥居が見えた。
神社だ。杏奈は、アラヤ神社の石段に腰かけているのだった。
わけがわからない。覚えているのは、崩れ始めたカラコル。クイーン・アクエリアスにチャクラムを握らせ、ゆきのの元へ駆け戻ろうとしたとき、突然強い光に目を射られた。床が消えて、白い海みたいなところを漂って、そのまま意識を失って……。
それが、なぜこんなところにいるのだろう。
夢でも見ていたのだろうか。カラコルも、ロンギヌスたちも、淳たちの戦いも、すべて夢……？
違う。
杏奈は自分の服を確認した。ロンギヌスの槍で突かれたところが裂けている。ひどい有り様だ。あれは断じて、夢ではなかった。
では、いったい何が起こったというのだろう。崩れたカラコルから、どうやって脱出できたのだろう。
考えこんでいると、声が聞こえた。
「杏奈！　いたいた」
ゆきのだ。杏奈はぱっと立ち上がった。

ゆきのは社の前に立って手を振っていた。達哉や舞耶たちも一緒だ。達哉のかたわらには淳がいる。

杏奈は彼らのほうへ駆け寄った。ゆきのはほっとしたような笑顔を見せた。

「無事だったんだね。良かった」

「ゆきのこそ。何があったの？　急に周囲が真っ白くなって、気がついたらここにいたんだけど」

「フィレモンの力さ」

「ひれもん？　何それ」

「えーっと……簡単に言うと、金色のちょうちょ」

「……簡単すぎ」

ゆきのは自分の頭をコツコツやった。

「うー……うまく説明できないな。あいつが何者なのか、あたしも知らない。時々現われて、あたしたちを助けてくれたり、しちめんどくさいことを言ったりするんだよ。人にペルソナを授けるのも、彼の力」

「わたし、そんなヤツに会った覚えないけど」

「あー……あんたのペルソナは、また別みたい。フィレモン経由じゃなくて、裏口なんだよ」

釈然としない説明だが、ゆきのには論理的な話は無理そうだった。

「君のペルソナは、僕が与えた」
淳が口を開いた。
おだやかな顔をしている。もう大丈夫だと、杏奈は確信した。
彼は勝ったのだ。彼を操ろうとする悪しき力に。
もう、何があっても彼は折れないだろう。たとえ揺らぐことがあったとしても、達哉たちがそばにいる。きっと淳を支えてくれるはず。
「正確に言うと、僕じゃなくて父さんが与えた。四天王にペルソナの力を授け、インラケチ成就のために動かすのが、父さんの計画だったから……」
「淳よう、おまえのオヤジって……なんだ。なんなんだ」
青髪の少年が、ぶるっと身震いして尋ねた。
「オレたち、昔、会ったことあったよな。おまえ、よく自慢してたもんな。すげーかっこいい父ちゃんだって。オレたちがこの神社で遊んでると、おまえのこと迎えに来てよ……確かにかっこよかったけど、なんか怖かったぜ。威厳がありすぎて。あのころから全然老けてねーのな」
「人にペルソナを与えるなんて、人間の仕業じゃないわ」
舞耶が言った。
「そんなことができるのはフィレモンだけだと思ってた。どうなってるのかしら……」
「……父さんを止めよう」

淳は全員の顔を見回した。
「これ以上、イン・ラケチを実現させてはいけない。今さら僕がこんなことを言うのはおかしいけど……力を貸してくれないか」
ためらいがちな言葉に、青髪の少年が笑い出した。バシッと淳の背を叩く。
「水くせーこと言うなって。オレたちゃ仲間だろ。ミッシェル様に任しとけってんだ」
この少年、ミッシエルというらしい。杏奈は初めて知った。どこから見ても日本人なのに、変な名前だ。
「さて、あたしたちはここでお別れだ」
ゆきのが言った。舞耶が目をみはる。
「お別れって？　どうして、ユッキー。一緒に来てくれないの？」
「あんたたちには淳がいる。あたしは杏奈と行くよ。街は混乱してるだろうし、ラスト・バタリオンもまだのさばってる。あんたたちが戦ってる間、あたしたちは街をなんとかするよ」
「……そう」
舞耶はうなずき、杏奈に目を向けた。
「杏奈さん。ユッキーのこと、よろしくね。頼りがいあるけど、結構おっちょこちょいだから」
「舞耶さんに言われたかぁないね」
ゆきのは笑った。舞耶とリサが手を振る。杏奈とゆきのは並んで歩き出した。

鳥居をくぐるとき、杏奈は一瞬振り返って、淳の姿をとらえた。
——ありがとう。
心の中でつぶやく。
あなたの言葉は忘れない。君の炎は消えていない——そう言ってくれた。自分でも消したつもりでいた火を、あなたが見つけてくれた。
もう昔のようには走れないけど、大丈夫。焦らずに、ゆっくり歩いていける。ゆきのがいるから。
淳が、殻を割ってくれたから。

＊

「どうしてくれるのよ!? 電話は通じないし、NHKは見れないし！ テレビは壊れてないのに、珠閒瑠市のローカル番組しか入らないのよ！ どこに文句言えばいいの、こういう場合!?」
「ねえねえ、イン・ラケチって本当だったの？ あたしはトンデモ本だとばかり……」
「家族がいなくなっちまったんだ。家に帰っても誰もいない。明かりはついてるし、茶碗も出しっぱなしなのに……オヤジもオフクロも、どこ行っちまったんだろ」
道路は群衆でごった返していた。不安にかられた人々が、家でじっとしていることができずに飛び出してきたのだ。

みんな、口々に勝手なことを喚いている。シバルバー浮上の現実を認識できずにいる者も多かった。

よくよく注意して見れば、影人間の数が増えていることがわかる。彼らの姿は保護色をまとったように背景と同化しており、意識しなければその存在にすら気付かない。あちこちで行方不明騒ぎがもちあがっているのもそのせいだ。たとえ家族や友人が目の前にいたとしても、影人間は普通の人には認識できないのだ。

「どうして……」

杏奈は疑問を口にした。

「もうジョーカーはいないのに、なぜ影人間が増えてるんだろ……」

「仮面党の活動そのものが終息したわけじゃないからね。イデアル・エナジーを集めてるやつはまだ存在する。率いてるのはたぶん――淳の父親だ」

大通りに出ると、拡声器を使って演説している団体がいた。宗教関係らしい。彼らの声は不自然なほど明るかった。

「喜びなさい。私たちは選ばれたのです。間もなく審判が下り、汚れきった地上は滅び去ります。しかし、この天上の楽園にある限り、怯える必要はありません。堕落した人々が消え去った後、私たちは進化した人類として新たな歴史を築くことができるのです。喜びなさい。私たちは選ばれたのです……」

かなりの人数が立ち止まり、耳を傾けていた。微笑みながらうなずいている者もあった。
ゆきのは足早に通り過ぎながら、嫌悪をにじませた口調でつぶやいた。
「――吐き気がする」
杏奈は相槌を打たなかった。ゆきのと気持ちは一つだった。
新しい人類。選ばれた民。聞こえのいいお題目を唱えながら、その根底にあるのは、究極の利己主義だ。自分さえ助かれば。珠間瑠市さえ無事ならば。外の世界は滅びたってかまわない。
しかし、珠間瑠市の人々だけを責めることはできなかった。それは、ナチスが現われたときに日本国が珠間瑠に対して取った態度と同じなのだ。
あのとき、日本は珠間瑠を見捨てた。珠間瑠さえ封鎖してしまえば、あとの地域は無事だから。市を脱走しようとした人々は残らず射殺されたが、彼らに銃を向けたのはラスト・バタリオンだけではないと囁かれていた。
やりきれない。人は、危機に際してこんなにも脆く、醜くなるのだろうか。エゴをむき出しにして、自分だけは助かりたいと願うのだろうか。
人を踏みつけにしても、友を蹴落としてでも、手に入れたいものがある。クイーン・アクエリアスの言葉を思い出した。そのクイーンも、もういない。あれほど自分の欲望に忠実だった女が、命を賭けてまで守ったのは……心を闇に閉ざした息子だった。
「杏奈、あそこ」

ゆきのの声で、はっと我に返った。
彼女が指差(ゆびさ)す方向を見る。ビルの合間から、ラスト・バタリオンの兵士(ソルダート)が飛び出してくるところだった。
たちまちパニックが生じる。宗教団体の演説に耳を傾けていた人々が、わっと逃げ出した。
兵士は二人。笑っている。怯え、逃げる人々を見て高笑いしている。
銃を持っているが、さすがに乱射(らんしゃ)するようなことはしなかった。ただ、これ見よがしに銃身を振りかざし、人々が悲鳴(ひめい)を上げるさまを楽しんでいる。
人々が逃げ出したあとの、ぽっかりと広くなった空間に、一人の女の子が取り残された。
五、六歳か。足がすくんで逃げ出せなくなってしまった様子(ようす)だった。
保護者は近くに見当たらない。ひょっとすると、影人間となってどこかを彷徨(さまよ)っているのかもしれない。
ぽつんと立ち尽くした子供は、ナチスの格好(かっこう)の玩具(おもちゃ)だった。
二人の兵士は、奇声を発して女の子に駆け寄った。女の子はようやく甲高(かんだか)い泣き声を上げた。
二人は銃の先で女の子を小突き回した。いっとき弄(もてあそ)んで、飽きれば簡単に殺す。彼らのやり口だ。
「杏奈、行くよ！」
言われるまでもない。杏奈はゆきのと同時に飛び出していた。

「こらぁあ！」
ゆきのの叫び声に、兵士たちが振り返る。
銃を構えたときには、すでにゆきのの長い足が振り上げられていた。
銃を蹴り飛ばす。兵士の喉元に手刀を叩き込む。兵士は声もたてずに頽れた。
もう一人の兵士があわてて銃を構えようとした。しかし杏奈がその隙を与えなかった。
ゆきののように場馴れしていないから、がむしゃらに飛びついた。銃をつかんで、向けさせまいとする。
――ペルソナ！
しかし、杏奈の呼びかけに応えはなかった。身体の奥底から湧き上がってくるはずの、あの力が感じられない。
杏奈はたじろいだ。ペルソナが発現すると思ったから、とっさに行動できたのだ。徒手空拳ではナチスに勝てるはずがない。
兵士は、杏奈が怯んだと見て勢いづいた。力をこめて、銃をもぎ取ろうとする。
杏奈は兵士の股間を思い切り膝で蹴り上げた。スマートな戦法にこだわってはいられない。
呻き声を上げてうずくまった兵士を、ぼこぼこに蹴りつける。
「上出来！」
ゆきのが手を打った。兵士たちが取り落とした銃を素早く拾い上げると、ためらいもせずに

狙いをつけた。
銃声が二発。ゆきのが撃ったのは、兵士たちの足だった。
「悪いね。しばらくおとなしくしておいで。ちっちゃい子いじめた罰だと思いな」
銃を肩に担いで、さっさと歩き出す。杏奈は驚嘆しながら後を追った。
「ゆきの」
「何」
「かっこいい」
「他人事みたいに言うんじゃないよ。あんただって相当なもんだよ」
「……ペルソナが」
杏奈は胸に手を当てた。
「出てこない」
「ん？」
「消えたみたい。わたしのペルソナ」
「ああ、そりゃそうだ」
ゆきのには、とっくにわかっていたらしい。
「淳が言ってたじゃないか。あんたにペルソナを与えていたのは、淳の父親。あんたが仮面党から離れた以上、当然ペルソナは抜き取られてるよ」

「ゆきののは？」
「あたしのペルソナも、もうないよ。ノシつけて返上した」
「どうして」
「必要ないからさ」
不可解だった。必要ないはずはない。街にはまだ、今みたいなラスト・バタリオンがあふれているのだ。ペルソナがあったほうが圧倒的に有利に決まっている。
杏奈の不服を読み取ったのだろう。ゆきのは言った。
「確かに、ペルソナを使えればラクだろうね。でもね、影が死んだときに思ったんだよ。ペルソナってのは、結局、自分の中のもう一人の自分だろ。あんまり慣れすぎて、頼りすぎてると、いつか乗っ取られる。またあの赤目みたいのを呼び出しちまうってね」
「そう……かな」
「安易に使うもんじゃない。本当に必要なときだけ頼ればいいのさ。あたしにゃもう必要ない。あたしのペルソナは、淳に譲ったよ」
「淳に……？」
「うん。あいつが持ってたジョーカーのペルソナは消えたからね。代わりが必要だった。これから戦わなきゃならないのは、あいつだから。譲った」
「淳たちは、これからどうするんだろう……？」

杏奈は、カラコルで聞いた悪魔的な哄笑を思い出した。
「クソ親父と戦うのさ」
父親——本当に？　イン・ラケチを記したのは、彼なのか？
信じられない。十年前の事件の誤解は解けたが、まだ何かが間違っている気がした。
世界の歪みは、いまだ修正されていない。混沌が、人々を弄んでいる。因果を狂わせ、不協和音を奏でている。
「淳たち……勝てるのかな」
「勝つよ。言っただろ、周防は大した漢だって。あの連中なら絶対にやりぬくさ」
杏奈はゆきののを見上げた。
不安は消えない。だが、ゆきのの明るい顔を見ていると、信じたくなった。
歴史が変わりつつある。巨大な力が、世界をどこかへ押し流そうとしている。
未来がどんな図を描いているのか、人間にはわからない。流れの果てにあるものは、破滅なのか、救済なのか。
しかし、手探りで歩いていくことはできる。ゆきのが言った通り。迷いながら、つまずきながら、歩いていくことはできる。
シバルバーは、珠間瑠市を丸ごと空中に押し上げていた。蓮華台を中心に、平坂、夢崎、青

業、港南の全区が揃っている。ショップやレストランもたくましく営業を続けていた。街を歩いている限り、空に浮いているという実感はわかない。

ゆきのの提案で、武器と防具を揃えておくことにした。ペルソナが消えたからには、生身で戦えるだけの装備を整えなければならない。

青葉区の「ロサカンディータ」と「クレール・ド・リュンヌ」の二軒で、それぞれ買い物をした。かなり値段が張ったが、ゆきのは現金で支払った。金の出所を尋ねると、「カジノ」と明快な答えが返ってきた。

武装を整えて街へ出る。早速ゆきのが舌打ちした。

「また出た」

ラスト・バタリオンだ。今度は、若者たちのグループを襲っている。

ゆきのと杏奈は目で合図を交わし、同時に飛び出した。

敵は四人。さっきより多いが、今度はこちらにも武器がある。防弾の備えも完璧だ。怯むことなく、戦える。

ゆきのは敵兵一人の足を撃ち砕き、もう一人の頭を銃身で殴りつけて戦闘不能にした。杏奈も傍観してはいられない。見事な手際というわけにはいかなかったが、なんとか敵一人をぶちのめして沈めた。

残るは一人。ゆきのが鋭い気合いを発し、短刀を投げつけた。

敵はかろうじて避け、ゆきのに向かってきた。その隙に、杏奈は倒れている少女を助け起こした。他の若者たちは逃げ出していたが、この子だけが逃げ遅れたのだ。
ふくらはぎから血を流している。弾丸がかすめたらしい。
「大丈夫？」
声をかけて抱き起こし、驚いた。相手もびっくりしたように目を見開いている。
ノリコだった。
平坂区の爆破で別れて以来だ。あのとき、怪我人を見捨てて去った杏奈に、ノリコはありったけの侮蔑をこめて叫んだ。
——バカ。
ノリコの顔が強ばっている。杏奈は少々気まずい思いをした。今さら、人助けの場面を見られてしまうとは。
しかし躊躇している場合ではない。ぐずぐずしていれば、ゆきのの足を引っ張ってしまう。
「おいで」
ノリコを庇い、肩を貸しながら、安全な場所まで避難させる。
「ここでじっとしてて」
言い聞かせて、ゆきのの元に戻ろうとした。だが、ノリコが杏奈の腕をつかまえた。
思い詰めたような顔で、杏奈を見上げる。もともと赤ん坊みたいに大きな目を、こぼれ落ち



そうなほど見開いている。
「お姉さま……」
杏奈はぷいっと顔を背けた。ノリコは涙声で続けた。
「ごめんなさい……わたし……お姉さまにひどいことを……」
杏奈はつかまれた腕を振りほどこうとしたが、ノリコはコアラのようにしっかりしがみついてきた。
「ごめんなさい……わたし、バカで……お姉さまのこと誤解して……」
「いいから」
「許してください。お姉さまは……杏奈お姉さまはやっぱりわたしが思ってた通りの……」
「離して」
辟易した。蹴り飛ばしてやろうかと思ったが、一応、怪我人だ。自制した。
「離しなさい。ゆっくりしてる暇はないの」
言い聞かせると、ようやくノリコは腕をほどいた。
踵を返した杏奈の背中に、ノリコははにかんだような声をかけた。
「お姉さま……変わりましたね。以前よりずっと表情が優しい……」
杏奈は振り返らなかった。
ついさっき、宗教団体の演説に嫌悪を感じたばかりだが、実は自分も彼らと似ていたことに、

今さら気付いた。
老女を助けたノリコを、バカだと思った。怪我人を救出しようと爆破現場に戻る人を、偽善者だと思った。
お節介は嫌いだと嘯いて、自分を守ることしか考えていなかった。結局、自分たちは選ばれた民だと誇らしげに語る連中と同類だった。
杏奈が変わったのだとしたら、それはもちろん、ゆきののおかげだ。
ゆきの。最後の敵を片づけて、パンパンと手をはたいている。杏奈は駆け寄って、ノリコのほうを振り返った。
ノリコは二人のほうを見て、ぺこっと頭を下げた。
よろめきながら立ち上がり、足を引きずって去ってゆく。大して重傷ではないから、病院で手当てを受ければ完治するはずだ。杏奈のように走れなくなることはないだろう。
「知ってる子？」
ゆきのが聞いた。
「べ……」
別に、と言いかけて、やめた。それが口癖だと淳に言われたことを思い出したのだ。
「まあね」
あんまり変わらない気もしたが、言い直して杏奈は笑った。

「ねえ、ゆきの。この戦いが終わったら……」
「うん？」
「なんでもない」
ゆきのは怪訝そうな顔をした。
「なんだよ。変なヤツ」
戦いが終わったら。
旅に出よう。ゆきのの夢だった、カメラを持った旅。
嘆く人、喜ぶ人、貧しい人、豊かな人、すべてをファインダーにおさめて、世界の果てまで行ってみよう。

この戦いが終わったら。
世界が、あるべき姿を取り戻したら。

ペルソナ2は、ハイネの詩から生まれた!?

スペシャルインタビュー



里見直

（「ペルソナ 2　罪」シナリオライター）

発売から1年半以上が経った今も
インターネットの数知れないサイトで熱く語られている『ペルソナ 2　罪』。
その魅力はどこにあるのか、そしてこのゲームはどのように生まれたのか?
シナリオおよび世界観を担当した
アトラスの里見直氏にインタビューした。

小説は杏奈からの視点が新鮮

――小説はいかがでしたか？

里見　楽しく読ませていただきました。

――自分が作ったゲーム、シナリオが小説になるのは、どう思われますか？

里見　刺激になりますね。自分で考えていなかったところまで細かく描写されていくので、新たな発見があります。特にこの作品は杏奈の視点で描かれているので、読んでいて『そっかー、レオが暴れているとき杏奈は街を歩いていたんだ。爆発したときにいたんだ』とか『ノリコに軽蔑されたりしたんだ』（笑）とか、新鮮でした。後半のロンギヌスが出てくるあたりは、ゲームのシナリオとは違っているのですが、ゲームとは違う小説ならではの表現だと思って読みました。

――本作の主人公、吉栄杏奈の人となりというのは、どうやって思いつかれたんですか？

里見　レオや杏奈たち仮面党のメンバーは、最初に主人公たちの裏返しの存在として考えていたんです。だから似たような名前や裏返しの名前をわざとつけた。でもヒーローのまるで裏返しだけでは面白くない。それで、生い立ちから考えていったりして、今の形になったんです。杏奈の場合は、〝若いうちに挫折してどうでもよくなっていたのが、昔同じような経験をした人間に出会うことで再生していく〟という過程をゲームの中に織り込みたいなというのがありました。

　キャラクターを考えてくときは、単体で考えるのではなく相互関係から考えていきます。たとえば達哉と舞耶に対してジョーカーとキング・レオがいるように。黛ゆきのというキャラクターがゲームの中でできること、伝えられることを考えたとき、前作『ペルソナ』の中で、ゆきのはエルミン学園の冴子先生に更正させられているんです。じゃあ今度は彼女が彼女なりの



伝え方で、冴子先生がしてくれたことをやろうとするんじゃないかと思った。その思いの受け皿として、吉栄杏奈というキャラクターが生まれたんです。

――敵役は主人公の裏返しの存在。ペルソナというタイトルは、主人公たちの能力だけでなく、登場人物の人格（ペルソナ）も表しているんですね。

里見　ハイネの詩に『ドッペルゲンガー』というのがあるんですが、その詩を読んだとき、『ペルソナ2』はこれでいきたいなと、思ったんです。『ドッペルゲンガー』という詩は、未練を残して恋人と別れた男が、恋人が住んでいた家の窓を見上げる自分の影を見た……というような詩なんですね。それで、ペルソナ、二面性というものを考えたとき、その詩で読んだ絵が浮かんできて、これをゲームの中にモチーフとして使えればと思った。だから、主人公の周防（すおう）達哉の影として黒須（くろす）を設定したり、対局にいる人物に須藤竜也（すどうたつや）と名付けたりした。二面性というキ



―ワードは、相当意識していました。

若い頃に読んだ小説が発想の原点

――ゲームを作るとき、小説に影響される、触発されることはありますか？

里見 当然あります。最近読んだというよりは、高校生くらいに読んだ本というのは、心の中に蓄積されていて、有形無形の影響を受けているでしょうね。特に菊地秀行さんのファンなので、自分でも影響受けているなあと感じることはままあります。

――読書に費やす時間は多いですか？

里見 仕事するようになってから減ってきてしまったんですけど、高校、大学のときは、勉強しないで本ばっかり読んでましたね。授業より、小説の方が全然面白かった。

――資料として小説を読むことはありますか？

里見 それはないです。かえって創作するとき

は、小説からは遠ざかります。自分が話を作っていくとき、小説とかを読むとそれに引っぱられてしまうんじゃないかという恐怖心があるんですよ。合間合間に読むことはありますが、まさに今作っているときは読まないです。

——自分で小説を書いてみたいと思うことはありますか？

里見　若いときは思いましたね（笑）。

——今も十分若いですよ。

里見　今、三十なんですが、十年くらい前まではそんなことも夢見てましたけど、この業界に入ってこの仕事をしている今、自分に書けるんだろうかという怖さの方が大きいです。ゲームの仕事を始めるとき、まず最初に教わるのが、細部まで決めすぎないということなんです。ゲームはみんなで作っていくものだから、シナリオでイメージを限定しすぎてしまうと、広がりがなくなってしまう。そういう訓練をしてきたから、文字だけで表現するという作業が果たして今の自分にできるのか、という疑問があります。まあ、そのうち時間を見つけて、勉強してみましょうか。何事も前向きに考えないと（笑）。

——ゲームと小説の最大の違いはなんだと思いますか？

里見　自分が小説を読んでいて思うのは、ゲームは絵を見れば一発でどういう場所かわかるじゃないですか。でも、小説だとすべて言葉で表現しなければならないですよね。そのイメージを想起させる、そしてその文章が作家さんによってまったく違うっていうのがすごいです。尊敬してしまいますね。

——この作品に続けて「ペルソナ２　罰」も小説化されますが。

里見　どんな原稿を読めるか、楽しみにしています。

——今日は、お忙しい中、ありがとうございました。

ペルソナ2　罪



機種●	プレイステーション用ソフト
メーカー●	アトラス
ジャンル●	RPG
定価●	2,800円(税抜)
発売日●	2000年9月14日発売

噂が本当になる街・珠閒瑠市。悪意ある噂のため人々は苦しみ、夢見るエネルギーを奪われていった。七姉妹学園に通う周防達哉は、ある日ペルソナの力に目覚め、降魔能力を得た。彼は、同じ能力を持つ仲間たちと、街を救うために立ち上がる。

斬新な噂システム、100種以上のペルソナ、奥の深いストーリー、ユニークな魔法と、どこをとっても超一級のゲーム。昨年には「The Best」シリーズでも発売されている。